

マリア布教修道女会

C e l e s t i n a B o t t e g o



行って私の 兄弟たちに 言いなさい

マリア・デ・ジョルジ
園田義昭 ● 訳

マリア布教修道女会



マリアの宣教会(ザベリオの)創立当時のチェレスティーナ・ポツェゴの面影
1995年/聖座は、マザー・チェレスティーナ・ポツェゴの列福調査を開始した

カバーデザイン ● 山下幸則

出すことでしょう。この伝記をしばらく読み進めば、ポツテゴ女史の人間と精神のドラマの中に「母性」が主導的役割をはたしているのを見いだすでしょう。それは、世界を視野に入れた母性であり、しかも、たずねてくる人々のどんな些細な要請にも気がつく母性です。それは、まれに見る豊かな人間性と、湧き出る清水のようでクリスタルのように透明な信仰とが、みごとに一つになった実です。

そのような母性を真似て描こうとすると、一つに調和している全体の微妙なニュアンスを失うおそれがあります。わたしは次のように強調したいと思います。

「この大いなる信仰の人は、強い性格と、優しさと、愛らしさをあわせもっていました。だれであろうと、訪ねてくる人を、いつでも、喜んで迎え、もてなす人でした。透明で寛大な心で、親密に深く神の御心に添うことだけを常に追い求めていたので、めぐまれた天性に加えて、楽天的で、落ち着いた雰囲気をまわりに広げていました。」

女史の内面の自由は、生まれつきのもので、きわだっていました。それが外には、他者に対する無条件の信頼となつてあらわれ、だからこそ、非常に大きな愛の力になっていました。そのことを、最もよく知っているのは、チェレスティーナの「むすめたち」、つまり、マリア布教修道女会の宣教師たちです。女史は、直接的に、あるいは絶え間ない通信をとおして、その大きな心を彼女たちに注ぎ込み、みなぎらせながら、疲れを知らない人であるかのように彼女たちに付き添っていたのです。

この伝記に描かれているポツテゴ家の独特で魅力あふれる歴史は、チェレスティーナ・

ポツテゴという人のドラマとそのフィナーレを述べるに先だつて記されたプレリュードだと云えるでしょう。マードレ・チェレスティーナの一生は、ただ神のみ摂理にしたがつて、日一日と、見えざる手で神の計画通りに織りあげられます。聖母マリアのように予想もできない状況のなかで、チェレスティーナ・ポツテゴも母性としてのつとめをはたすよう、あらかじめ準備されたとおりに導かれるのです。チェレスティーナも、御手の印しがあらわれたとき、「すべてを」に対して無条件の「はい」をもって応答しました。過去にさかのぼって、すでに一九三一年のことですが、友人あての便りのなかで、ポツテゴ女史はこう述べています——『わたしは、母性であることにあるのがれているではありません。母性への召しだしがないのははつきり感じています。むしろ、マリアのような霊的な母性へみちびかれています。』かなり時がたった今日では、このことばは、予言的にきこえます。この中に、すでにすべてが含まれています。そのときは、想像もしないまま、自らに「定められている人生」の神秘的な意味をとらえていたのです——「マリアの宣教師」という霊的大家族の母となることを。

マリア布教修道女会の宣教師である姉妹マリア・デ・ジョルジが、忍耐と細かい心づかいをもって研究し、マードレ・チェレスティーナの生涯を知る最初の本とまとめた伝記を提供してくださいました。わたしたちは、この贈り物に感謝します。この作品を読むと、「愛の知性」をもってこのマードレの伝記が書かれているのを感じます。愛する人のことを書くとき、装飾と誇張をほどこす危険があるものです。しかし、デ・ジョルジ女史は、事実

がみずから語ることを知っていて、その落とし穴には陥ちていません。女史が書きながら心がけたのは、事実の裏付けを正確に整理して、そこにおのずから正しい姿が浮かび上がるよう配慮することだったと考えます。

もし、現代の特徴は、教師よりも体験的事実の証人の方を信じることにあるという表現が正しければ、その意味でも、この伝記は教会に貢献するものだと思います。

チェレスティーナ・ポツテゴの、キリスト者としての、また宣教師としての生活の証しの今日的意義はきわめて刺激的です。実例が示しているとおり、主のお招きに、おおらかに、無条件でお答えする心の思いを引き出す力をその内にひめているからです。

パルマにて、一九九四年五月二四日

アヴェルサ前司教

十ジョヴァンニ・ガッツァ

はじめに

この伝記は、チェレスティーナ・ポツテゴ生誕百年を記念して出版されるものですが、生き証人たちが今も語りつつあるマードレ・チェレスティーナの生涯の物語以外のなものでもありません。ですから、筆者は、証人たちの生々しい直接的経験をそこなわれないために、脚注や引用文の典拠を付することを故意に避けました。しかし、終始、厳密に原典にもとづいて記述しました。特に、姉妹ピエラ・グランディが忍耐強く長期にわたって調査し収集した資料およびインタビュー記録が、マリア布教修道女会の文書館に今も大切に保管され、そのおかげで、マリア布教修道女会創立以前のチェレスティーナ・ポツテゴの生活の実態と重要な転機を正確に再現することができました。創設の経緯、この宣教会の中でのチェレスティーナの生活についても、文書館の資料にもとづいたことは申すまでもありません。本文中、ゴチック体で書いた部分は、すべて原典からの引用です。

証言は、チェレスティーナが愛すべき女性であり、気品、素直、寛容、謙遜、柔和の人であり、平和を築く人であったという点で一致しています。歴史的に困難な時代であり、異常な状況のもとで、人としての、またキリスト者としての経験を成熟させた女性です。チェレスティーナにとっては、常に、信仰が「灯火と光」であり、それゆえに、全生涯の

生活設計は、ナザレのマリアに同化することでした。マードレ・チエレスティーナは、その人となりのすべてが、根っから宣教師でしたし、現地の教会に深く根を下ろすことをよく心得ていました。深く愛するパルマの教会で、一生懸命に、最善を尽くして働いている若い頃のチエレスティーナの姿がよく見受けられます。あたらしい宣教会の職責上、マードレは頻繁に国外に出かけ、普遍的な立場にある教会の宣教問題に直面しますが、現地の教会に奉仕することも決して忘れない人でした。

今日、チエレスティーナの姿をご紹介することは、わたくしども、個人的にチエレスティーナを知り、その魅力に惹かれているものにとりましては、深い喜びですし、さらに、マードレ・チエレスティーナが生きたモデルであるという認識そのものが、このようにすることを急務であるとせき立てているように思います。激動する世界の中で、若者たちは、有意義で有効な人生のモデルを見つげるのに苦労しているのではないのでしょうか。マードレ・ボッテゴは、女性に、キリスト者に、宣教師に、实际的でインスピレーションに満ちたモデルを提示しています。このモデルは、国籍や文化が異りましても、チエレスティーナに従い学ぶ道を選び、あるいはこれから選ぶほうとしている女性に、ひとしく、魅力をたもち続け、また惹きつけてやまないように思います。

マリア・デ・ジョルジ

行って私の兄弟たちに言いなさい

目次

紹介のことば	1
はじめに	5
行つて私の兄弟たちに言いなさい	15
鉾山で	16
田園の郷愁	20
「この血気にはやる気質をどうしたらいいのか?」	22
クローバーの島	27
一つの家族と二大陸	30
パルマのサン・ラザロ 新しい祖国に気化	35
教育者ボツテゴ	40
ボツテゴ嬢	45
パルマ 沸き立つ教会	57
パルマの司教・宣教者 福者グイド・マリア・コンフォルティ	61

コンフォルティの遺産とチエレスティーナ・ボツテゴの教会奉仕	67
インド旅行と宣教活動の経験	72
第二次大戦中の暗く困難な日々	79
チエレスティーナ ボツテゴ 友情と歓待の人	83
「マリアの名も付けます」	92
神の技術職	96
人間的探究と神の計画	100
摂理的非難生活	106
一九四四年五月二十四日	110
戦争の嵐の中で	113
マリア布教修道女会	119
七月二日	124
一粒のからし種のように	130

年譜	212
あややかな追憶	208
バルマとの別れ	203
「なび、主人、私は何をしますか」	199
「母の胸に居る幼子のわがやうに」	191
『過ぎ越しの種々相』の光の中で	183
「主人、今こそあなたを去らせてくたさずにはなりません」	180

ナザレトの精神で	133
「もし、一粒の麦が死ななければ……」	140
旅しながら宣教する教会	142
ブラジル航路	144
開設の苦勞	151
やむを得ぬ出発	154
世のための家族	158
中央アフリカへ	160
内乱の中で	163
コング——宣教の試練	167
教会の中の春	170
第一回総会	172
新しい母の資格	175

マリア・デ・ジョルジ 著
園田善昭 訳

行って私の兄弟たちに言いなさい

マリア布教修道女会創立者
チエレスティーナ・ボツテゴ伝

行って私の兄弟たちに言いなさい

ヨハネ 20・17

六月の末のある晴れた日、やさしく波打つ山並みの向こうに朝日がのぼりはじめた。ロツキー山脈の斜面にひろがるモンタナ州の鉾山の町ブツテは、幸運をもとめて集まる沢山の移民たちの目的地だった。いま、町は、夜の眠りから覚めて活気を取り戻そうとしていた。山を背にした坑夫たちの小屋には、陽はまだ当たっていない。銅と硫酸塩を豊かに含む不毛の高地の斜面には、なんともいえない赤みがかつた色の小屋が、どうにか見分けられるぐらいだ。あちこちに採鉾用のやぐらがあり、鉾石のぼたやまが荒々しく数十メートルも高く積み上げられていて、それらが鉾山の入り口であることを示している。山麓地帯一面に樹木や植物はなく、起伏の多い高原が、傾斜してゆるやかに村を西から東へ抜けるほこりっぽくて広い道路へさがり、ふたたび斜面をのぼりはじめて、穴だらけの傷つけられた傾斜地と高台になる。採掘場の向かい側にある斜面の中腹に小高い丘があり、そこに堅いモミ材で造った丈夫で住み心地よさそうな一軒の家が目に入る。低い柵をめぐらし、まわりに植えた若い樹木がその家に気品を添えている。入り口の扉に楕円形をした銅のプレートが掛けてあり、ヒーリー・ポツテゴと刻まれている。この地域に広く鉾山と貸家を所有している夫が造ったこの家には、メアリー・ヒーリー・ポツテゴと娘のチェレスティーナ

だけが住んでいた。

一九一〇年六月二十四日、洗者聖ヨハネの祝日だった。いつものように、メアリーは郵便受けから手紙と新聞を取りだした。「サンデー・モーニング」の一週間のニュースを載せている地方版を開き、そこに娘チェレスティーナの写真があり、娘がその学年度の最優秀生に選ばれた記事を見て驚きと喜びに満たされた。

チェレスティーナは、先日、セント・パトリック中学校を最優秀の成績で卒業したばかりだった。家族がわかれて生活している悲しみをかかえてはいたものの、記事を見せようとして、メアリーは、母親らしい誇らしさをもつて娘を呼んだ。チェレスティーナは、十五歳の美しい少女だった。年のわりには背が高く、健康だった。身のこなしはイタリア系の父親に似ていた。顔は品がよく、深い青みを帯びた目が美しかった。透き通った肌のいろとブロンドの長い髪の毛はケルト人のそれであり、アイルランド出身の母親の血を引いたものだった。チェレスティーナは新聞を手にとって読むなり、微笑みながら母親を見上げて、半ばはにかみながら嬉しそうに言った。

『お母さん！お父さんにも見せようね。』

『もちろんよ！』と応えながら、メアリー・ヒーリーは、チェレスティーナの勉強がもうここまでできたのだから、いまこそ、夫のジャン・バツティスタとこどものマリアとヴィットリオが住んでいるイタリアへ発とうと心に決めていた。家族は、いろいろな事情で、もう七年も前から別れて生活していた。

この新聞の囲み記事がチェレスティーナの人生に航跡を残した。過去の出来事が、時とともに色あせ、もつれていく中で、母親と深くむすばれて生活したモンタナの日々を、チェレスティーナ・ポツテゴは、いつまでも大切に憶えていた。

「わたしは、母のそば近くで生活できたことを神のお恵みだといつも考えていました。母は、強さと優しさを兼ねそなえた性格の持ち主でした。生まれつき心が大きくて、アイルランド人特有の深いユーモアのセンスがありました。わたしには、重大なことも話してくれました。一緒に、いろいろな興味深い本を英語で読みました。母のお気に入り詩を味わい諳んずることも教えてくれました。

突然、夫と二人の子供たちと分かれて生活せねばならなくなったことで、とても悩んでいましたが、その悩みを私や他の人々におよぼすようなことは決してありませんでした。私には、事情はよくわかりませんでした。ほかの子供たちのように、気楽でいることもできませんでした。私の喜びは、私にできるかぎりよい教育をほどこそうとする母のそばにいたことでした。母は、音楽、ピアノの練習、家事の手伝いなど、一通りすべてを身につけさせようとしていました」。

イタリアに帰ったチェレスティーナは、自分の中に流れているイタリアの血を知り、愛することを学んだ。アイルランドの血が深く身にしみこんでいたし、アメリカのノスタルジーが消えることもなかったが、自分を生み出した双方の血筋と文化を上手に溶かし合わせて、そこから最善のものを引き出すべきところをえていた。これは、将来果たすべき宣教の使命へ導くみ摂理だった―つまり、異なる民族との間の文化の架け橋、交流の手段、愛の絆となること。

田園の郷愁

一階診療所の小部屋の窓に五月のそよ風が、まぎれもない畑の匂いと馬屋の臭いを運んできた。アゴステイノー・ポツテゴは、疲れ切っていたが気を取りなおすと、ランプの芯を大きくして、読みかけの医学書を照らし、ふたたび読書に耽った。その夜は、とくに疲れていた。数年前からレッジョ・エミーリアのプラティチェツロで始めた医療業務は、農家が遠く離れて散在しているうえ、常時付き添い、治療せねばならないような困難なケースを抱えていた。

彼は、医者のお仕事が好きだった、しかし、ますます大地への魅力がふくらみ、大自然と直接にふれ合い、そのリズムに従い、その秘密を知る生活に憧れた。かなり以前から、すでに自分の計画を妻マリア・アツチネツリに話していたし、ターロの上流にある故郷の谷間で、かつて幾世代にもわたって先祖たちが従事していた農業生活に戻ろうと心は決まっていた。やがてバルマのサン・ラザロにちょうど手頃な土地が見つかる、彼は、プラティチェツロの仕事をやめ、妻と三人の子供、チェレスティーナ、ジャン・パッティスタ、ヴィットリオの大家族そろってサン・ラザロに住まいを構えることにした。

めまぐるしく変動する困難な時代だった。パルマ公国とモデナ公国は、それぞれ領主を

追放したあと、一八六〇年、ピエモンテとの合併を選択した。全国統一への動きの真っ直中であり、独立への戦いが引き起こしたいろいろな問題が人々の中に尾を引いていた。とくに、だれにもまして、後進的で、半ば封建的な性格を持つ農業問題に対価を支払った農業従事者の間ではそうだった。一八六一年三月十七日、トリノ議会在がヴィットリオ・エマヌエレ二世をイタリア国王と宣言したものの、政治的社会的状況は複雑であり、ことに政治には縁が無く、長引く紛争でただ惨めさを強いられた国民大衆の不安はつのつていた。

アゴステイノーは、ただちに、手に入れた大地に取り組んだ。そして、子供たちを教育し、特にギリシヤ古典文学とラテン古典文学への愛情を植え付けた。

「この血気にはやる気質をどうしたらいいのか？」

ジャン・バッティスタとヴィットリオは活動的で、大胆であり、企業家的性格を受け継いでいた。田園の自由な生活と、父親が得意とした古典文学的な理想をめざす教育は、むしろこの二人を刺激して、冒険、危険、探検へ立ち向かわせた。ジェノヴァ出身で、マツチーニ派の活動家であり、パルマに政治亡命していた母方の祖父の血も、このポツテゴ家の二人が、地方の慎ましく閑静な生活には飽き足りず、自由と栄光の夢を描くようになる因子であったのかもしれない。

ジャン・バッティスタは、古典に興味をもつ一方、発明と活動に熱心だった。じっとしていられない性格が、手仕事と新しいものに熱中させた。素朴な方法でトマトを保存するための初歩的技術の開発に没頭したり、大工仕事をしたり、いろいろな仕事をした。父親は、息子があれこれと具体的な仕事に熱をあげては途中で投げ出すのを見て、息子に厳しい条件を課した。そして、二十歳になったジャン・バッティスタは、まとまった金三〇〇リラをもらって世間に出ていく道を選んだ。

当時、多くのイタリア人が生活の悲惨から抜け出し、幸せを得ようとして国外に移住した。統一国家は、農地の深刻な大土地所有問題を解決しようとしなかったし、農業改革と

いう困難な問題に取り組もうとしなかった。農民の脱出は農地を荒廃させた。また、移民制限に関する法律も移民の流出を減少させることはできなかった。自国の港から出港できなくなった移民たちは、ルーヴルやアントワープの港から出航した。それらの港には、全家族をあげた集団が、幾週間も、幾月も、出航する船を待っていた。

ジャン・バッティスタはフランスへ向かい、船がみつかるまで、そのまま北米へ渡った。ヴィットリオは、高等学校を「学業成績および品行ともに優秀」で卒業すると、一八七八年、モデナの陸軍学校、ついでトリノの陸軍学校に入った。十八歳だった。しかし、兵營の生活が自分の冒険好きな性格、知識欲、未知への探求心を満足させえないことをすぐ悟った。かれの心には、別な夢と希望があったのだ。一八八二年六月十二日チェスターから発信した手紙のなかで、その夢と希望を、遠く離れた兄弟にうち明けている。それに対してジャン・バッティスタが次のように返信した。

「愛する弟へ」

チェスターの住所宛の二通の手紙は、いずれも大満足で受け取りました。

おまえの手紙と一緒に、ついに我が家からの手紙も受け取りました。やっと安心しました。それには返事を出しました。そこでおまえにも返事します。

……おまえに書いていると、とめどなく懐かしい思い出が湧きあがり、溢れてきます。おまえが弟であることを何と強く感じるのだらう！ おまえ

には、最初から、自分の言い分が変わるのがわかっていたはず。僕が、そうだったように、おまえも同じようなことを期待し、願望するけど、胸の中には、何をしても倦怠感があり、悦びと苦痛を同時にまぜたような苛立ちが渦巻いている。おまえの手紙で、特に僕は驚かない。ただ、おまえが自分で手をつけた現在の職業の場合もそうだったが、いまお前が考えていることが、実現しないようにと願っている。

この血気にはやる気質をどうしたらいいのか？ それに従うべきだろうか？ 僕の場合はそうした。年貢を納めるのも、刈り入れるのも自分の責任だ。いずれにせよ、自分で自分の値打ちを証明することだし、それを知ったからといって、後悔もしないだろう。だけど、おまえが冒険するのを勧めるわけにはいかない。一人の息子の成功がおぼつかない状況の中で、さらにもう一人の息子がおぼつかないことをするのは、どこの親にとっても負担が重すぎるのではないだろうか。

田舎には、親や親戚とあわせて心地よい幸せな生活があることを僕が知らないわけではない。まして、おまえにはその幸せの感覚がないと云おうとしているのでもない。確かに、おまえには解っている。僕たちの血管には、お互いに、尋常ではないたぎる血が流れているのだ。しかも、おまえの良き兄貴からの諫めとして付け加えるとすれば、おまえにはその血が二倍も流れて

いる。

いまの職業を捨てるようにとも、思いとどまれとも云わない。ただ、自分の考えに素直に生き、何事も丁寧にすること。しかし、栄光と名誉をもとめて外国へ出かけるというのはおかしいと思う。よく考えたら自分でもおかしいと思うのではないだろうか。そういう思いで、もし、軍を辞めると決めたのなら、お父さんを助けて働きなさい。それがまともな栄光であり、偉大な功績というものだろう。いつの日か、目下進行中の計画が成功したら―しかもその希望はある―おまえと一緒に、第二の波乱に富んだ人生を築きたい。だけど、疲労と不確実性を僕と分かちあうように勧めるのは愚かだろうね。ともあれ、賢明だと判断するところに従いなさい。此の件については、これで十分だ」。

「この血気にはやる気質をどうしたらいいのか？」

そのころ、すでに、ヴィットリオは自分の道を選択していた。一八八七年、ドガリでラス・アルラの反撃によりデ・クリストフェリス駐留軍が全滅した後、イタリアの現地勢力奪還のためリビアに派遣された特殊義勇部隊に入隊した。その任務終了後、ヴィットリオはアフリカに残留した。疲弊の中で探検しつづけ、未踏査の地を旅した。その後、イタリアに帰国、数年間滞留し、イタリア地理学会の後援を得て再びアフリカへ出発し、二度の探検により、ジュバ河源流とルドルフ湖支流のオモ河源流を発見したのち、当時は未知に

近かつたナイル右岸を流れるソバトの上流を探查した。

一八九七年三月十七日、ドガ・ローバで殺されたときには、すでに東部アフリカの地理に関する最終的問題点は解決していた。ジュバ探検に出発する前、両親宛にこう書いている。「……おそらく、この旅は気がかりなことでしょう。でも、じつとしてはいられないのです。木石のように成り行きにまかせるよりは、何か成功をもとめて危険を冒す方がいいです」。

クローバーの島

伝説によれば聖パトリックが、ゲール人たちに福音宣教するため、アイルランドに上陸したのは四三一年のことである。聖人はこの土地の支配者に三位一体の神秘を説きあかそうとして、土地のどこにでも生えている三つ葉のクローバーを取り上げたという。詳しく云うと、シエームロック (Shamrock)、五く八月に淡い黄色の花を咲かせるコメツブツメクサである。キリスト教に改宗したアイルランドはパトリックを守護者として仰ぎ、この三つ葉を民族と信仰のアイデンティティの象徴としている。今もなお、全世界のアイルランド人が、聖パトリックの記念日には、緑色の服を着たり、胸に三つ葉の形のブローチを誇らしく胸につけたりしている。チェレスティーナ・ポッテゴも、その習慣が好きで、母親のメアリー・ヒーリーゆずりのアイルランドの血が騒ぎ、聖パトリックの祝日には無邪気に喜びはしゃいでいた。

ヒーリー一族は、ラフ・アロウの西海岸沿いを走るカールルー山脈のふもとに広がる地帯に土地を所有していたであろう。現在スライゴー伯爵領となっているパツリーナファドの北方約数マイルの地域である。氏族を基盤にして成立したケルト族社会憲章がある。それにもとづくアイルランド紋章学によって、かなり正確に各氏族と家族の先祖由来の土地

を特定できる。

ヒーリー一族にしても、アイルランド人の大部分がそうであるように、生活の資源は農耕だった。アイルランドは辺鄙な地方なので、国境を侵されることもなく平和だったのに、デンマークに侵略（七九二—一〇一四）され、後に英国の支配下におかれた。

五世紀に聖パトリックがひろめたキリスト教は、アイルランド・ゲール民族の宗教・文化・民族に深く浸透し、きわめて深く同化したので、アイルランドは、十二、三世紀以降、イギリスの支配下におかれたものの、政治面でも、文化・宗教いずれの面でもイギリス化することはなかった。

英国は弾圧的な立法によって現地人の基本的自由を制限して、英国国教を強制しようとした。一五三四年ヘンリー八世が発令した主権法にもとづいて、アイルランド・カトリック教徒は英国国会の選挙・被選挙権を剥奪された。大学で教職につくことも学習することも禁止された。プロテスタント信徒と結婚することは許されなかった。プロテスタント信徒の所有地を買収することも禁止された。しかも英国教会に十分の一税をおさめることを強制された。カトリック司祭は、自分の小教区外に出ることさえ禁止された。一五〇〇万エーカーの農耕可能地のうち、一二〇〇万エーカーは英国人の手に渡された。貧困、文盲、失業が惨めさを増すばかりだった。

一八二九年、ようやく、ダニエル・オコーネルが、英国国会からカトリック教徒解放に関する法律を勝ち取り、アイルランドに対する重税が緩和され、厳しい差別政策のいくつ

かが緩和されたものの、アイルランド農民があえぐ搾取の実状に変わりはなかった。

一八四五—一八四七年、大飢饉がおこった。それに恐ろしいコレラの伝染が加わって、百万人以上が死亡した。この困難を極めた時代が移民現象に拍車をかけた。数十年前に始まっていた移民の数は、爆発的に増えた。一八二〇年から一九二〇年の間に、四百万人以上の人々が、自由・尊厳・職を求めて、おもに北アメリカ、そして、そのほかの国へ向かった。

メアリー・ヒーリーの両親も、その大飢饉の時代に、一家そろってアメリカへ移住した。父バルトロメオは妻アンとともに、ボストンに住んだ。そのあと、オハイオに移り、そこでトマス、ジェームズ、メアリーが生まれた。トマスは、南北戦争（一八六一—一八六五）で、リンカーン大統領側に義勇兵として参加した。そして、奴隷解放の戦いのさなかに戦死した。ジェームズは、モンタナに移住し、メアリーはジャン・パッティスタ・ポッテゴに嫁いだ。

一つの家族と二大陸

メアリー・ヒーリーとジャン・バツティスタ・ボツテゴは、一八九〇年にカリフォルニアで知り合った。その年、彼は、モンタナ州のビュートに移り、そこで、鉱山の探掘権を得た。また、建築事業も起こして潤沢な収益を得た。世界を巡り歩いて、すでに十二年たっていた。フランスを経て、大西洋をわたり、アメリカの多くの州をめぐり、ニューヨークからニューメキシコ、カリフォルニアと廻って、事業の経験と感觸を培った。企業意欲が、新開拓事業に目を向けさせ、リスクも大きかった。幸いにも、運よく、短期間で経済基盤を固め、各種の事業をおこした。一八九二年、メアリー・ヒーリーと結婚し、翌年には長女メアリーが生まれて、二人はむつまじく生活した。

ジャン・バツティスタは、自分が始めた事業、また計画中の事業については満足していたが、こどもの教育については、経済的豊かさだけで足りるとする人ではなかった。メアリーに次の子ができたさざしが見えると、メアリーの誕生の地であり、まだ彼女の家族が住んでいたオハイオに住まわせることにした。そのほうが、孤独で荒涼とした鉱山の街よりは、はるかに閑静で居心地がいいはずだった。彼は、こどもの幸せは、学校教育よりも、母親の胎児教育に強く影響されると確信していた。だから、妻が美しいものに心を開き、

閑静な生活をするよう励ました。一八九五年十二月七日、出産二週間前の妻に宛てた手紙にこう書いている。

「健やかな由、赤ちゃん（マリア）も元気で、よく育っていて、性質もよく、順調だとのことで満足です。……赤ちゃんを見たいし、赤ちゃんと遊んでい
る君を見たいと思います。……くれぐれも自分と赤ちゃんを大切に。……心
穏やかに、いい読書をし、自分の心を希望、誠実、正直で満たしなさい。し
ばしば、想いを高くして崇高な事柄に精神を向けなさい」。

君のジョーン

一八九五年十二月二十日、オハイオ州グレンデールでチェルステイナは、このようにして生まれた。その知らせを聞くと、ジャン・バツティスタは折り返しメアリーに書いた。

「すべてが順調に終わった由、嬉しく思います。君が苦しむのではないかと
ずっと心配していました。二人とも女の子で結構です。男の子と交換するた
めに、びた一文でも支払う意志はありません。

……この子のことでマリちゃんが、はしゃぐのが見えるようです。マリちゃ
んは、なにごとにつけても熱中して無邪気に感情を表現しますね。ほんとう

に優しい心と、朗らかさと、しっかりと自分の意志をもっていると思えます。二人とも、自分のしあわせを見つけることができるように、健やかに育つことを願います。人は、教育によって多くのことを学ぶにしても、この子たちのしあわせが、この子たちの生まれる前、胎内にいるとき、母親が教えたことによるのは間違いないものと考えます。心穏やかに充実した日々をおくってください。」

君のジョーン

ジャン・バツティスタが、妻にたび重ねて書いた「心の穏やかさ」は、あきらかに、娘のチェレスティーナにうけつがれた性質である。均整と自制心が、チェレスティーナを、平和な人、大きな人、困難に際しては安心感と信頼感を発信できる人にした。一八九六年の春、気候と事情がととのうと、ただちに、メアリーは、満二歳になったマリアと小さいチェレスティーナをつれてモンタナのビュートに帰った。

ジャン・バツティスタの事業は将来有望だった、なにも増して、一八九七年、息子のヴィットリオが生まれてからは、万事が好調だった。だが、予期しない突然の出来事が、ジャン・バツティスタと家族の夢と希望を変えた。一八九七年三月十七日、弟のヴィットリオが、東部アフリカの地理探査中に殺害されたのである。アフリカとアメリカの通信が困難な事情のもとで、音信は長い間絶えていたものの、この二人の兄弟の間の愛情と相互

の尊敬心が、決して薄れていたわけではない。それは、ジャン・バツティスタが末っ子にヴィットリオの名を付けたことからわかる。ジャン・バツティスタは、たまたま友人が見せてくれた新聞の囲み記事で弟の死の悲劇を知った。ショックだった。言葉もなかった。かつてない重さだった。サン・ラザロにひっそりと住む老いた両親にとつて、あまりにも大きく悲しいできごとであると思った。姉のチェレスティーナは、何年も前から夫のカピターノ・ピオ・チテルニの転勤に伴い、シシリーで生活していた。ジャン・バツティスタは自分が両親の世話をすべきだと思った。

築き上げた地位を離れ、将来性があるモンタナの鉱山事業を捨てるのは、たやすいことではなかった。業務を整理し、種々の契約を終了せねばならなかった。資本金や資産を整理して、すべてを売却せねばならなかった。時間をかけて賢く実行せねばならなかったが、家族を長いあいだ待たせることもできなかった。一九〇三年、ジャン・バツティスタはマリアとヴィットリオをつれてイタリアへ引き上げることにした。メアリーは、チェレスティーナと一緒に残って、資産処分に関する法的事務整理にあたることになった。無理に引き離されることは家族の皆にとって苦しかった。言葉もよくわからない異国に馴染まねばならないことになるメアリーの苦しみを少しばかりやわらげるものがあったとすれば、ただ、家族みんなが、すぐ再会できるだろうという希望だけだった。

メアリーのモンタナ滞在期間は、予想以上に長引いた。土地家屋の不動産売却を依頼された業者たちは、この機会に自己の利益をむさぼろうとしていた。それまで事業に直接か

かわったことがないメアリーは、当惑した。時を待つあいだ、メアリーは、格別にチェレスティーナの知的教育と宗教教育に心を砕いた。一九七二年八月、チェレスティーナは、ノートにこう書いている。

「学校最後の年、黙想会の時、聴罪司祭から、修道生活への召命について考えたことがないかと尋ねられた。イタリアへ行かねばなりませんので、と答えたものの、それ以来、その考えはいつも私についてまわった。学校が終わるやいなや、母はイタリアへ出発することを、かかってないほど、いさぎよく決めていた。

主任司祭の紹介により、不動産業者リアル・エステート・エイジェンシーが、私たちの旅費を立て替え、私たちの家を早い機会に売却して、事後、残額を送金することになった。その後、業者は数年間、報告を送り、なにがしか送金してきた。しかし、結局のところ、連絡を絶ち、期待できた金額を業者から取り返すことはできなかった。こうして父の長年月の労働と苦労は費え去ったが、父はこの大損失を一言も嘆かなかった」。

パルマのサン・ラザロ 新しい祖国に帰化

チェレスティーナは一九一〇年の初秋、母親とともにイタリアに着き、ようやく父親、姉弟、祖父に先立たれて間もない祖母と一緒にになった。祖父は、プラティチエツロの医療を辞めたあと、パルマの南東のはずれに位置する農村のサン・ラザロに、農園と別荘を購入して生活していたので、ジャン・バッティスタの家族を受け入れる広さとゆとりは十分にあった。

すでに、「ヴィツラ・ボッテゴ」の名で知られていたこの別荘は、田舎様式で慎ましいが、古風で上品な佇まいの建築であり、この土地柄によくあっていた。三階建てで、玄関のアーチと二階に出ているおおらかなバルコニーが、洗練された堅実さをもっていて、人を惹きつけてきたし、今もそうである。まさに、パルマ・イエローといわれる強い黄色の漆喰が、ポー河流域地方の霧と夏の日差しから外壁を守っているように見えた。別荘は、広い畑と灌漑用水路にそったポプラ並木道の向こうに、遠くからでも人目についた。遙かなアペニン山脈の青い稜線が、この平野を地平線の永遠の彼方にひろげているように感じさせた。

パルマから行くとすれば、エミリア街道を南下してマローレの方へ向う。途中、山土で固めた長い道の奥に、ひっそりと佇む別荘が姿を現す。カサ・ピアンカ道に入り、畑地を

まっすぐに奥まで進めばいい。その当時なら、広い水路がカサ・ビアンカ道に沿っていた。その水は、アペニン山脈からエンツァ溪谷に沿って流れ下り、ポツテゴ家の肥沃な畑地を潤し、サン・ラザロ一帯の大きな公衆洗濯場用水の供給源だった。サン・ラザロに住んでいる土地の老人たちは、カサ・ビアンカ道を、今でも「通り」と呼んで懐かしがっている。「通り」は、灌漑用水路を橋で跨いで、まっすぐにポツテゴ家まで伸びている。近くに農場の共同住宅「パラッツォーネ」がある。赤い漆喰で、半ば色あせ、半ば剥けている。そのころは、四〇家族ぐらい住んでいた。またそのほかにも、農家が何軒かある。ポツテゴ農場の小作人たちである。

父親の遺産を譲り受けたジャン・パッテイスタは、決して、欲張りの利己主義な地主ではなかった。ぶっきらぼうだったが、お人好しだった。困難な時代だったのに、使用人たちが困っているときには、速やかに対応したという点で、証言はすべて一致している。

事実、社会的に緊張がみなぎり、庶民が集団的に不満をいだき、極端な社会運動支援に走りやすい地盤ができていた。自由主義と社会主義の対立はますます先鋭化していた。双方ともイタリアがファシズムの悪夢に飲み込まれるだろうとの前提に立っていた。カトリック信徒は政治の枠外におかれていた。「国会は無益である」との教会側の判断を、ピオ十世が、数年前に緩和したことにより、ようやく最初に国会議員二名を送り出した程度である。一九〇四年の諸会議協会 (Opera dei Congressi) の停止処分、一九〇七年の教皇回勅「司牧」(Pasendi) によるモダニズム批判などが、かえって教会と社会との関係を硬直

化した。バルマでも緊張は高まっていた。労働者、農民の生活困難な事情を反映して社会主義の理想、反教会宣伝の地盤は堅かった。反聖職者主義運動が広がり、またその根は深かった。一九〇八年、バルマは大規模な農民ストの最初の舞台となった。ストは、五十七日間つづいた。特権を守ろうとする頑固な地主たちと、飢えるほどしかない安い賃金と労働条件のもとで生活を強いられているのに憤慨した農場労働者たちが起こした鉄の団結の日々だった。

チェレスティーナは、その後の人生を、このような自然と人間の環境の中で、田舎の素朴で寛大だが頑固な農民の世界を愛するだけではなく、バルマの貴人たちの文化と伝統をも愛しながら成長し、生きた。

フィリエ・デッラ・クローチェ (女子十字会) が経営するサン・カルロ校で再び勉強も始めた。その当時、校舎はサン・ジャコポ・ヴィターレ広場に建っていた。引き続いてオルソリーネ修道女会の学校に通った。毎朝、サン・ラザロからバルマの中心街までの道のりを自転車で通った。広い田園を走り抜け、市街地を通り、レプブリカ通りから旧市街を通り抜けると司教座聖堂の脇にオルソリーネ修道会が経営する学校と、バルマ大学があり、反対側に音楽学校がある。チェレスティーナは、モンタナの鉱山地帯から移って来たので、長い歴史と洗練された感性がにじみでている旧市街の文化に強く心を惹かれた。成長し、活発で知性的なチェレスティーナだった。知識欲・学習意欲は旺盛だった。旧市街の狭い石畳の道を通り抜けるのは好きだった。突然、広場が開けるので驚いて立ち止まったり、

奥の方の宮殿の輪郭を細かく観察していると、急に教会の正面の姿が現れたりした。学校から家に帰る途中、サン・ロッコ教会やサン・ピエトロ教会に立ち寄った。レブプリカ通りをもっとさきへ走ると、サン・ヴィターレ教会やサン・セポルクロ教会があり、そこにも寄った。誰かが、彼女の信心は極端だと父親に告げ口した。そこで、父親は、狂信的にならないようにと娘に注意した。ことは単純だった。チェレスティーナは、イタリアの美術品の話をいっぱいアメリカで聞かされ、憧れていたもので、教会にある作品はすべて美術的価値があると思ひこみ、教会拝観に熱を上げていたのだ。

高等学校課程を修了し、チェレスティーナは、サッフィ通りのアルベルティーナ・サンヴィターレ校師範科へ通い始めた。ここで、青年期を過ごし、人間の友情と神の探求について最初の意義深い経験をすることになる。その頃のこと、チェレスティーナがいつも懐かしく想い出すのは、哲学を教えたベルトロッティ教授のことである。

「ベルトロッティ教授は、宗教教育をきちんと受けた人でしたが、その当時は、観念論哲学 (Filosofia idealista) にとらわれていました。その講義は魅惑的でした。わたしたちが、しきりに反対論を唱えたのを想い出します。学年末の頃、教会寄りの人となり、お亡くなりになってから(第二次世界大戦中に死亡した)『学校から神へ』と題する遺稿が出版され、その冒頭に女子学生たちと先生との間に交わされた通信文が掲載されていました。その時期に、

学校の友達のピナ・ロマーニが、家庭は社会主義者でしたけど、カトリックに転向して、彼女と一緒に、私たちみんなが、ベルトロッティ教授のいい影響のお陰だと強く感じたものです」。

師範課程を修了したチェレスティーナは、姉のマリアと一緒にピサ大学とフィレンツェのブリティッシュ・インスティテュートに通い、英語教員資格試験に備えた。一九二三年、採用試験の結果、フォルリの高専学校教員に任命された。翌年、パルマに転勤を願いでて受理され、最初にロマニョージ高等学校、次にマチェドニオ・メッローニ技術専門学校、最後にフラ・サリンベーネ中学校で教壇に立った。

それとは別に、もう一つの出会いがチェレスティーナの魂の奥深く、末永く刻みつけられていく。一九一九年、正確には五月十五日、エンマヌエレ・カロンティ神父が、パルマのベネディクト会に属する洗礼者聖ヨハネ大修道院長に任命された。イタリアの教会典礼刷新の大使徒であり、霊性の大家として名声を博した神父だった。チェレスティーナは、姉のマリアと一緒に近づきとなり、その指導に照らされて、青年時代の選択肢を成熟させていった。

優等生だったモンタナの少女は、すでに三〇に近い成熟した女性になっていた。背は高く、貫禄もあった。彼女に会えば、すぐに気持ちを通い、優しさを湛えた澄み切った眼差しが安心感をあたえた。そのほほえみは伝説的だったし、その穏やかさは感染力をもっていた。慎ましく優雅で、尊敬の念を起こさせたのは、外見だけではなく、内面の豊かな人柄がにじみ出ていたからである。深い感性、開放的で勝れた知性、上品で優雅な物腰は、チェレスティーナが自ら成熟させたものであり、彼女のまぎれもない特徴だったし、教える態度もそうだった。

フォルリの高等学校でしばらく教えたあと、一九二四年、パルマに移り、そこで一九五四年まで、一時期、家庭の都合で休職したほかは、ずっと英語を教えた。そのころの生徒たちは、いまでも彼女を懐かしく愛おしく想い出している。

「いつも優しく落ち着いていて、生徒に大声を上げるようなことはなさいませんでした。もつとも、正当な要求はなさいました。先生を見るだけで、尊敬させられました。わたしたちが好きな先生だと云うだけではなく、美しくて完全だという意味で、母親でした」——ロマンニョージ高等学校時代の生徒だったピニ・マルツ博士は、こう語り続ける——「先生

の英語の授業は、いつも楽しみでした。講義は明快でしたし、なにしろ先生がいらつしやるだけでいい感じでしたから」。

「常に沈着で、抜群に楽天的だったと申しましょう」と云うピエトロ・カヴァツツイ——ニ教授は、高等学校で英語を教会学校で宗教の授業を受けた。

「先生の感化を受けなかった人はいないと言える」——と太鼓判を押すのはタヴェルナ教授である。彼は、一九二四〜二七年、高等学校時代の生徒である——「常に冷静で、優雅で、われわれ全員の心をとらえていました。優しく、自制心が強く、時には、厳しい目がキラリと光っていました。その顔が少し曇るだけで、皆がシーンとなりました。生徒に向かって大きな声を出したり、せき立てたりすることは決してありませんでした。その考え深い顔が、わたしたちをとりこにしました。亡くなる何年か前にお会いしましたが、あの頃の遠くを見つめるような面影は、少しも変わっていませんでした。……授業は、きわめて順序よく、きわめて明快で、ときにはユーモアをまじえてお話になり、とても良くわかりました。内面的に完璧、自然体で、感性が豊かな女性でした。特性は穏やかさでした。「善意が通じる」という面で、その特性が偉大な力を発揮していました。もし、文学上の人物にたとえるとすれば、ベアトリーチェだと思えます。善を指し示し、善を愛させるベアトリーチェの能力が、先生にもあったからです。私たちと宗教について話したことはありませんし、宗教を押しつけようとも決してなさいませんが、自分がお持ちになっている最善のものを伝えてくださいました。先生と話した後は、しばらく調子がよかったものです。

そのころ、私は、まだ十三歳でした。卒業してから、かなり長い間お会いしませんでした。が、想い出は深く心に刻まれています」。

一九三三年、チエレスティーナは高等学校からマチエドニオ・メッローニ技術専門学校に転動した。そこでは、人間的側面だけではなく、教育学的また教育方法的側面で経験を深めていった。その時期に、教育内容を分かり易く楽しいものとするために「英語文法」を執筆して、パルマのカサノヴァ社から出版した。「A short English Grammar」とタイトルが付けられたこの書は、学生たちにとって非常に便利な参考書であり、英語への関心を高めた。

チエレスティーナは、教育活動は芸術であり、天職だと考えていた。自分の学生には敬意をもって接し、強制手段を一切用いないで、全員から最善のものを引き出していた。必要な学生には、個人的に無料で快く補習授業をしていた。すべての人に、学生に、同僚に、その穏やかさと人柄の良さを印象づけた。高等学校の哲学教授ブッチーニ女史と交友関係ができたのもそのころにさかのぼる。チエレスティーナの方が年は若かったが、ブッチーニ女史が、長期にわたる精神的苦悩の歩みを経て熟年となり、信仰と平和にたどり着くまで、細やかな心遣いと尊敬をもって付き添った。

「いつも微笑んでいて、親切な彼女を見るだけで、心が安らぎました」というのがチエレスティーナを知り、その生徒だった人々がひとしく繰り返すことばである。その天性、磨かれた教養、知性は、庶民との間を引き離す原因となるのではなく、むしろチエレスティ

ーナは、その能力をもちいてすべての人に親切だった。ときとして、地位が低い人々や生徒たちの間で、ある種の従属的な姿が目立つたとすれば、それは、チエレスティーナの高いレベルの振る舞いがそうさせたのではなく、拔群な魂の前に立っているという無意識的な直観がそうさせたのである。

一九三五年、チエレスティーナは、ザベリオ外国宣教会神学校で英語を教えるよう求められた。この宣教会は、一八九五年、当時パルマの司教であった福者ガイド・マリア・コンフォルティにより創設されたものである。そのころ、女性が神学校や、男子修道会の囲いの中で教えるのは珍しいことだった。しかし、チエレスティーナの存在は、その囲いの中にあっても自然であり、光っていた。

「はじめて神学校に来て、校長が彼女を英語の教授として紹介したとき、みんなが、その慎ましさと優雅さに深く印象づけられました」と語るザベリオ会のルイジ・テルツォーニ神父は、当時高校生だった。「とても上品で、優雅で慎ましい方でした。その素直さには驚かされたものです。あるとき、授業時間中、いつもより騒いでいました。そして、わたしがたしなめられました。とても優しく、他の生徒の邪魔をしないようにと諭されたのですが、それから何年かたって、私が司祭に叙階される前夜、わたしを尋ねてこられて、わたしが悪かったのに、その事件の赦しをもとめられました。その謙虚さに打たれて、しばらく、ことばも出ませんでした」。

チエレスティーナは、学校では、託された若者たちの価値を最大限に表現させ、知的・

倫理的能力を最善の状態で発揮させることができる本当の教育者だった。自分の教育専門職を愛していた。そのため常に、専門領域の動向に留意しながら研修し続け、最善をつくした。一九三五年夏、深く研修するためストラスブルグへ行ったり、またヨーロッパのほかの国々もまわった。

「……語学研修コースに参加するためストラスブルグにいました。それから、他の人たちと一緒にドイツを目指し、ラインを下ってケルンに行きました。オランダとベルギーをまわり、そしてパリから帰ってきました。美しい思い出がたくさんできましたので、そこから新学年のエネルギーと勇気を引き出せるよう期待しています」。

大きな事からも、小さな事からも喜びを引き出す能力が、もう一つの特性であり、そのために、学問上の先生としてだけではなく、生活と人柄の面でも、チェレスティーナを忘れたくない、愛すべき人にしてきた。チェレスティーナは、ひとつの花や、夕日や、オペラの一節や、ひとつの詩の美しさを楽しみ、また楽しませるコツを心得ていたし、自分と他の人々の中に見いだした、大なり小なりの、すべての善の動きに自ら喜び、他の人々を悦ばせることを知っていた。

ポツテゴ嬢

現在のサン・ラザロ地区は、パルマ市の東南の端に位置する。都市化が高度に進み、最近建築された共同住宅が並び、森に囲まれた屋敷と、まれに子供が遊ぶ公園とが入り交じっている。市に編入される前は、いわゆるサン・ミケレ関門から二キロほど離れたところがあり、パルマ県の自治村だった。この村は、ヴィア・エミリア歴史街道を通じて市の中心と連絡し、その街道に沿って発展した。村の名は、昔、この辺に隔離病院（ラザレット）があったことによると思われる。

全地域がベネディクト会修道士たちによって開墾され、一八〇〇年初期までは、修道会領であり、修道会司牧区に属していた。この地域は、ナポレオンの新行政区画整理により、パルマ公国に含まれたのではなく、一八〇二年には、教会の資産を含めてフランスの管轄に移行した。ナポレオンの新政治に伴い、ピオ七世が、それまでは、サン・ジョヴァンニ修道院の院長に属していたサン・ラザロの小教区主任・院長の任命権を撤回した。小教区の歴史は、一四〇〇年代まで遡ることができ、初期の領域は、レプブリカ関門まで広がっていた。それ以前については、いくつかのチャペルが存在していたことしか知られていない。

昔から続いたベネディクト修道会の広い土地財産が、世俗権力の手に渡ったことは、その他の教会の財産がナポレオン帝国に没収されたのと同じように、痛みを伴わないわけではなかった。状況は、当時の全ヨーロッパが巻き込まれていた社会・政治的緊張を反映していた。教会の世俗的権勢は、もはや不可逆的な危機に瀕していたし、政教分離は歴史的必然として切迫した問題だった。その過程は長く、対抗が続き、地域によっては、反聖職主義思想と無宗教思想が深く潜行し、人々は、公然と教会の秘跡を拒絶し、特に洗礼を拒否した。

ポッテゴ家の小作人たちが働く広大な畑地と土地は、昔のベネディクト修道会領だった部分を含めてマローレ方面に拡がり、エミリア街道に達していた。ジャン・パッティスタは、父親から譲り受けたその土地に、小作人たちが住む家や共同住宅を建てて貸した。

チェレスティーナは、かつてはベネディクト会領地だったその地帯を通って、サン・ラザロからパルマの中心街へいたる道を、学校に勤務するため、数限りなく往復した。そうして、路や集落や、耕された畑や、小さな家、住宅、サン・ラザロ街を知り、なににもまして、そこに住む人々の家族を知った。みんなには、「お嬢さま」として知られていた。どのようなときでも彼女は、受け入れ、寛大で、親切だった。ポッテゴ家で働く多くの家族の人々をまとめる自然のかなめだった。その役割は、サン・ラザロ全体に及んでいた。とくに、姉のマリアが一九二四年マリアの宣教師フランシスコ会に入会してから後はそうだった。マリアの出発は、チェレスティーナから姉を奪うだけではなく、信頼する友人を奪う

ことも意味していた。しかし、チェレスティーナは、それを理解し、喜びをもって家事を手伝い、すでに年を重ねた両親と、まだ結婚していない弟ヴィットリオの世話をした。

マリアが出発してからまだ幾月もたない頃、友人のルイザ・ブツレーリに書いている。

「姉にとっても、家族にとっても別れは悲しいことでした。でも、姉にこの厳しい道を選ぶ勇気を与えたその同じ意志が、私たちにも、それを受け入れる力を与えてくれるでしょう。……姉がいなくなつて、私たちの家はからになったように寂しくなりました。

……姉は良いことをしたと、私は毎日、自分に言い聞かせています。そのようなわけで、姉の生活は充実しています。ですから、姉を思うとき、私は一層、努めて自分を改善すべき義務を感じます。今年は、教壇には立ちません。家事が忙しすぎるし、わたし一人だけですから。」

チェレスティーナは、しばらくの間、教壇を離れたが、寂しくなかったわけではない。チェレスティーナと生涯をともし、忠実で離すことができない家政婦のマルチェッリーナの助けのお陰で、家族の世話と、小教区と地区が必要としていた各種の社会福祉活動にも特に心をもちいて従事した。

ポッテゴ家の住宅の中では、「パラッツォーネ」という共同住宅が目立っていた。それは、

カサ・ビアンカ通りのポツテゴ別荘からさほど遠くない場所に建っていた。幼児たちも少年たちもいい集団をつくりながら成長していった。そのことは、年がたち、人生が移り変わった後も、決して消え去らないだろう。チエレスティーナは、どの家族も知っていた。毎日のいろいろな状況の中で、嬉しいときも悲しいときも、みんなの間に存在することを心得ていた―病氣、結婚、葬式、出産、いつでも。すべての人に、その穏やかな香りと、よい言葉を運んだ。

「いつも微笑んでいて、穏やかでした。わたしたちは、曇ったり、怒ったりしている顔を見たことがない」、というのがチエレスティーナを知り、まだおぼえているサン・ラザロの人たちが繰り返し返すことばである。

「わたしの父が病氣になったとき、よく尋ねてきてくれました。たびたび、日曜日には、チエレスティーナが、私たち小さい子供には必要だといって、肉をとどけてくれました。バツティスタさんも、とても寛大でした。母には、いつも家賃のことを心配するのではなく、わたしたち子供のことを考えるようにと言っていました。第一次世界大戦の時は、私たちが自由に耕すことができるようにと土地の一部をくださいました」と、ジュゼッピーナ・アドルニ夫人は想い出を話す。

「チエレスティーナお嬢さまは、すべての人にとってすべてでした」とゾベイデ女史は繰り返し強調する―「すべての人に、公平に、尊敬と善意をもって、とても大らかに接していらっしやいました」。

一九一五―一九一八年は、世界大戦直後の苦悩の時代だった。全体主義思想とファッシズムの芽が、あたかもヴィールス性疫病のように蔓延しはじめていた。戦争の経験が生々しい中で、ストライキと不満が、すでに分裂して苦渋に充ちた世論の混迷をますます深めていた。ロシア革命の成功、ドイツ政変の余波をかって、社会主義者たちは、イタリアにもプロレタリア支配による新政権樹立が目前に迫っているかのように喧伝し、色めき立っていた。左翼勢力と台頭するファッシズム党の対抗が一九二一年の総選挙と一九二二年のゼネストを期に先鋭化し、黒シャツ党の「ローマ」行進と、ムッソリーニの権力掌握の糸口となった。

エミリア平原・ロマーニャ平原も抗争の渦中にあつた。政党間の勢力争いと利害の駆け引きが、新しい、もしくは、そう思いこんでいる均整のとれた社会の建設に決定的役割を果たすはずだった。社会主義路線のパルマは、公然と反聖職主義だった。反教会、反聖職者宣伝のキャンペーンも行われた。

チエレスティーナは、その力と緊張の駆け引きの中にあつて、皆が認めて証言するとおり、彼女の特性である思慮深さと、人としての品位をたもちながら社会に入っていた。「誰をも差別しませんでした。お嬢さまにとつて、助けを必要とする人の思想信条は無関係でした。そのポリシーは、キリスト教の愛でした」。学校で、教会で、家庭で、チエレスティーナは、その落ち着きと奉仕的精神と悦びに溢れた大らかさを完璧に保った。

グロッタフェツラータで修練を終えたのち、マザー・マリア・ジョヴァンナの名を受け

て、宣教師としてインドへ赴任した姉のマリアとは、頻繁に交信した。

一九二九年一月、母親のメアリー・ヒーリーが突然肺炎を起こし、二月十日心不全で死亡した。チェレスティーナは、愛情深く介護し、その帰天を看取った。寂しさを痛感したが、このときも、神に頼り切っている人の穏やかさをもって生きた。友人のルイザ・ブツレリ宛ての次の手紙は、その年に認めたものである。

「正月二十日に肺炎にかかりました。経過は順調でしたが、心不全で亡くなりました。あれほどはつきりした意識と落ち着いた状態で死を迎える人は少ないと思います。逝く前に、私を慰め、また皆に心優しいことはを言い残すだけの力がありました。私たちの家は、少しづつ空になっていきます。……グイットリオと父は元気です。あの二人は、次々に果てしなく建築を続けています。……父は老いてきました。鋼鉄のようだったのに、徐々に衰えるのを見るのは苦痛です。

マリアは、宣教地からよく手紙をくれます。満足して、ヒンズー教の人々と一緒に働いています。今年も、母の世話の都合で学校を休職しましたが、母のそばで過ごしたこの数ヶ月はわたしにとって大きな慰めでした」。

母親の死後、チェレスティーナは、再び教壇に戻り、多くの社会奉仕活動に参加し、特

に教会の活動では、宗教基礎教育、教会典礼、青少年育成活動に参加した。

「わたしは青年女子は、シニョリーナ・ポツテゴのところに入り浸りでした」とピチエ・コメツリ夫人は言う。「全身で全員に尽くしていらつしやいました。お宅に、みんなで集まり、私たちが歌うとき、ピアノを弾いていらつしやいました。こまごまと、いろいろなことを教えてくださいました。金曜日には、ロザリオの祈りのために集まりました。わたしは、先生が教会で祈っている姿を見て、なによりも感動しました。すごく精神が集中していて、とても深く透明な瞑想にふけていらつしやる感じで、私には魅力的でした」。

『パラツォーネ共同住宅』の子だということに誇りをもっています——とサン・ラザロでの少年時代を想い出しながら力をいれて語るのはブルーノ・トレツリ氏である。「ポツテゴお嬢さまは、私たちを一つにまとめて、一つの家族のように感じさせました。みんなは、貧しかったけど、誠実でした。そう、わたしたちに誠実の感性を遺してくださいました。先生のお陰で、わたしたち、『パラツォーネ』の子供たちは、まるで特権をもっている人たちのグループであるかのように感じていました。サッカーチームを作り『ポツテゴ』という名をつけ、『サン・ラザロ』とか『ラヴァンデリア』とか、そのほか地域の二つのチームと対戦しました。先生は、いつも口元に微笑みをたたえて、いつも落ち着いていらつしやいました。こどもながら、『お嬢さま』は、どうして、いつも、あんなに生き生きとして落ち着いていられるのだろうと考えさせられました」。

「若者や、もう若くもない連中を真っ正直な方向へ引っ張っていらつしやいました。わた

くしどもは、お屋敷によく集まり、よく歌ったものでございます。そのような折りには、ピアノをお弾きになりました。『フアエツリ氏は、華麗なパルマ方言でこう語る——ある時のことでございました。わたくしども腕白連中が遊びに夢中になりまして、しまいには畑に入り込んで牧草を踏み荒らしていたのでございます。百姓たちが怒りまして、怒鳴りはじめました。そこへ、いつもの静かな微笑みを湛えた『お嬢さま』がお出ましになりました。上手に鎮めてくださいました。このようにおっしゃったのでございます。』こどもたちみんな、草を踏み荒らさないで、こちらにいらつしやい。そして、サクランボをとりにならつしやい。』このような調子で、騒ぎを静め、果物をいっぱい持たせて家にお帰しになりました。優れたお方で、ハイクラスのお方でいらつしやいました。わたくしども若者がいつでも集まり、一緒に過ごせるようにとの配慮から、『パラッツォーネ』の一階にある部屋を一つ空けてくださったほどでございます。わたくしどもに古いラジオをくださいましたので、それを聞きながら何時間も、いい雰囲気ですごしたものでございます。

チェレスティーナは、小教区のカトリック・アクションを創設し、会長としても、精力的にこれを支えた。その組織を通して、家庭・地域の福音宣教にきめ細かな活動を展開した。今世紀初頭の十年間の闘う社会主義の影響をうけて、多くのひとびとが教会とその秘跡から遠ざかっていた。洗礼も受けず、教会に敵意をいだく成人・青年が多かった。ファツシズム政権が樹立すると、信仰が政治の道具として使われ、洗礼を受けていないものは社会主義者であり敵であると見なされ、まさに『社会主義者狩り』の標的とされた。チェレ

ステイーナは、忍耐と愛情をもって、八方手を尽くしてそれらの家族と接触し、訪問し、物質的窮乏の時に支援した。「しよつちゆう、必需品にこと欠いて、本当に悲惨な状態の人たちがいました」と、話すドン・フランコ・ミナルディ神父は、サン・ラザロ出身である。「そして、チェレスティーナは、宗教教育の傍ら、よく彼らを家に集めて、食べさせていました。『誰も差別しませんでした』と、神父の兄弟アントニオが応じた。「誰をも拒まず助けました。彼女に敵はいませんでした。たった一人の男の子さえいませんでした」と、ドン・フランコ神父は続ける。「あの折りの姿はとても印象的でした。教会の中で、御聖櫃の前で、ながいあいだ不動の姿勢で跪いている姿をよく見かけました。そして、頻繁に先生のお宅に教会の用件で伺いましたが、決して悲しんだり、憂鬱になつていないところを見かけたことはありません。優れた知性の持ち主であり、しかも非常に謙虚で、非常に柔和なかたでした。わたしが会ったときは、いつでも、変わりようがなく落ち着いていらつしやいました。先生のそばで、わたしの司祭召命が芽生え、わたしが神学校に入ることをとて悦ばれました」。

一九二五年、サン・ラザロの幼稚園創設を全力で支援し、創設後は常にその寛大な賛助者となり、時には理事会の理事にもなった。疲れを知らず率先して奉仕活動が続け、つねに人々の中から熱烈な応答があった。

男女青年と家庭の宗教基礎教育のため、『パラッツォーネ』に一室を設け、毎週一回教室を開き、主任司祭ドン・マイニもそれに参加した。一九三三年、小教区教会に「十字架の

道行き」を初めて導入し、それは慣行となった。キリストの「十字架の最後」を瞑想する典札にしたがって十四の場面が、街の中心になる公道に仮設され、大勢の人々が参加した。行列は街全域を蛇行し、莊嚴に全員が松明を灯して終わった。

チェレスティーナが主に心に掛けたのは青年たちであり、当時のパルマではその種の唯一の施設だったサレジオ会のオラトリオにしばしば目を向けた。すでに一九三〇年から、姉のマザー・マリア・ジョヴァンナの意志表明により、その相続遺産となっていた何軒かの家を活用して、サン・ラザロの青年たちのため「技術職業訓練所」を開設することを計画していた。最初の段階では、それをサレジオ会のドン・カラブリア神父に託そうとしていた。神父は、その計画に協力することを承諾していた。しかし、困難が生じて実現しなかった。したがって、一九三八年頃、『パラッツォーネ』を街の青年のための大きなオラトリオ（教会付属の青年集会所）に作り替えようと計画した。この件は、エヴァジオ・コッリ司教にもすでに話し、その同意とジュゼッピニーニ会の神父たちの賛同を得ていた。にもかかわらず、対外的支障が生じて、この計画も最後の時点で実現を阻まれた。

頑固に初志を貫こうとするチェレスティーナは、一九四〇年、職業訓練所とオラトリオ計画の挫折のあと、中国から帰国したザベリオ会のロマーノ・トゥルチ神父の助言を得て、『G. B. ボッテゴ・ナザレ事業』を設立し、宣教活動目的にサン・ラザロ青少年職業教育を加えて『同朋協賛者の使徒学院』を開設することにした。一九四〇年三月五日、この計画はザベリオ会役員会の承認を得た。そして、関係者全員が、この計画の即時実行を意図し

ていた、にもかかわらず、この件も神のみ摂理は別にあることを証しただけで、計画倒れとなった。

いろいろな計画が水泡に帰するにも関わらず、チェレスティーナは常に変わることなくサン・ラザロの人々と青年たちと深くつながっていた。「わたしたちは、チェレスティーナを自分たちのチェレスティーナだと思っていました。どんなときにも頼れることを知っていました」——と、彼女の少年たち、コメツリ、スパッジャーリ、グロッシは、五〇年も経た後に、彼らのチェレスティーナをはっきり想い出すために集まった——「私たちをしかるときも優しくかったですね。ふざけて、オルガンをわざといじって、お嬢様が教会の儀式で弾くとき、豪華なアリアの音が鳴りだすように細工したときも」。

サン・ラザロの「彼女のひとたち」は、もつと話を続けられるだろう。結婚のときや、長男を産んだときにプレゼントされたもの、「お嬢さま」の想い出として今でも大切にしまっているもの、悲しいときや動揺しているときにかけられた慰めの言葉、夫が病気で働けなくなり収入が足りなくなったりとき家賃を免除してくれたこと、年寄りの両親を見舞ってくれたこと、神学校へ入る兄弟のために個人教授をしてくれたこと、その世話で職を得たこと。証人たちそれぞれに、それぞれの話したいことや大切な逸話がある。そのひとつひとつが深い彼女の内的生活を顕わしている。もちろん、その内的生活が、善行となり、神の神秘を知らせ、教えたいという意欲になったのである。チェレスティーナの内的生活の証しは、飾り立てた言葉ではなく、実行によって雄弁に語られている。ひとびとは、それに

気づいていた。だから、彼女を高く評価し、ついていった。チェレスティーナの毎日は、素直、真実、普段着の出会いのリズムをはっきりともっていた。目前に迫っていた新しい世界的規模の闘いという左翼運動の蔭に脅かされる世間の中にあつて、そのチェレスティーナの毎日が、目に見えない忍耐と、いつまでもつづく心の温かさ、愛、連帯の横糸となつていた。彼女についてこう言えるだろう―「貧しい人には手を開き、乏しい人には手を伸べる。口を開いて知恵の言葉を語り、慈しみの教えをその舌にのせる」(箴言31・20、26)。

パルマ——沸き立つ教会

一九一九年、エンマヌエレ・カロンティ大修道院長がパルマのベネディクト会所属サン・ジョヴァンニ修道院に着任したとき、市の政治情勢は、かつてないほど不安定で、不満と反聖職主義に染まっていた。

サン・ジョヴァンニ聖堂およびそれと同名のベネディクト大修道院は、十三世紀に建てられ、中世期建築の洗練された調和の典型でもある司教館、司教座聖堂、洗礼堂からなる歴史記念建造物群からわずかな距離にある。サン・ジョヴァンニ聖堂の正面は、ルネッサンス様式であり、十六世紀初頭に建築されたベネディクト修道院回廊へと、建物は構造的に、理想的に連続していて、司教座聖堂のロマネスクの輪郭がもっている質実さや、八角形の洗礼堂の濃縮された堅固さと対立するどころか、むしろ、パルマ市の美術記念文化財であるこの建造物群の双璧は、一つに融け合つて優雅である。

『祈り且つ働け』という知恵のリズムに乗った修道院の厳格な生活が、サン・ジョヴァンニを常に精神的吸引力の中軸に据えていたし、パルマのキリスト教生活の指導的役割を果たしてきたが、戦時、修道院は、兵営になつてしまった。修道院長と修道士たちは、パルマから約二十キロ離れたランギラーノ街道沿いにあるトツレキアラ修道院へ移動せねば

ならなかった。カロンティ大修道院長は、大いなる精神的師父であり、典礼に細かく心を
用いる司祭であり、燃えるような使徒だった。あの反抗と困難の時代のなかで、サン・ジョ
ヴァンニとトツレキアールを深い霊性と賢明な司牧活動の輝かしいセンターにした。イタ
リア・カトリック大学連盟補佐の立場で、連盟事業として、勇気と整合性あるキリスト教
的社會参加促進を目的として定期的会合、研修を続ける大学生・教授たちと連絡を保って
いた。霊的指導には熟達していた。その指導を通じ、キリスト教的な透明な良心と豊かな
人間性を育成して、パルマの歴史に足跡をのこした。一九二〇年七月十一日、まさにトツレ
キアールでベネディクト会オブラート運動を再興して、十九名のオブラート会員にスカボ
ラーレ胸章を授与した。後日、チェレスティーナもこの運動に加盟した。パルマ市は、そ
のころ困難な時期にあったが、グイド・マリア・コンフォルティ司教の聡明な指導をえた
教会にとっては、幸いな時でもあった。パルマ生まれ（一八六五年）のコンフォルティ司
教は、イタリアの司教団の中でも、通常の司牧のほか、その時代に、外国宣教活動への
道を開き、これを情熱的に推進した人として、特に目立つ。

司教は、若い神学生時代にフランシスコ・ザベリオの伝記を読んで宣教の理想に駆り立
てられた。そのときから、その理想を頑固なほど大切にし、その実現のため、先ずイエズ
ス会を、次にサレジオ会の門をたたいたが願いは叶えられなかった。司祭叙階直前になっ
て、重病にかかり、宣教はおろか司祭になることも危ぶまれた。グイドは悩みおののいた
が、信仰はびくともしなかった。

フォンタネツラートの聖母マリアの取り次ぎで快癒し、ついに一八八八年九月二十二日
司祭に叙階されると、ただちに、神学校の副校長、ついで校長に任命された。だが、虚弱
な体質が宣教の夢の実現を決定的に阻んでいるかのように思えた。聖フランシスコ・ザベ
リオを記念して宣教会を設立することを真剣に考え始めたのはそのような時のことである。
司教座聖堂付き参事会員となったコンフォルティは、一八九三年、神学校の近くの家が
売りにでたとき、宣教会設立の目的達成に手頃だと思われたので、なにがしかの貯蓄と父
親の遺産をもとにしてその家を買った。その上で布教聖省長官である枢機卿に書面で認可
を求めた。一八九四年四月、懇切な激励の返書が届いた。ドン・グイドは、宣教地赴任を
希望する若者を募集し始め、一八九五年十一月、応募者をボルゴ・デル・レオン・ドーロ
の建物に収容した。十二月三日、聖フランシスコ・ザベリオの祝日、パルマ司教フランチェ
スコ・マガニの臨席の下に、新しい宣教者養成学校が開校した。

外国宣教エミリオ神学校として誕生したコンフォルティの学校は、一八九八年司教裁可
によりフランシスコ・ザベリオの庇護の下におかれた公認宗教団体の資格を得た。それか
ら三ヶ月後、一八九九年三月四日、最初の二人のザベリオ会宣教者がフランシスコ会司教
フォゴツラに案内されて中国へ向かった。若きグイドの夢は、こうして実現した。

当初の不確実性は、その間、司教区総代理に補任されたこの若い創立者に、痛みと心配
をもたらした。一九〇一年二月二十八日、中国宣教活動わずか二十二ヶ月で、最初の宣教
師カイオ・ラステツリ神父がチフスで死亡した。悲しみは大きかった、悩みも大きかった。

一人で残された若いマニーニ宣教師を召還せねばならなかった。中国宣教は、長い間の夢だったのに、生まれたばかりで挫折した。他方、バルマの学校も伸び悩んで難しい時期に直面していた。

そのような試練と不確実なときに、ラヴェンナの司教に叙任するという辞令が届いた。コンフォルティにとつては、健康の不安定にくわえて、始めたばかりの小さな宣教師養成学校の存立があやぶまれるなかで、さらに重なる十字架であることを理由にして、教皇レオ十三世に再考を願い出たが許されなかった。

コンフォルティ司教は、一九〇三年の正月五日、主の御公現の大祝日の前夜、ひそかにラヴェンナに入った。ひそかな行動は、反聖職主義者たちの反抗と騒動をできるかぎり避けるためであった。ラヴェンナは、長い間、教皇庁から置き去りにされていたので、特に反教会宣伝の温床になっていた。コンフォルティ大司教は、偏見を取り除き、無知を克服するため、カトリック信仰の基礎教育に力をそそぎ、小教区と司教区レベルでアクション・カトリックを盛んにし、小神学校については、特に細かく配慮した。しかし、この困難な状況下での激務により、一年半で病に倒れた。咯血を繰り返し、病状の悪化が心配された。コンフォルティは、辞任を願い出て、ピオ十世に深く惜しまれながらも、一九〇四年十月二十二日、願いが受理されたのでバルマの教会に帰った。

バルマの司教、宣教師 福者ガイド・マリア・コンフォルティ

宣教師養成校の名が世間に知られ始めた。養成校は、一九〇〇年、ボルゴ・デル・レオン・ドーロから、サン・ジョヴァンニ教会と司教座聖堂に近くて、市街の南にある古代城壁沿いにある広いカンポ・デイ・マルテに移転した。そこは、軍事教練がおこなわれるのでそう呼ばれた。コンフォルティが、あちこち探した結果、この地に養成校を建設するのが適当と判断したのである。定礎式は、一九〇〇年四月二十四日、マガーニ司教を迎えて荘厳に挙行された。

生地と養成校の空気が馴染み、コンフォルティの健康回復をたすけ、徐々に力をつけた。深い信仰生活と宣教師志願者養成に没頭しながら、素朴で慎ましい生活が続いた。しかし、このからだと心の休みは、長くはつづかなかった。一九〇七年、ピオ十世から、バルマの年老いたマガーニ司教の後継としてコンフォルティが、司教補佐にあたるよう書面で要請された。その年十二月、マガーニ司教の急死により、コンフォルティ司教がその後を継ぎ、翌一九〇八年三月二十五日、正式に着座した。

コンフォルティ司教は、社会主義思想・反聖職主義思想宣伝に傷つけられ、分裂していく司教区のただ中であつた。教会と聖職者に敵対して、無分別な争いを展開することが社

会正義だとされる傾向があった。モダニズムがパルマの教会内部にさえ浸透し始め、悲しむべき緊迫した状況を生み出していた。とくに、ピオ十世の公然としたモダニズム批判にたいして、司祭たちの一部が造反した。この年の五月、パルマでは、最初の農民ゼネストという衝撃的な事件があった。すでにほころびた社会のきずなは、ますます大きく引き裂かれた。コンフォルティ司教は、争いを気づかない、平和的解決のために、しばしば事件に介入した。

司教が一九〇八年から一九一二年にかけて教区内を第一回司牧巡察したとき、憂慮すべき事態として、人々の間に宗教性の貧困が目立ったので、その回復をはかるため、ただちにカトリック要理教室をあらゆる地域に開設し、宗教教育強化に力を注いだ。聖心の奉仕・宣教信心会を組織して一般信徒の宣教参加を促進し、司牧巡察予定の教会には、あらかじめ奉仕会員を派遣して、巡察の効果を高めるように気を配った。司教は、一般信徒の参加が不可欠であることを洞察して、カトリック・アクションと宗教基礎教育事業を全面的に支援した。そのため、パルマにカテキズム教員高等専門学校を創設し、小教区を支援する貴重な男女の協力者を育てた。司教は、一九一三年司教区主催のカテキズム大会を組織した。大会は成功し、その後も、継続して開催されることになった。この最初の大会が、イタリアの「カテキズム週間」運動の口火を切ったのであり、当時の優秀なカテキズム教育者たちが指導的役割を果たした。

コンフォルティ司教の司牧業績の中でまぎれもなく最も独創的な特徴は、外国宣教に道をひらいたことにある。コンフォルティは、自ら宣教師であったし、宣教師の父でもあったから、病気がちではあったものの、強靱な意志と決断の人であって、宣教の理想のために全精力をかたむけ、資力も、エネルギーも、能力も、知性も、また司教の地位にともなう信望も、すべてを惜しみなくそそいだ。

一九一六年二月二五日、パオロ・マンナ神父が、宣教師協会を組織することを計画し、またイタリア教会の宣教活動の刷新と促進の必要性を提唱して、助言と助成を依頼するため、コンフォルティ司教を訪れたとき、この司教こそは、信頼でき、不屈の支援者であると知った。

マンナ神父は、PIME (ミラノ外国宣教会) の宣教師としてピルマで一〇年間ほど働いた。一九〇七年、健康上の理由でイタリアに帰国せざるをえなかったが、帰国後は、もっぱら宣教関係出版物の発行と、各小教区内の活性化に情熱をかたむけていた。さらに、マンナ神父は、自分の宣教活動の直接経験から、ひとびとのあいだに宣教意識を盛り上げ、宣教地とのあいだに生き生きとした協力関係を築き上げるには、教区司祭たちの仲介が不可欠であると確信していた。一九〇八年、計画の素案を『だが、働くものは少ない』と題して、書物に著した。それを、一九一四年、『信仰の宣布事業を組織化し、宣教地を救おう』と題して小冊子にまとめ、イタリア国内の全司教と一部の枢機卿たちにそれを送呈した。聖職者宣教会の規則と活動計画案をつくり、マンナ神父は、それを検討し、配慮する高位聖職者をさがしていた。そして、コンフォルティ司教こそは、その能力と資格をもつ人で

あると知った。

マンナ神父とおなじく、コンフォルティ司教も、しばらくまえから、イタリア教会のなかで宣教師業を活性化するには、教区司祭たちの心をとらえねばならないと思っていた。そのための機構はすでにあつた。しかし、「信仰の宣布事業」は不振であり、宣教師協力の実効をあげるためには推進力となる組織化が足りなかった。司祭たちをさまざまに組織し、そこに、より深い布教の関心と理解を浸透させねばならなかった。だから、コンフォルティ司教は、マンナ神父の計画の有効性をたちどころに理解し、最初から、支持し、助言し、支えとなり、誠実な協力者となつた。

コンフォルティ司教は、この計画をヴァティカンにつなぐ役割も果たした。マンナ神父と最初に出会つてから数ヶ月して、ヴァティカン・布教聖省に覚え書きを提出したあと、精確には、一九一六年四月二七日、ベネディクト十五世に謁見し、自ら計画を説明した。同年一〇月二三日、ついに認可がおりて、同一〇月三一日、宣教師協会が正式に創設された。

コンフォルティ司教は、ただちに教区内に宣教師協会を設立した。一九一七年二月、パルマ教区の機関誌『L'Eco (こだま)』も、ザベリオ会の機関誌『Fede e Civiltà (信仰と文化)』も、紙面を広くとつて、会の内容と規則を紹介している。イタリアで宣教師協会を教区司祭たちに託し、これを組織化し、指導者を任命したのは、コンフォルティ司教が最初である。司教は、一九一八年から一九二七年へかけては、自ら責任者となつて、終始変わるることな

く協会の困難な歩みを支援した。この十年間は、司教たちや信徒たちへむけて文書を発信し、事業推進のための各種集会、会合に出席して、精力的に活動を展開した。宣教会の草の根運動が、新たに宣教師活動への機運を盛り上げて、ついにはベネディクト十五世の「マクシムム・イツルド」Maximum illud (1919)・ピオ十一世の「レールム・エクレジエ」*Rerum ecclesiae* (1926) という大回勅へつながつたと言つても過言ではあるまい。

コンフォルティ司教の司牧と宣教師活動の濃厚さは、活動が具体化し展開したときの時代の背景を見れば歴然としてゐる。宣教師協会設立当時は、まだ教会と国家とが遺憾ながら対立していて、イタリア統一が困難な時代のさなかであつたし、司教になつたのは、社会的に絶望的な抗争がつづき、ついには戦争をひきおこして、独裁者を生み出した時である。にもかかわらず、コンフォルティ司教の地方教会への配慮は、教会全体への配慮を損なうことは決してなかつたし、その逆もなかつた。むしろ、深い苦悩の代償として、両者相まって、教区内では世界的視野が広がり、宣教師協会内には深い家族的親しみが増した。パルマは、むかしから宣教師の伝統をもっているが、ときおり、地域の事件、抗争、怠慢などで冬眠する。しかし、布教熱が目覚めるとふたたび活性化して、さらに広い視野を開拓する。一九一二年四月、ルイジ・カルツァ神父が、西河南省の教皇使節代理に任命されたためイタリアへ一時帰国した。ザベリオ宣教会最初の司教をコンフォルティ司教が叙階したので、司教座聖堂は喜びの人々で溢れた。一九二八年、司教が、かねての夢がかなつて現地の宣教師視察訪問のため、九月十九日、中国へ向けて出発したとき、パルマ中が司

教とおなじ熱に燃え、司教とともに沸き上がった。

帰国を迎える人々が大聖堂に満ちあふれた。おそらく、司教の最期がせまっていることを予感していたのだ。人々は待っていた。人々は司教と憂いをともにするのを誇りに思い、感動し、うっとりしていた。この偉大な司教の布教精神が、ついに人々に伝わった。

コンフォルティ司教は、一九三二年十一月五日、父として牧者として生きた貴重な証と聖性の不滅の刻印を教区および宣教会に豊かな遺産として残して逝った。一九九六年三月十七日、サン・ピエトロ大聖堂で、喜びに溢れかえる人々に祝福されながら、ヨハネ・パウロ・二世によって、ガイド・マリア・コンフォルティは福者の列に加えられた。

コンフォルティの遺産とチェレスティーナ・ボツテゴの教会奉仕

教会のこのような状況と雰囲気の中でチェレスティーナ・ボツテゴのキリスト教的・宣教師的活動は成長し、成熟した。かりに、コンフォルティ司教の姿と訓育を背景からはずしてしまえば、彼女の豊かさの全体、明快なキリスト教的証し、宣教への召命を正確に把握することはできなくなる。

一九一〇年、チェレスティーナがパルマに着いたときは、コンフォルティが司教に叙階されてから二年しか経っていなかったから、その在職期間は、まだ二十一年間残されていたことになる。チェレスティーナは、この司教が全教区にひろめた霊性的雰囲気深く吸い込み、その教理とメッセージをしっかりと受けとめた。彼女の中には、司教の霊性的特徴がそのまま見いだされる。彼女には、最も近い隣人―貧しい人、最下層の人、苦しむ人、刑務所に入れられた人、信仰のない人―に対して、注意深くて血が通った愛があった―司教には父親のそれが、チェレスティーナにはやさしい母親のそれがあった―また、彼女には、普遍的教会が全世界を抱きかかえているような包容力をもつ生き生きとした感性があった。

カロンティ大修道院長の練達した賢明な指導が、貴重な二つの種を実が熟するまで育て

ることになる。チェレスティーナは、大学生時代に、姉マリアとともにサン・ジョヴァンニの施設に近づき、規則的に尋ねては、いろいろな企画にたずさわった。その企画を自分の小教区サン・ラザロ教会に持ち帰って、貧しい家庭や刑務所に入れられている人々の間で、カトリック要理教育、そのほか揺籃期にあつたカトリック・アクションの活動を展開した。

その時期に、コンフォルティエー司教と近づきになる機会もえた。それについて、一九六〇年のコンフォルティエー司教列福調査のうちに述べたチェレスティーナの証言がある。

「コンフォルティエー司教様は、私がイタリアではじめてお目にかかった司教です。威厳と瞑想的なそのお姿にはいつも感銘をうけました。

サン・ラザロ小教区にも視察に見え、教理の学校をご視察になり、皆さんに、特に女性の教育担当者に、励ましのお言葉をくださいました。

カトリック・アクションの最初の会合が司教館で催され、若い女性の小さなグループが集まり、コンフォルティエー司教様が司会されました。司教様の父親のようなお振る舞いと新しい使徒職活動を始めることについてのおよろびを想い出します。そのあとも、カトリック・アクションの会合が司教館で催され、しばしば司教様にお会いしました。司教様がいらつしやることは全員にとって、とても大きな励ましになりました。はじめは不安を感じていた

人も、そのお人柄とやさしさのおかげで任務遂行が易しくなりました。

コンフォルティエー司教様は、私が考えているよりも、もっと私をご存じだったかも知れません。司教様の姪のマリア・ピヴァは私の友人でしたし、彼女はしばしば司教様を訪ねていましたから。司教様に最後にお目にかかったのは、お聞きしたいことがあつてお尋ねしたときです。好意にあふれて、父親のように両腕を拡げてにこにこして出ていらつしやいました。そのお姿がわたしたちのお父様の最後の鮮やかな想い出です」

(バルマ、一九六〇年三月二十二日)。

霊的生活の深まりにつれてチェレスティーナの心の中では、さらに寛く完全に他の人々に奉仕する生活への願望が大きくなっていった。

「……肉体的に母親になることができないとは思いません——一九三一年、友人のルイザ・ブツレリ宛てにこのように書いています——しかし、わたしの召命は、それではないとはつきりと感じたのです。そうではなくて、マリアのような霊的な召命……わたしの内的生活がさらに深まれば、あまり私自身のために生きるようなことでは呵責を感じるでしょう。愛する人は創造し、つねに何かを与えようとするからです。私は、生まれつき活動的で、家庭の小さ

な生活が私の魂を窒息させ、重荷になるのです」。

自分の任務を根付かせようとでもするかのように、その翌年は、赤十字看護婦の養成講座に参加した。そのわけは、「貧しい人々に奉仕することは、私に役立つから」と書いているが、実のところは、心中、他の目標があったことを一九三三年に書いた一つの手紙が匂わせている——「赤十字社の講座に興味深く出席しています。沢山のことが、いずれ役にたつように思えます。マリアは看護婦の資格があるとインドの病院で働けるでしょうと云っていますし、私もマリアと一緒に働きたいと思います」。

一九三五年、準備がととのい、社会活動になれるにしたがい、ナザレト事業に参加した。この事業は、十年ほど前、テレジーナ・アングイツソーリと女医アントニエッタ・カッペツリが貧しい人々と社会から見捨てられた人々を助けるために始めた企画だった。この事業の経営理念は、精神的・社会的に最も貧しく、見捨てられた人々をとりあげて、人間性とキリスト教信仰生活の向上をめざすことにあつた。一九三六年の終わりに、この事業はカロンテイ大修道院長のもとでさらに組織的に整備され、新しい息吹をあたえられた。院長は、種々の計画を実行するために修道院の施設の一部を解放した。

この事業に参加したのは六人の若い女性だった。院長は、その人たちをディアコネッサ（女性の助祭）と呼んだ。彼女たちの活動領域はパルマ市の周辺であり、河の向こう側だった。その地帯には、貧しい人々の大集落があつた。彼女たちは定期的にそこに赴き、家庭

や病人を訪問して、交友関係をつくり、友情の種を蒔いた。日曜ごとに、貧しくて文盲が多い、この地区の沢山の人々が、カロンテイ修道院長が提供したボルゴ・レットの場所に集まって、ミサにあずかり、カトリック要理の集会和文字学習コースに出席した。チェレステイーナは、この日曜学校には積極的に参加した。ここでは、教授法を修得するかたわら、自分のキリスト教生活の豊かさを提供できた。おなじくナザレト事業の企画内のこととして、パルマに巡回遊園地を開いて生活する巡業者たちが来ると、その家族の世話を快く引き受けた。

カロンテイ神父は、ある日、いずれ、この事業の日記になるノート最初のページにこう書き記した。——「内的生活が欠けると、外的活動はほとんど実らない。祈りの場がほとんどないとすれば、神の恩恵が、奉仕活動を実らせるためにくだることはないからだ」。祈りが、ナザレト事業を実らせる秘密だった。

インド旅行と宣教活動の経験

一九三五年は、チエレスティーナに深い悲しみの年だった。十一月五日、「鋼鉄のようだった」父親ジャン・パッテイスタが急病で突然死んだ。コンフォルティ司教が息絶えたあの灰色の朝からまさに四年目のことである。この日付の符合をチエレスティーナが気づかないわけはなかった。まるで司教と父とのデリケートな愛情の最期のしるしのようにさえ思えた。

弟のヴィットリオは、その一年前に結婚した。父が死ぬと、チエレスティーナは、畑と果樹園に囲まれた大きな家のなかで、ひとしお孤独を感じた。だから、インドの姉マリアを訪ねることをまじめに考えはじめた。

一九三六年七月三十日、コンテ・ヴェルデ号に乗船して、ゼノアを出航し、数ヶ月間、姉とともに生活した。船上では、中国へ向けて旅するザベリオ会の神父たちが道連れになり、ボンベイまで一緒だったライモンド・ベルガミン、ロマーノ・ダニエリ、ジョヴァンニ・カイロットの三人だった。その神父たちに英語を実地に教えるチャンスが少々あり、喜んだ。

この旅を語る原典資料が二つある。一つは、友人コロンバ・カタラーノ宛のもの、もう一つは、中国のザベリオ会の宣教師に宛てて英文で書かれ、のち伊文に訳されて、当時のザベリオ会機関誌であった「ミッシオーニ・イツルストラテ」の一九三七年六月第六号に掲載された手紙。チエレスティーナの生きた経験に直接触れたいので、この原典資料に当たってみよう。一九三六年十二月十五日、友人カタラーノにこう語っている。

「神様は、わたしのこの旅を、ほんとうに、最初から最後まで祝福してくださいました。七月末にコンテ・ヴェルデ号に乗船してゼノアを立ちました。この大きな汽船は、マッサウアまで満員でした。イタリア人のほかにあらゆる国籍の人が乗っていました。旅行に慣れたひとたち、おもしろい経験を積んだ人たち。船上の仲間はいつもいい感じですよ。船室は、シヤムの女の子と中国へ取材に行くポーランドの女性記者と一緒にです。紅海の暑さにもかかわらず、旅は順調でしたし、船酔いもしませんでした。ボンベイでは、マリアの宣教師フランシスコ会のシスターたちのところに数日滞在しました。このシスターたちは、カンバラ・ヒルに綺麗な宿泊施設をもち、町のいちばん汚い地域にあらゆる貧しい人々を受け入れる質素な家をもっています。

はじめて現地の人々の居住地をたずねると、すごい印象を受けます！人間の生活が、これほどの無気力と無秩序のなかで展開するとは、理解に苦しみます。マリアが働いている伝染病院の守護者聖ロッコの祝日にハイデラバール

ドにつきました。ハイデラバードは、一人のニザームが支配するイスラム教の州です。一ヶ月、マリアと一緒にいました。ペストがはやり始めたので、用心のため私も予防接種をうけました。キャンプは、田舎のサン・ラザロのようなところで、外にあります。宣教女たちが働いているところを近くから見る事ができました。そして、こんなに近くで、姉と一緒に生活できたのは、ほんとに大きなお恵みでした。私にとっては、生涯で一番大きな喜びのように思えます。

管区長であるマードレが、私と一緒にカシミールで休暇をとることを許可してくださいました。ハイデラバードから汽車で三日三晩、それからバスで十二時間かかります。北上しながら、インドの最も美しいモニュメントがあるアグラとデリーに立ち寄りました。カシミールには、シスターたちの小さな病院があります。しかし、一番美しい仕事は、僻村訪問です。滞在期間中は、ヒマラヤへも、馬で、船で河に添って、どこへでも付いていきました。薬をもって、重症か瀕死の子どもたちには洗札をさずけながら。わたしも四十人に洗札をさずけました……」。

この手紙からチェレスティーナ特有の、すべてにおいてすべてを抱擁する生き生きとした深い宣教者精神が浮かび上がる。チェレスティーナはただちに現地の宣教女たちの働きに

溶け込み、「自分の生涯のなかで最も大きな喜び」は姉と共に過ごした時期だとためらわずに述べているのではないか。何ごとに対しても引きさがらなかった、ペストに対してもそうだった。心の底からの喜びと深い信仰をもって臨終の人々に仕え、洗札をほどこした。また姉のマザー・マリア・ジョヴァンナの紹介でイスラム教徒である医師フサイン氏を識り、氏が改宗するときにあっても立派に役割を果たした。チェレスティーナは氏といろいろな話をした。その挙げ句、イスラム教の世界で、イスラムの人にとっては極めてまれなことだが、フサイン医師が洗札を求めた。チェレスティーナは、氏をハイデラバードに伴い、布教地総代理に引き合わせ、総代理は、氏の家族とともに洗札を授けた。その時以来、フサイン医師は、つねに頻繁にチェレスティーナと好意的に交信した。

レ・ミッシオーニ・イツルストラテ誌の掲載記事は、もうすこし、思索的な調子で、別な事柄ではあるが、彼女の宣教に対する関心と情熱を伝えている。

「インドでは、二つの宗教が支配的である。イスラム教とヒンズー教である。次のランクにシーク教徒（これは、一神教で、闘争的共同体である）、セイロン島には仏教徒、パールシー（インドではゾロアスター教徒をこう呼ぶ）が北部を主にして各地方に散在し、ボンベイには特に多い。カトリック教徒は、東海岸沿いには、ゴアのように市全体がカトリックである地域もあるが、全体としては、おそらくどの宗教よりも少ない。ゴアのひとつとは、聖フラン

シスコ・ザビエルにより改宗した古くからのキリスト教家族の子孫であることを誇るすばらしいカトリック教徒である。現地人司祭の大部分は、この地域から出ている。改宗者は多くはない。そのほとんどが例外なく、インドの階級制度の最下層民、云うところのアンタッチャブル階層の人々である。インドの考え方によれば、人々は、カースト制度を社会・政治的に理にかなった組織であるとして受け入れ、かえって、すべての人が自由・平等であるという考えは不自然であるとして排除しているようである。最悪なのは、可哀想なパーリア階層の人たちを、本当に程度が低い生物だと思いつこんでいる……しかし、現実には、ゆっくりとではあるが、確実に、ちがう思想とちがう感性が育ちつつある。人間の尊厳と自由志向の感性である。しかし、その人間の尊厳をどう築きあげるのか？ 自由をどのようにして獲得するのか？ カースト制度を全く認めない制度をもつ宗教を受け入れるほかに道はあるまい。インドでは、ヒンドゥー教の暴政から人々を解放できるのは二つの宗教だけです。カトリック教とイスラム教……。

この虐待されている階級の指導者ドクター・アムベッドカルは、ナシクで行った最近の講演で、同じ宗教の仲間にもわかって、集団的にヒンズー教を捨てて、他の宗教を受け入れようと語りかけた。しかし、どの？ 氏は、ただ、階級の平等を保証するものにかぎるとして、あとは、各自の判断にまかせた。

このパーリア階層の人々は、カトリック教徒になるのだろうか、あるいはイスラム教徒になるのだろうか。ここに、カトリック宣教師の真剣な問題がある。この国全体の改宗が、この件の解決にかかっているから。

テグルーが語る人々が住んでいる地域は、約二千万人で、ハイデラバード、ネッローレ、ヴィザガパタムの教会司牧区域に入る。これらの司教区はインド・カトリック運動の先端に立つ。そして、テグルーの地方は「キリスト教の約束された地」と云われる……。

宣教活動は貧弱そのものだ。そして主の使徒たちが、イエス・キリストを知らせ、愛させるために何をしているのかを見ながら絶え間なく黙想し続ける。一人のキリスト教生活者にとって、自分の目で宣教の働きを観察できることは、大きなお恵みではあるまいか。……バラムツラでは、マリアの宣教師フランシスコ会が経営する病院を訪問し、すこしばかり、病人看護の手伝いができた。彼女たちの巡回使徒職活動は、示唆に富んでいる。一緒に河を舟で行き、山の麓を馬に乗って廻った。そのような中で、主の慈悲により、結構沢山の子どもたちに臨終の洗礼を施すことができた。主なる神の制限もなく広いブドー畑が、「午後五時頃に雇われた労働者」(マタイ20・6)を待って黄金の実りの頭をさげて待っているのだ。どうして、こんなに働くものは少ないのか？

愛が不足している。イエス・キリストを知らせ愛させるために、より一層
相応しい道具としていただくように、みんなで祈らねばならない」。

インドへの旅の経験は、チェルステイナの信仰の歩みと、キリスト者としての任務を果たすための決定要因となった。パルマへ帰ると、小教区のなかで、サン・ラザロの各家庭で、また友人や知人を広くさがして、人々が宣教を身近に感じるよう工夫した。映画や写真を見せ、見てきた世界について熱っぽく話しただけではなく、直面した宣教の緊急性を強調した。そのころ、一九三五年から高等学校過程の生徒に英語を教えるため常勤していたザベリオ宣教会との連絡が密になった。

彼女の尽きざる創造力がはたらいて、コンフォルティ司教の宣教学校の壁の中にも入っていた。彼女は、廃品回収を始めた。若い宣教師たちを援助するために、一緒に作業するグループを結成して、ぼろ切れ、鉄くずを集め、選別し、宣教活動の資金にするため売却した。回収品を運送するために儉約した金で三輪車を買ひ、回収品売却のためにはポントレモリーりの知人たちを巻き込んだ。この企画は長く続き、誕生して間もない宣教会の経済的困難を結構支援する力を頭わした。

第二次大戦中の暗く困難な日々

戦争は、一九三九年九月一日、ナチス・ドイツ軍がポーランドに侵入して始まった、疫病のように、たちまち、ほぼ全ヨーロッパを巻き込み、同盟している海外の国々、アメリカ、日本にひろまり、ほどなく全世界レベルの紛争になった。

ファシスト・イタリアは、初めのバルカン、そして、アフリカの帝国主義のショック、つぎにデマゴギーの忌まわしい挑発をうけて、連合軍の南方上陸の直後、たちまち内戦状態に陥ってはずたずたになった。ドイツ軍占領が、一九四三年九月八日の政変となり、反抗、パルチザン行動隊・軍団結成を誘発した。争いが激しく過酷さを増すにつれて、抵抗運動は組織化された。GAP (愛国行動グループ Gruppi d'Azione Patriottica) が都市圏に、SAP (愛国行動隊 Squadre d'Azione Patriottica) が地方に結成された。彼らは、サポーター、ジュシ、ナチの復讐から人々を救出するために行動した。一斉検挙、銃殺、復讐、陰謀が、地方・市街を問わず、続けざまに、血に染めた。パルマも九月八日、ドイツ軍に占領された。軍人の集団流刑、ナチに媚びる黒旅団が街に結成されると、それに対抗して周辺の山岳地帯に逃亡していた人たちが、最初のパルチザンを結成した。ついで、一九四四年二月、モンテ・カッシーノのドイツ軍が破れると、ヒットラーの軍団は、のちにゴシック戦線と

して知られるアペニン山脈の一部に戦陣を敷いて立てこもった。エミリアとロマーニヤでは、ドイツ部隊、ファッシスト軍、パルチザン行動隊の三者が入り乱れて戦い、ことのほか激しい流血を見た。集落・村落全体が破壊され、何千人もの人々が拷問され、射殺された。その数は、ポローニヤ地方のマルザボットだけでも、七〇〇人にのぼる。パルマもドイツ軍占領下の重荷を負ったし、周囲の丘が激しい戦いの舞台となるのを見た。人々は、試され、傷ついたが、いつものように欠乏と苦難には慣れていたので、百姓の典型的頑固さといろいろな方法で日々の不確実性に対抗した。

この難しい複雑な状況は、サン・ラザロの家に忠実なマルチェッリーナと一緒に住んでいるチェレスティーナにとっても同じだった。すでに四十五才、人としても靈性の面でも成熟した女性であり、周囲の人々に深く影響をあたえた。パルマでは知名人であり、高い評価と尊敬を受けた。特に、サン・ラザロの人々にとって、彼女は、だれに対しても寛容であり、親切で、優しい人だった。

彼女の家は、困った人々の逃げ場だった。赤十字社は、彼女の資格と適性を庶民の救援活動に活用した。彼女の屋敷の屋上に白地に十字の旗を掲げて、救護を必要とする人々を無差別に収容した。息子の戦死で苦悶する母親たち、希望を失った若い未亡人たちが、彼女の助けと励ましを受けた。困窮にあえぐ家族、孤独な女性、逃亡者たちは、彼女が拠点となり、支えとなることを知っていた。

『パラッツォーネ』（共同住宅）の中の、戦前には、いつも集会所にあてられていた一階

の部屋に戦線にいる私たち若者の写真が飾られ、その前で、私たちひとり一人のために、祈らせられ、ロザリオを唱えさせられました。私たちは、彼女の息子でした。エンツォ・ファエッリ氏はこう想い出を感動して語った。

「チェレスティーナに敵はいませんでした。困っている人を、自分の命を張って世話していました」と話すのは、フランコ・ミナルディ神父とその兄弟アントニオである。そして、いろいろなできごとの中でも一九四三年七月以降のことを悲しみながら、こう話した。「伯父のチェザレは、ソラーニヤのディオオーロに住んでいましたが、フォンタネッラートの収容所から脱走した三人のイギリス兵を助けました。近所の家族と連携してしばらくの間かくまいましたが、状況が変わって危険が迫ったので、私たちの父をたよってきました。そこで、わたしたちは、幾日か匿い、そのあと、近くの干し草置き場にかくしました。そこも危険すぎるようになりました。脱走兵たちと話すためにポツテゴ女史に通訳をお願いしました。チェレスティーナは、来て、すぐに自分の家に迎え入れました。わたしたちが、ポー河の向こう側のクレモーナに逃すまでの四〇日以上の間、チェレスティーナは、非常に危険を冒して匿まったのです」。

「力の限りをつくしました。勇氣と非武装の単純さで—ミナルディ神父は、まだ続ける—戦争末期頃、サン・ラザロで、のちほど有名になる事件がありました。鉄道の停車中の貨物車から銅が盗まれたときのことです。ファッシストとナチが家宅捜査を始めました。私たちの家にも来ました。だれが盗んだかは解っていましたが、だれも話しませんでした。

結末として、無実のひとが銃殺されそうになりました。そこで、母が心配して、チェレスティーナに事実を話しに行ったのです。彼女は、なんのためらいもなく、ドイツ軍司令部へ出かけました。何をして、何を云い、だれに会い、だれと話したのか知りませんが、その人は、ただちに釈放されました」。

チェレスティーナ・ボツテゴ——友情と歓待の人

チェレスティーナ・ボツテゴの人柄については、彼女に近づいた人ならだれでも、現実には、あるいは想い出のなかで、臉に思い浮かべる一つの特徴的な面がある。彼女の、ずばぬけた友情と歓待である。つねに浮かび上がり、その生涯を磨き上げる特色である。青年期の澁刺とした希望に満ちた年月、壮年期、穏やかな成熟期、いつも忠実の印である微笑みを浮かべている。

たくさんの人々が、彼女の友情を大切な宝とし、彼女と交際して、生きている日々年月を照らされた特権的な時の想い出をもっている。それは、ごく普通の関係が織りなす秘密の横糸と、意識的に謙遜で柔和で、そして、いつわり無い「御言葉」と結び合わされている愛という貴重な縦糸でできた織物だ。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ15・13)。チェレスティーナは、大きなことにも小さなことにも、いつも素朴で忠実であることによって、毎日、毎月、毎年、自分の友のために命を与えることを知っていた。学校の中では、学生として、後には教育者として、小教区の中でも、種々の活動に参加する中でも、赤十字社についても、自分の街でも、頻繁に旅する中でも、外国滞在中も、チェレスティーナは、つねに友情を結び、その関係が時代の中で、時代を

超えてつづいた。

「一九二四年、カロンティ大修道院長のもとで、チェレスティーナと一緒に、ベネディクトのオブレートとして、奉獻生活の誓願を立てました」と、姉マリアとチェレスティーナにとっても親しかつたルイザ・ボニーが回顧している。「長い年月、一緒に通いました。私たちは、同僚でしたので、カトリック・アクションがローマで企画したいろいろな現代化講習会と一緒に参加しました。彼女からは、なにかしら人々を惹きつけるものが発信されてきました。完全に均整がとれた人でした。決して棘があることや批判的なことは話していませんでした。ずばぬけたユーモアのセンスをもっていました。そして、せりふがすぐ帰ってきて、一緒にいるのがとても楽しい人でした。私がパルマを出てから、長い間、会いませんでした。いつも連絡はとっていました。彼女が私と私の姉妹マリアにくれた最後の頃の手紙を、まだ、持っています」。

「長い沈黙がつづいたけれど、わたしたちは、まだ、若い頃、情熱と愛をもつてはじめた使徒職活動で結びついていますね。また、直接会って親交を暖め、あなたのことを知りたいと強く思います。でも、今、わたしは、心臓を悪くして、冬は家の中に居るよう義務づけられてしまいましたので出かけられません。あなたたちが、サン・ラザロへ来ることはできませんか？

姉妹としての愛情をこめてキスと抱擁をおくります。チェレスティーナ」。

マルグリータ・グアリーリア夫人はこう話す。「わたしがチェレスティーナを知ったのは一九三二年、赤十字社の講習に参加したときでした。わたしが十八才で、チェレスティーナは三十七才でした。でも年の差は、わたしたちが親しくなる妨げにはなりませんでした。そのとき、わたしは、同じ講習に参加しているユダヤ系の人で、アルバ・ファニーという友達をご紹介しました。チェレスティーナは、わたしとアルバを、自習のため、たびたびご自宅に招いてくださいましたので、午後の忘れられない思い出がたくさんできました。アルバもチェレスティーナに強く惹きつけられ、彼女の精神的魅力で、とうとう、一九四〇年には洗礼を願いで、受洗しました。お家は、お父様がラビでしたから、むずかしい事情や反対もありましたのに。その後、戦時中、アルバがご家族と一緒にカルピの強制収容所に入れられたとき、すべての人にたいする献身的働きで有名になり、『カルピの天使』と呼ばれました。……わたしの生涯をとおして、大きいことにも、小さなことにも、いつもチェレスティーナが、わたしの同僚、友だちとして存在していたと云えます。わたしは、六人の子どもを産みました。わたしが、妊娠する度にそれを知らせると、チェレスティーナは喜んでわたしを抱きしめ献待してくれたことを忘れることはできません。わたしと云えば、たくさんの心配事で悩みながら彼女を訪ねて行き、その帰りには、彼女の抱擁に慰められ、自信に満ちていました。彼女の献待の時、他人である自分が、彼女にとっては地上で最も大切な人なのだ、他には誰もいない、と感じさせる『神の賜物』をお持ちでした」。

チェレスティーナは、たしかに好ましい気質に恵まれていたが、彼女は、気品と寛容をもつて自分の命を絶えず捧げ尽くすことによつて、愛の福音的メッセージを徹底して生き抜くことを知っていた。だれでも彼女に近づくと、「自分のあいだ、機嫌がよくなった」、そして神に近づき、自分を磨かねばならないと感じた。その点が、彼女の魅力の秘密であり、彼女の友情の特殊性だった。チェレスティーナが友人のガウディーノを訪ねるとき、この人は、いつも、「大きな羽の天使、チェレスティーナのお出ましだぞ。扉を開け！」と云いながら迎え入れるのだった。

「初めてチェレスティーナ・ボツテゴにお会いしたのは、一九四八年、高等学校時代に女史の生徒だったドクター・グロツシのお宅でした。私は、その場で、先生の強烈な靈性に深く心を打たれました」と音楽家パオロ・カヴァツツィーニ氏は述べる。氏は、パルマで有名なピアノリストであり、長年にわたり、チェレスティーナ・ボツテゴの自宅をしばしば訪ねた。「一九五八年、仕事の都合でローマに移り、何年か滞在しました。パルマに帰ってから、サン・ラザロにチェレスティーナを訪ねる必要を感じました。そのころ、自分の生き方について特に問題を感じていたからでもありません。チェレスティーナは、いつもの暖かさで迎え入れてくれました。そして、わたしが、チェレスティーナの屋敷の静けさの中で音楽を研究したい希望を述べると、大歓迎の身振りで両腕を拡げて、屋敷全体を思いのままにしていると云われました。そして、サン・ラザロに毎日のように通いはじめました。そこで、研究し、ピアノを弾くことができました。……ときどき見に来てくれました。

何も求めませんでした。ただ、よく聴いていました。すべてを神の愛と摂理の光のなかで読みとっていました。彼女が、つねに、洗練された人間性ときわめて繊細な心遣いで、深く神を愛しているのがわかりました。なにことが起きてても、決して驚いたり、取り乱したりしない人でした。彼女にとっては、信仰の中で、すべてが可能であるようにに見受けられました。

彼女の愛しかたは、すべてで、ほんとうでした。いつも、自然に、すべてをつくして他の人に仕えていました。彼女の愛は、私が、私のほかには心に想う人がいないのではないかと考えるほどのものでした。ある日こんなことを私に云いました「『たぶん天国で、なぜ、わたしたちがこれほど愛し合っているのかわかるでしょう』、と。いつも、神の意志と深く一致していました。最高に思慮深い人で、どうい場合にも、神と人との間に自分の身を置くことはありませんでした。

ある日のことです。ピオ神父の事業支援のためコンサートを依頼されたので、サレルノへ行くことになり、出発する前に、挨拶に行きました。その旅行は、私にとっては、非常に重荷で、できないかも知れないという不安を感じていました。だから、挨拶にいったのです。自分では、勇気を得ようとも思っていたのでしよう。わたしと旅をするはずのドクター・グロツシ夫妻が一緒でした。ところが、彼女は、私の状態に気づき、ほんとうに、私にはできないかもしれないと解るやいなや、なんのためらいもなく、私たちと一緒に旅することを決めました。旅行中つづいた心配にもかかわらず、彼女がいるだけで私には勇

気が湧き、コンサートは、おどろくほど上首尾でした。

その、すべてで、ほんとうの愛しかたが、使徒職の意味をわからせてくれました——使徒職とは、他の人に仕えるために自分をむなくすること以外のなにものでもない。大きな苦しみを越えて身につけたにちがいない成熟した言行一致の偉大な姿を、私は、いつも、彼女のなかに見いだしました。その愛情は、非常に人間的でありながら、しかも同時に、神に向かわせるものでした。私は、彼女を交響曲的な詩に例えるのが好きです。その詩は、無限に転調を続ける流動的なもので、平静であり、きわだち過ぎる主旋律がない……」。

すべてを神の中で生きること、自分に近づく人に神を知らせることの願いが、若い時代、熟年時代をとおして、彼女のすべての関係に深く刻みつけられ、また、すべての友情関係に特に目立つ特徴である。その交友関係は、まさに人間的だった。彼女は、感觸と知性をもちいて、自然な協調性を引き出すことを知っていた。その自然な協調性が、ほんとうの友情の基盤であり、その上にそれぞれの人の、その人がぎりの、忘れられない関係を築き上げていった。出発点は、文学、音楽、教会の典礼、靈的生活、教育、使徒職など、共通の興味でもよかった。しかし、彼女と接触した人は、同じところにはとどまらなかった。さらに前進し、視界をひろげ、源泉を訪ねるよう招かれた。

フレンツェの大学に通っている頃、ドロシー・ベントンは英語の教員だった。ドロシーは、聖公会の牧師と結婚した後も、長年チェレスティーナと交際し続けた。ホワイト夫人となったカトリック信徒のドロシー・ベントンは、夫とともに何回もイタリアに來た。夫

は、たちまち、夫人が昔の教え子にたいしてもっている友情と尊敬を共有することになった。

エキユメニズムが教会に入り始めたばかりのころ、チェレスティーナは、ホワイト夫妻を寛大な心で迎え入れただけではなかった。パルマの司教から、ケント・ホワイト師が、彼女の屋敷でミサを行う許可をも得た。この厳格なアングリカン牧師の心に深く刻みついた彼女の言動は、どのようなエキユメニカル運動の主張よりも雄弁である。一九五四年、チェレスティーナに始めてあったとき以来、ながく友情をたもったザベリオ会宣教師フランコ・ソットコルノ神父は、こう書いている——「私は、友人であり、子どもだった。有り体に言えば、異なる種類の親近感をもち、彼女の心を少しばかり知ることができた。チェレスティーナの靈性は、なににもまして、つねに、教会典礼によって育てあげられていた。若い時代には、あのイタリア典礼刷新の大使徒エンマヌエレ・カロンティ大修道院長の指導を受けた。……第二ヴァティカン公会議以降の典礼刷新のときには、刷新の流れそのものがつきつきに生み出していく提案とわれわれが取り組んだ具体策のすべての『新しい』点に、チェレスティーナは、いつでも、心をひらいていて熱心だった。つねに、近況情報、説明をわたしに求め、深い理解と濃い典礼生活を示していた。彼女の靈的生活の中心には、典礼、特にミサがあったと云えると思える。われわれの友情についても、中心には、まさしく共通の関心の絆として、典礼があった。……彼女の靈性のもう一つ特徴は、エキユメニズムに向かつて開いていたこと、エキユメニズムに対する誠実で、生き生きと

した関心である。自分が育った遠いモンタナの街に住んでいたころ、プロテスタントの人たちと出会ったのが若い頃の最初の経験だったと、ときどき、話してくれた。すべてのキリスト教徒が、一つになることを心から願い、しばしばエキキュメニカル運動の進展に関与した」。

チェレスティーナの友情の範囲はすべての人におよび、それを、小さな具体的なことで表現した。―「誕生日とか、記念日は決して忘れませんでした。いろいろな機会に、かならず手紙とか、ブレゼントとか、適切な記念品を贈って、きつちりと喜びを表しました」と、ロザリア・カヴァッチーニは想い出を話す。ロザリアは、ピエトロ教授の娘で、きょうだいのドクター・フランコ、シスター・ヴィットリアと一緒に、ボツテゴ家で幼少期を過ごして、チェレスティーナと親しく交わる特権をえた人である。その関係は、決して変わらなず、チェレスティーナの生涯の最期の日にも近く付き添った。

「実際には、チェレスティーナが、生まれたばかりの私を抱き、それからずっと私に付き添ってくれた」と、ドクター・フランコは想い出を話す。「私は、チェレスティーナとの関係を『天的な接触』だと好んで表現します。その穏やかさを私は、全生涯のあいだ味わいました。第二の母がいなくなったのと同じです。死ぬ少し前、会いに行つたとき、彼女はほとんど反応が無く、目を閉じて、うとうとしていました。ところが、私がそばに居ることを告げ、そして、『好きです』、と云つたとき、目を開いて、感動的に私を抱いて、キスして、答えました―『そう、フランコが、わたしをすきだつてこと知つてますよ』。そして、また目を閉じて、うとうとし始めました」。

「いつでも、わたしたち皆のとても近いところになりました」と、シスター・ヴィットリア・カヴァッチーニが言葉をついだ。「いつも、穏やかな人だつたのを想い出します。平和の人。わたしの修道生活には、生涯、いつも付き添ってくれました。そして、私たちの家族の事情があることに、いつでも、そばにいてくれました」。

チェレスティーナの友情の暖かさと優しさを近くで経験した人の例はたくさんある。その場の事情に応じて、ときには母性的愛、ときにはきょうだいの愛となり、いつも実り豊かで、喜びの宝船だった。

ところで、チェレスティーナの一生には、一つの出会いがある。その事件は、彼女の生活に深い印しをのこし、彼女の生活の流れを変えた神の計画であり、彼女に固有の、特権的なものである。それは、すべてを捧げつくして、信仰の深みの中で生きた関係であるから、わたしたちには、その深さを窺め尽くすことはできないが、ただ、ゆらめく視点と心の深い感動をもって受け入れることができる。彼女とともにマリア布教修道女会の創立者となつたザベリオ会宣教師ジャコモ・スパニョーロ神父との出会いである。

「マリアの名も付けます」

一九四〇年、ジャコモ・スパニョーロ神父が、ザベリオ会経営の高等学校の教師として、同時にパルマ大学工学部の学生としてパルマに来たときは、二十八才の若い宣教師だった。少し前、ローマのウルバニア大学で布教を学び、聖プロスペロ・ダクイターニアの『すべての民の召しだし』について論文を書き、優秀な成績で卒業してきたばかりだった。いま、工学を学んでいるのは、技術者として宣教の準備をするためだった。

ジャコモ神父は、一九一二年一月三十一日、アシアーゴの高原の農村ロッツォで、九人の子どもの長男として生まれた。幼少の頃、ヴィチエンツァのザベリオ宣教会「使徒の家」に入り、それ以来、一九三四年十一月十一日、わずか二十二才で司祭になるまで、一貫してザベリオ会で教育を受けた。

ジャコモ神父は、活発で抜群な知性と深い霊性的生活の面で際だっていた。多くの才能に恵まれ、宣教と神の国のために、平静な寛大さとまれに見る繊細さをもって、それを活用することを常に心得ていた。容姿は、すらりと背が高く、そのころの宣教師に共通しているとおり手入れしない黒いヒゲをはやしているのが、厳しいように目に写り、畏怖の念をいだかせたかもしれないが、その実は、神父に近づく人は、大きく黒くて笑っている目

の中に、並外れた優しさと、めったに無い柔和な人柄を見つけた。

少年の頃から聖母マリアにたいする特別の信心をもっていた。生活の重要な節目には、いつも、聖母にたよった。若くして健康に問題があり、上長たちが、司祭叙階を延期しようとしているような気配を感じたとき、ジャコモは、一九三四年八月二十日付けで、当時の総会長、アマトリーレ・ダニーノ神父宛につきのようながみを書いた。

「毎日、わたしの貧しい祈りの中でお願いしている最大の恩恵は、私が、ひとときでも早く司祭になることです。……私が、それに相応しくないことは知っていますが、私が司祭になろうと望んでいるのではなく、私からではない召しですが、そののぞませるのです。イエスが私を呼んでいるのです。……私が副助祭の準備にはいるよう指示する総会長からの電話電報を待ちます。もし、それがなければ、聖母が私に拒絶する最初の恩恵になるでしょう。すでに、去年の初めから、私がい今年中に副助祭に叙階されたら、私の名にマリアの名も付けますと聖母に約束しました」。

「マリアの名も付けます」

願いは聞き入れられた。希望をはるかに上回って、その年の内に、副助祭だけではなく、助祭に、つづいて、司祭に叙階された。その知らせは皆を驚かせた。とくに家族の人々は、信じられないで、しかも同時に、幸せだった。それを一九三四年十月二十九日の父からの

手紙が表している。

「土曜日、アシアゴへ行きました。家に帰ると、お前からの知らせがとどいていました。……爺さんは慰めをえて、輝いています。部落全体が話でもちきりです。

そこで、準備のためにすることが結構あります。……十一月十日は、そば近くで儀式にあずかり、我が家のよろこびを分かちあうために、そちらへ行きます。

そのあいだ、神がお前に、お前が必要とするすべての恵みをくださるよう祈るばかりです。しっかり！ 神が、いつも、どこでも、お前を祝福してくださいますように」。

こうして、ジャコモ・スパニョーロ神父は、一九三四年十月二十八日副助祭に、十一月四日助祭に、ひきつづき十一月十一日司祭に叙階された。聖母は、望んだよりもはるかに多くを彼のために取り計らってくださった。ジャコモ神父は、約束を忠実に守った。そのときから、ジャコモ・マリアと署名し始めた。

叙階後、ただちに、神学過程を終了するためにローマへ派遣された。その後、一九三九年、アンコーナに近いポツジョ・サン・マルチェンロのザベリ才会の家の副院長に任命さ

れた。しかし、マルケの小さな村の気候は、青年期にはじまった結核性の病気があり、健康が悪化したので、やむなく上長に他の土地へ転任を願い出た結果、一九四〇年九月、高校教員として、パルマに呼び返された。同年、彼は、工学部に籍を置いている。戦争開始の年であり、ものごとが不確実だし、不足が目立ったにもかかわらず、ジャコモ神父は、勉学と教育にめざましく働き、パルマでの、はじめの二年が過ぎると、さらにボローニャ大学の二年過程に進んだ。

数学と工学的計画に没頭しているジャコモ神父は、神がみ摂理的に、全く新しい別種類の建築計画につかせるため忍耐強く準備しているとは知るよしもなかった。

偶然で平凡だと人の目に映ることが、実は、神の智慧の御手の中では、新しい歴史の始まりであり、または、神の考えと人間の自由とが縫い上げる刺繍にたとえらると、それは、時間的には、はるか以前に始まっているながら、今日の時点で可能になった、最後の仕上げである。

学校では教える立場と学ぶ立場にありながら、戦時中のことだったから、不安定な交通機関に頼ってパルマーボローニヤ間を往復したのだが、ジャコモ神父にとっては、司祭職を果たし、霊的指導をもとめる人に近づくのに好都合だった。まさに、そのような働きの中で、神の計画を実行に移せる人と出会ったのだった。

彼の文書により、一九四二年の最初の月頃、修道生活に入るか、もしくは、新しい施設を創設しようとしている一人の独身の女性に彼の下に来て、助言と助力を求めたことが知られる。この単純でおよそ平凡なできごとが、ジャコモ・スパニョール神父の生活展望を根本的に変えてしまった。つまり、この女性のことを、当時、総会長補佐だったファウス

ティーン・テイソット神父にうち明けると、帰ってきた言葉が、「その女性に私たちの姉妹会を創設するよう勧めたらどうだ」ということだった。

ジャコモ神父は、「さりげなく言われた」と、書いている。そして、こう続けている―「まるで、何ごとでもないかのように、また、何も新しいひらめきがあつたわけでもないかのように」。

それは、一九四二年の四旬節に入ったところだった。ちょうどその年の三月十八日、パルマ教区では、ファウスティーン・テイソット神父を列福請願責任者として、コンフォルティ司教の列福調査がはじまっている。テイソット神父は、請願責任者、ザベリオ宣教会総会長補佐として、コンフォルティ司教の著述の原本、および複製を収集し、整理していたので、コンフォルティの文書には精通していた。ジャコモ神父に答えるには、コンフォルティ司教が、一九二六年五月八日布教聖省秘書であつたペコラーリ師宛に差し出した書簡が参考にされたに違いない。

「拝啓

ご厚意に信頼して、助言と現実的示唆をいただくため、当方から、私案として、次のことを申し上げます。パルマ外国宣教会が、常に発展し続け、経験を積み重ねている現状下で、同宣教会が期待する宣教業務に適した修道女を探すことは困難であると思われれます。そこで、その目的のために、パルマ

に女性宣教会を設立して、期待される宣教活動を支援するよう計らうことを夢見るのですが、いかがですか。

ほとんどの男性宣教会において、その事業を補完するため、何らかのかたちで女性修道会を併設しているのが見受けられます。私が理想とする修道会は、バルマの施設が付託された宣教事業の遂行に余力を見いだした場合は、その他の外国宣教会支援も可能とするものです。

貴下に全面的信頼を寄せて、請願は、貴下あるいは、修道者聖省宛に提出すべきか、また本件について、大筋において承認されるものかお伺い申しあげます。お考えがあれば、遠慮なく仰ってください。私の方では、考え及ぶかぎり検討してみます。

敢えて私見を申し上げ、ご面倒をかけることをご容赦願ひ上げます。

敬白

大司教グイド M.

イエス・キリストにおいて

また、一九二七年七月二日付けの別の書簡で、コンフォルティ司教は、布教聖省宛に次のように書いている。

「現在、当施設は、宣教活動に従事するための要員を供給するための従属機関としては、いかなる女性修道会をも設置していない。……しかし、そのような施設が、およそ不可欠であるとの判断から、可能な状況になり次第、実現させたい考えである」。

コンフォルティ司教の死が、この計画実現をさまたげ、長年にわたって、雪に埋もれた種のように忘れ去られた。ティソット神父のことばが、自分の創立者の希望と計画を知らなかったジャコモ神父の心の中で、新しく鳴り響き、偶然にちかいかたちで、衝動的に、それまで考えたこともなかった計画の実現を考えさせ始めた。

ジャコモ神父は、日誌にこう書いている。「はじめからやり直した。数学が建築学の一つの定理と他の定理のあいだを行き来するみたいだ。私の主なる神と対話しているとき、頭は、修道会創立計画の方へ行ってしまふ。……ほってはおけない。これは、本当に私がすべきことなのか?」

人間的探求と神の計画

ジャコモ神父は、上長たちの励ましと幸運に力づけられて、未完に終わったコンフォルテイ司教の願望を実現すべく、助言と指導を求めた。大学の講義を受講するため定期的に通ったボローニヤでは、同市のグイッザールデイ補佐司教とミラベリ神父（イエズス会）とに会い、助言を求めた。二人とも、計画を進めて、この事業に適した人を捜すよう励ました。

スバニョーロ神父を訪ねたくだんの女性は、コンフォルテイ司教の計画に沿って新しい女性修道会を創立する希望について、最初は、関係することを承諾したものの、そのあと、「別な道を見つけて、要請を辞退した」。

この拒絶が、ジャコモ神父を降参させるどころか、かえって神の計画探求に情熱を燃やすことになった。彼の中では、この「計画」は、すでに姿かたちをつくり始めていた。ただ、神の民心のままに、チャンスを待っているだけだった。かなり以前から、トゥルチ神父とは、「友人と云うよりは兄弟のような信頼関係にあったので、計画と期待」について、このときも、相談した。彼より、いくらか年上のトゥルチ神父は、中国にいたころ、宣教活動の種々の事情に対応できる大きな活動性と弾力性をもつ女性修道会がザベリオ宣教会

と一緒に協力して活動すれば都合がよいと、一度ならず考えたとうち明けた。そのときから、この計画実現にむけて、一緒に、祈り、希望し、互いに情報を提供しはじめた。

戦争は、ますます烈しくなり、なにごとにせよ積極的に推進することは困難になり、一時しのぎになっていった。都市爆撃がますます頻繁になったので、人々は防空施設に待避せざるをえなかった。ジャコモ神父は、祈りによって最初のきつかけを求めながら、ボローニヤ大学の受講とパルマのザベリオ会高等学校の授業を続けた。一九四三年七月二日の日誌にこう書いている。

「われわれの女性宣教会創設を、しばらく前から考え始めたが、ボッテゴ女史が、あらゆる点から見ても、この事業に適していると思った。そのことをトゥルチ神父に提案しようと思ったもの、数日間、その件を忘れていた。ついに、話した。彼は、あらゆる点で妥当だし、可能なことなのに、一度もそのことを思いつかなかったと驚いていた。そこで、最初の面会を決めた。

その面会は、今夕、ファリーニ通りにあるパラッツォ・パツラヴィイチーノのスペイン人女性修道会の一室で実現した。そこで、女史は、靈性修練中だった」。

て間もない養成所のためにサン・ラザロの人々のところに寄付を募りに来たおり、ポツテゴ邸も訪ねたのが最初だった。事実、その年、ザベリオ宣教会の第一回総会が開かれ、コンフォルティ司教が議長となり、経済的に困難な局面にあったザベリオ宣教師養成所と連帯してその需要を支援するために「神のみ摂理の会 Opera della Divina Provvidenza」が設立発足した。

宣教師たちが、各小教区と各家庭を訪問して、土地の作物を人々が喜捨するのを集めて廻った。コンフォルティ司教は、錬磨された福音的精神をもって、自分の宣教師たちの生活の必要を満たすために寄与し、また、宣教師たちの中には、み摂理に対する生き生きした信頼を若者の心に植え付け、さらに、自分の教区の人々の中には、寛大と連帯の感性を育てることを目指して、この活動を支援し、祝福した。そのような事情の中でトウルチ神父は、寄付を募るためにサン・ラザロの主任司祭をたずね、ポツテゴ莊園を訪れたのだった。

「ある仲間が、「コンフォルティ司教の認可という」祝福の喜びをもって、ブドー酒を少しばかり寄付してもらうために、サン・ラザロを訪問した。主任司祭は、気持ちよく、サン・ラザロの良い家庭を紹介した。先ず最初にポツテゴ家を紹介しながら、無条件に褒めた。……神父は、古い小型トラックに乗って、畑に沿う小道を進んだ、緑の木立の奥に二階建てのポツテゴ莊園が

ひっそりと建っていた。空の大瓶をトラックからおろした。五〇リットル入りだった。そして待った。

『この宣教師の神父様たちにブドー酒をあげなさい！……神父様たちも喜んで元氣が出るように』と、ポツテゴの父親が忠実な家政婦のマルチェッリーナに言いつけた。大瓶は、上質のブドー酒で満たされた。

それが、み摂理によって、パルマの学校の英語教員ポツテゴ女史を知った最初の、ほとんど取るに足りない、些細なできごとではある」。

そのときから、ザベリオ校の生徒たちに英語を教えていたトウルチ神父は、英語を深めるためサン・ラザロに通いはじめた。まもなく、他の宣教師仲間もポツテゴ女史の英語の授業に参加しはじめた。一九三四年、トウルチ神父は、中国へ出発するにあたり、アマトーレ・ダニーノ総会長の許しをえて、ポツテゴ女史が自分の授業を引き継ぐよう取りはからった。そのとき以来、宣教地にいる間は、つねに女史と文通を続けた。

だから、ジャコモ神父のアイデアを喜んだ、そして、その提案をチェレスティーナに橋渡しする役を引き受けた。彼女は、ちょうどその頃は、フアリーニ通りのスペイン人女子修道会で靈性修練中であつた。トウルチ神父は、(一九四三年)七月二日、聖心の祝日、彼女を訪れた。「ヴィータ・サヴェリアーナ」一九六六年七月号の記事にトウルチ神父が、その時の様子を細かく思いだして書いている。それは、「午後四時だった」。ポツテゴ女史を

呼んでもらって、説教が終わるのを待った。そして、

「女史は、現れると、ちよつと驚いた様子を示した。……『不幸なこと?』と、微笑みながら言った。

『全然。でも黙想と、祈りと、精神集中を必要とするお恵みのこと』」。

神父は、こう答えてから、スパニョール神父の提案を説明した。

チエレスティーナは、傾聴した。そして、「新しいことだし、まったく思いもしなかったことなので、祈りながら考え、靈性修練をおえてから、答えたい」と、応じた。

こうして、幾日かして、靈性修練が終わってから、トゥルチ神父とジャコモ神父は、答えを期待してポツテゴ莊園を訪れた。トゥルチ神父は、チエレスティーナに、まだ面識がないジャコモ神父を紹介し、ただちに、本題に入った。チエレスティーナは、両神父から新しい宣教事業体を彼女が起こすよう要望する理由を注意深く聴いた、しかし、最後に冷やかして、「神の事業を興すよりも、壊す方が適していますよ」と答えた。必要な手段を講じて協力することはできるが、修道会を創設する適性は持ち合わせていないと言うのだった。

ジャコモ神父は、かえって確信を深め、祈りを増やし、神の計画実現のために心の準備をすすめた。しかし同時に、まずは、ポツテゴ女史とこれ以上話さないことにした。トゥ

ルチ神父もそうすることにした。

摂理的避難生活

しばらく時がたつと、チェレスティーナは、新修道会創設の件についてジャコモ神父ともドウルチ神父とも話さねばならないと思うようになった。最初の拒絶の時以来、心の内が妙に乱された、さらに、一九四四年の復活祭のとき、ジャコモ神父が贈った賀状の言葉が気になった。復活祭の喜びの挨拶とヴェラスケスが描いた十字架の小さな絵が入っており、その裏には、ただ一言『すべて!』と書いてあった。その一言が、何の説明もないまま心に深く突き刺さり、平和を乱したのだ。

一九四三年八月十三日、ジャコモ神父は、神学部 of 学生の院長に任せられたため、技術工学の研究は中断せねばならなかった。責任を負わされると同時に、困難な事態が生じた。都市にたいする爆撃が烈しくなり、食料は配給制度になり、学生寮の大消費家族の食料調達は極めて困難になった。そのため、共同体は、二カ所に分散されることになった。高校生たちは、ラヴェンナに近いサン・ピエトロ・イン・ヴィンコリに疎開し、神学部の学生たちは、パルマ市に残った。その一年後、一九四四年四月二十三日と五月二日の爆撃後は、市に残るのはあまりにも危険であったので、神学部の学生をアペニン山脈の寒村カプリリヨに疎開させることにした。村は、パルマ地方に属し、約千メートルの高地にあり、ザベ

リオ会に属する田舎風の山荘があり、「ラ・プロヴィデンツァーみ摂理の家」と呼ばれていた。

村というよりは、カプリリヨは一握りの集落だった。村の人々は、放牧とそれに関連する仕事で生活していた。アペニン山脈の波打つ斜面に根を下ろしたこの集落は、その名も緑の牧草地に群がる山羊（カプリ）たちからとったものだった。わずかばかりの家が、まるで雌鳥がひよこを囲むように、小さい教会堂のまわりにあった。海拔一五八〇メートルのカイオ山が、砂丘の間でうとうととしている駱駝のごぶのようにアペニンの尾根から突き出ていた。山裾から谷水が湧き、綺麗な小川になって牧草地帯を潤し、村に水を供給している。春には、矢車草、ひな菊、えにしだが、濃い牧草の緑を飾って咲き乱れ、山羊たちの刺激の強い臭いが朝のそよ風の中を漂い、牧者たちの声が遠く聞こえてくる。冬は初雪と家畜の移動とともに、カプリリヨでは、家の奥で、牧舎のぬくもりの中で、年寄りから若者に職業と生活の技術を伝えるのが、夜なべの楽しみ、昔の知恵の誇りだった。

この地帯周辺で烈しく対抗しているパルチザンとドイツ部隊の存在がなければ、この自然の美しさと山間の静けさは、宣教師をめざすこの小さな共同体の勉学と祈りの生活にとつて、格別に理想的な環境だった。

ザベリオ会の人たちが収まった古い田舎の家「ラ・プロヴィデンツァー」は、村の小さい教会からちよつと行ったところにあった。小道が、家の前で広くなり、あちこちに草が生えて緑が拡がる起伏の多い広場になっていた。建築は二階建てで、単純な長い長方形で、

いかなる独創性も見られないものだった。ちようつがいがきしむブナの狭い扉でできた入り口からは、ただ一つの広い空間が見渡され、構造全体が、使用目的ごとに、おおむね、区分されている―炊事場、食堂、共用面談室。一階の家具は貧しく、木製の重たい長椅子が壁に寄せてあるだけだった。

きしむ狭い階段をのぼって二階へ上がると、一階と同じ作りで、寝室になっていた。低い折り畳みベットが壁にそって二列に並び、すり切れた古毛布が、間に合わせのマットレスのでこぼこをかるうじて覆い隠していた。この共同寝室は、東南に開いた窓から、朝の太陽の光が差し込んだが、「ラ・プロヴィデンツァ」のすぐ北側の突き出た斜面に陽が隠れると、たちまち薄暗く寒くなった。

ジャコモ神父の自由な精神、先見の明、柔軟な頭脳が、この窮乏状態を、単純な生活と山の厳しさに刺激を感じる若いザベリ才会学生による兄弟的共同体と共同生活の積極的体験にしてしまった。技術者としての才能が、一度ならず、み摂理的価値を發揮した。彼は、生きた靈性に裏付けられた深い教養の故に、学生からは尊敬され愛される教育者、師匠だった。

一九四四年、カプリリヨにいた神学科学生のうち八名は助祭であり、五月二十八日、パルマのザベリ才会宣教師養成所のチャペルで司祭に叙階される予定だった。その日が迫っていたので、ジャコモ神父は、神学科学生全員を対象に、靈性修練の指導に入った。

その日々の深い靈性的雰囲気は、その地域で、悲しくも激化する戦争と市民間の抗争と

対照的に、兄弟愛と正義にもとづく平和の世界実現へのささやかな希望を感じさせた。

山岳地帯では、パルチザンの抵抗が強化される一方、都市部では、南イタリアの連合軍上陸を受けて、徹底抗戦の構えに入ったドイツ軍の監視が厳しくなった。パルマでも、すでに一九四三年九月八日には、ドイツ軍司令部が置かれ、地域を占拠し、抗戦組織をつくっていた。個人宅や公共建造物が、頻繁に、軍指揮用施設として接収された。一九四四年春、ポツテゴ荘園もドイツ軍指揮所として接収されたので、チェレスティーナと家事手伝いのマルチェッリーナは、疎開せざるを得なかった。不安定な状況下だったので、ザベリオ会の神父たちが、神学生とともにカプリリヨへ疎開している事情を配慮して、同じくアペニン山脈の村に移り、そこを連絡拠点として、とりあえず学生たちに英語の授業を続けることにした。そこで、カプリリヨ村で一室借り、マルチェッリーナと同居することにした。

ジャコモ神父が、靈性修煉の指導を始めたとき、チェレスティーナは、そこに毎日出席したいと申し出て同意を得た。聖霊降臨祭の前の八日間に入っていた。チェレスティーナは、心を自由に、空にして、自らはなにごととも計らわず、靈の導きのまま柔順に準備して聖霊の降臨を待たねばならないと思った。こうして祈りと沈黙がつづいたあと、以前から彼女の中に作用していた神の働きが実った。ジャコモ神父に答えた最初の「ノー」以来の

苦悩が、ついに解けて、晴れやかな喜びと信頼に満ちた奉仕の覚悟に替わった。ジャコモ神父の日記は、こう記している。

「今夕、第三回目の説教のあと、十六時半ごろ、聖堂を出ると、女史に出会った。彼女も聖堂を出たばかりだった。ロザリオを手にしてルルドのグロッタの方へ向かっていた。……彼女は、義務を負うことを予感するもの、あることについて助言がほしいと言った。例の事業に拒絶を決意して以来、自分の都合に執着しているように思えて、落ち着きを失っていた。また、御復活祭の賀状に添えた十字架の御絵の裏にかいてあった『すべて！』を見て、さらに動揺した。そして、特に、この黙想の日々を通して、自分を求めるのではなく、ただ主のみを求めるべきことをはっきりと理解した。だから、『イエス』と答えるべきだった、と。

それでは、『イエス』と答えれば、落ち着きが戻ると思うのですかと質問したところ、いかなるものにせよ、彼女の決意を取り消す決定が下されさえしたら、平和になるでしょうと答えた。回答は、明白である。そこで、関係するほかのことなどを話しながら、彼女を勇気づけた、もっと正確には、私の意志は、イエスの御旨だけを探し求め、つねに、なすべきことが何か御旨の印しを待ち、解れば、それに従う考えであることを表明した。

要するに、新しい女性宣教会は、今日、主に向かって『Hut（なれかし）』と答える創立者を見いだしたのだ」。

戦争の嵐のなかで

幾日かが過ぎた。五月二十八日、聖霊降臨の祝日、予定どおり、ザベリオ会宣教師養成所の聖堂で挙行される司祭叙階式のために、全員がパルマへ帰った。空爆の危険があつたので、儀式は、早朝四時から、コツリ司教の司式で執り行われた。チェレスティーナは、叙階される若者のうち、テルツォーニとデイ・ナポリの親族が、戦争中で、遠距離であるため出席できないので、兩名の代母として儀式に参列した。七時頃、不意に烈しい爆撃があり、全員が待避壕に避難する場面もあつたが、チェレスティーナは、終日付き添つた。さらに幾日かが過ぎた。アペニン山脈のほうが市内よりも安全であると考えて、ジャコモ神父は、再び、全員をカプリリヨへ連れ戻した。彼らと共に、チェレスティーナも戻つた。彼女の荘園は、まだドイツ軍が接収していた。

しかし、それらの月日、アペニン地帯は、パルチザンの活動の拠点・隠れ家となり、かつてないほど、烈しくドイツ軍に抵抗していた。ドイツ軍は、全地域の徹底的掃討を開始した。七月二日、早朝三時、ドイツ軍部隊が、カプリリヨに到着した。わずかばかりの村人を捕虜とした上、神父たちと神学生たちが、何も知らずに休んでいる「ラ・プロヴィデンツァ」へ向かった。突然、目を覚まされ、信じられないでいる彼らを、軍は、隣村のラグ

リモーネへ連行し、そこで、他の捕虜とまとめてトラックに乗せ、レッジョ・エミールリアに近いビツピアーノの強制収容所に移送した。

その日、カプリリヨは、悲しみの予感と恐怖の影に覆われていた。女たちは、心配し、怯え、反射的にチェレスティーナのもとに集まって、力と助言を求めた。チェレスティーナは、すぐ、「ラ・プロヴィデンツァ」に行った。しかし、いつもと違い、家は妙に静まり返っていた。彼女は、こう語っている。

「七月二日の朝、目が覚めたとき一日曜でした―夜の間に、カプリリヨの男性たちは、神父も学生も含めて、ドイツ兵が、ラグリモーネに連行したと聞かされました。彼らは、食料も困りもない広場に集められたということで、今後、どうなるのかとても心配でした。女性たちは、非常に動揺しているの

で、私と話して、気を落ち着けようとしていました。私は、彼女たちと一緒に、この夜、何が起こったのかを正確に把握するとともに、祈るために、教会堂へむかいました。教会も司祭館も空で、あれほど、学生たちの活気が溢れていた「ラ・プロヴィデンツァ」も、窓は閉まつたまま、まるで、砂漠のように静まり返っていました。そこで、みんな、男性たちの行方を知るにはどうしたらいいのか、何か救済物資をとどける方法はないのかと考えました。その挙げ句に、食料をラグリモーネへとどけるこ

とに決めました。そうして、私とマルチエツリーナ、村で威勢のいい娘四人とが、歩いて出発しました。

ラグリモーネ近くにたどり着いたとき、ドイツ兵に出会い、ついていくよう命令され、指令所になつている家に連れていかれました。その途中で、村を通り抜けるとき、首吊りにされている一人の男性の前を通りました。司令官は、私を紳士的に迎えてくれました。彼は、イタリア語が解りませんが、私には、ドイツ語ができたので、そこへ赴いた理由を説明することができました。しかし、わたしの言葉は信じて貰えず、わたしたちが運んだものを渡すよう命じられ、兵卒に検査するよう指示しましたが、何も発見できなかったので、司令官は、わたしを机のそばに呼び、わたしたちに恥ずかしい思いをさせたことを詫びた上で、私に、白ブドー酒をすすめましたが、断りました。

解放されて、カプリリヨに帰つたものの、捕虜の消息を知ることにはできなかっただけではなく、かえって、イタリア人に全く好意的ではない人間の手に落ちたことを知り、悲しみにくれていました。私たちの帰りをまつ女性たちの心配は、ご想像のとおり、とても大きなものでした。その時点では、それ以上できませんでした。そこで、わたしは、御聖体を守るために、マルチエツリーナと一緒に、司祭館に泊まることにしました。

それ以後は、祈りとつらい心配の日々でした。ドイツ軍は、周辺の搜索を続け、時には、私たちの所にも来ました」。

その一方、黒いスータンを着た若い宣教師たちをも含めて、捕虜たちを乗せたトラックが、パルマを通り抜けるとき、夜明けの薄明かりの中とはいえ、人目に付かないはずがなかった。運転手は、ビッビアノへ行く道をよく知らなかったので、幾度か道を尋ねざるを得なかった。捕虜が、事情を連絡するには、それだけで十分だった。ただちに、ザベリ才会の上長と司教に連絡が入った。彼らは、八方手を尽くして救出に専念した。事実、その翌日、捕虜は全員釈放されてパルマに帰ることができた。

カプリリヨでは、その情報がまだとどかないので、皆が非常に心配していた。チェレスティーナは、村の女たちと一緒に次の戦略を考えた。

「なにかの手がかりになる情報を手にいれるために、かなり年をとっているフィロメーナが、パルマまで歩いていくことを志願しました。年のせいで、途中のドイツ軍の検問を、疑われずに、越えていけるはずでした。フィロメーナは、四日後、スパニョーロ神父の手紙をもって帰ってきました。冒読されるのを避けるために、教会の御聖体は、全部拝領してしまおうようにと書いてありました。」

その通知を受けるとすぐ、私は、女性全員を集めて情報を知らせると同時に、御聖体を全部拝領してしまわないといけないので、御聖体を受けたい人は、翌朝にむけて準備するよう伝えました。翌日、定刻に、女性たちは全員、祝日用の衣装を着て教会に集まりました。一緒に朝の祈りをしたあと、私、がごミサと、御聖体拝領について話し、そのあと、聖櫃を開けて、御聖体拝領台にちかづいた人すべてに、聖体を授けました。その後、また、みんなと一緒に、主にこの賜物をいただいた感謝の祈りを捧げました。たくさんの方がいる教会のことですから、御聖体の数はたくさんありました。それを全部、拝領してしまわないといけないとのことなのですが、この危険と孤立の中では、毎日の御聖体拝領が大きな支えなので、少し残しておくことにしました。ガルヴァーナ家では、お年寄りが臨終を迎えていましたので、よかれと思って、御聖体を容器に入れて運びました。心の準備をするよう手伝い、拝領させようとしたが、すでに意識がなく、できませんでした。

フィロメーナは、再び、パルマへ、カプリリヨの状況を神父さまたちに知らせるために歩いて出かけました。その間、村は、二度、搜索されましたが、幸いなことに、重大なことにはなりませんでした。最後に来たドイツ部隊は、わたしたちのことを、強く疑っているようで、司祭館に火を付けるとまで言いました。私は、そのようなことをしないように、彼らのご機嫌をとりなが

ら、説得しました。そして、とうとう納得して、私たちを脅したことを恥じるようにしながら去りました。

フィロメーナが帰ってきました。スパニョール神父様から、重ねて指示がありました。残している御聖体は、ただちに、全部拝領してしまおうようにとのことでした。翌朝、私たちに、もう御聖体はありませんでした。でも、その日の午後遅く、何週間か山林に隠れていたという司祭からの連絡が入りました。夜半頃、ごミサを捧げたいので、準備してもらいたいとのことでしたので、香部屋に小さな祭壇をつくり、外に光がもれないように、窓に織物をかけて丁寧な暗くしました。こうして、わたしたちは、ぼろぼろの服を着た、髪のももヒゲも伸びほうだいの神父様のごミサにあずかりました。

そうこうするうちに、神父様たちも、学生も帰ってきたという知らせを受けました。実は、その人たちのおかげで、ほとんどいつでも聖体拝領の慰めを得ていたのです。主は、つねに近くにおられ、わたしたちを守って下さいました。村は、全体としては、害を受けず、男たちは、全員救われて健康に帰ってきたのです」。

マリア布教修道女会

戦争は、ジャコモ神父と神学部の学生たちを紛争の間、カプリリヨに縛り付けたまま、一九四五年四月二十五日まで続いた。チェレスティーナは、ドイツ軍がサン・ラザロの莊園を退去すると、ただちにパルマに帰り、激動の中で教壇に立ち、小教区の活動に戻った。「フィアット」(仰せのごとくわれになれかし)は、一九四四年五月二十四日、つましく貧しい寒村カプリリヨで発した言葉だったが、意味するところは、沈黙、祈り、奉仕の覚悟、芽が出るための時間を必要としていたから、その環境が、かえってナザレトの時のように、豊かな実りをもたらすことを予感できるということであった。それにつづく月日は、揺れ動く血なまぐさい戦闘の末期だった。チェレスティーナは、祈り、信仰の中で、召し出された母親としての使命に成熟していった。

ザベリ才会の兄アレックスandro神父の叙階式に出席した際、宣教会の設立計画を知った妹のテレザ・ダニエリが企画に賛同して、一九四五年七月十九日、チェレスティーナの仲間に加わった。その機会に、ジャコモ神父は、羊皮紙を求めてこう書かせた。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ18・20)。それは、確かだが、自分の生涯をかけた計画だった。

一九四五年九月の初め、ジャコモ神父は、パルマのウルスラ修道女会で、新しい会の設立に関心をもつ若い女性たちの靈性修練を、数日間、指導した。同月十三日、チェレスティーナは、最初の女性宣教師志願者たちと一緒に、マリアーノに移った。それは借り受けた小さな莊園で、パルマ近郊にあり、モンティチェッリ・テルメ方面に向かう沿道にあった。その時点では、共同生活に適していると思われた。

この企画を司教に報せる機が熟してきたので、ジャコモ神父は、ザベリオ会総会長の地位にあったティソット神父の同意を得て、コッリ司教に報告書を提出した。報告書には、新しい会創設の特徴的性格が、すでに、明確に浮き出ている。

「マリア布教修道女会 (Societas Missionalis Mariae) が、この呼称を以て意図するところは、終生誓願により結ばれ、宣教的性格のみをもつ修道会 (Congregatio religiosa) である。宣教活動の範囲、および、宣教事業全体の必要とするものが無量であることに鑑み、『すべての手段とすべての力を宣教活動のために』を標語とする……」

マリアの宣教的精神が、養成期において、即ち宣教地派遣を待つ期間、司教様の司牧的配慮に委ねられた教区内において—そこを修練の場として—活動するであろうこの修道会会員の特徴であらねばならない」。

ジャコモ神父は、新しい会の姿の輪郭をこのように描いて、コンフォルティ司教が、自分の宣教師たちに残した靈性を意識して述べている。司教は、非キリスト教徒への福音宣教のみに献身する宣教師を望んでいた。

「外国宣教聖フランシスコ・ザベリオ会は、キリストが、『全世界に行つて、すべての造られたものに福音を宣べたえなさい』と、使徒たちに命じたところに従い、非キリスト者の土地で、福音を説くことを特別の目的に掲げる家族的修道会である。

全活動は、この点に帰結する。……そして、いかに聖く・貴い目的であれ、これ以外のものは、積極的に排除する。

この会の会員は、福音宣教活動に献身する旨誓願した修道者身分の宣教師である」。

同時に、新しい会の特徴として、マリアが精神が深く彫り込まれた。マリアは、ジャコモ神父が、自分の女性宣教師たちの上に掲げる生活の理想となる。「理想的なザベリオ女性会員を考えると、聖母マリアの姿を思い描く」と、神父は、書いている。「マリアの生き方は、神がすべてで、兄弟がすべて、……愛に溢れて、……喜びにあふれて、熱中ので、……憐れみに満ちて、しかも公正で、慎ましくて勇気がある」。

コッリ司教は、認可しただけではなく、会の発足を祝福した。同年十一月四日、ジャコモ神父は、マリアーノのピロンディーニ別荘のチャペルで、かつてコンフォルティン神父が、レオン・ドーロ地区の宣教師養成所時代に宣教師たちのために使った木製の祭壇を用いて、すでにそこに移り住んでいたチェレスティーナと最初の志願者たちとともに、ミサを捧げることができた。

ジャコモ神父が、初めの宣教女たちの育成のためにもちいた気配りは、彼が一九四六年九月五日、ザベリオ宣教会総顧問および学部長に選出された後も、変わることはなかった。新しい任務により、しばしば、パルマを遠く離れることはあったものの、機会さえあれば、サン・ラザロに立ち寄り、「師父コンフォルティン御自身から生まれた」と考えていた若い共同体の成長発展を近くから見守った。

一九四六年九月三十日、すでにマードレと呼ばれていたチェレスティーナ・ボツテゴは最初の姉妹たちと共にマリアーノのピロンディーニ別荘を最終的に引き払い、ボツテゴ荘園に移り、そこが、ザベリオのマリア布教修道女会の本部となった。

なにもかも発明・工夫するしかない祈りと、労働と、学習からなる共同生活の日々は、はつきりとしたリズムに乗って、瞬く間に過ぎ去った。マードレ・チェレスティーナは、共同体内部の活動に絶えず参加しながらも、パルマでの教育活動を続けた。いずこも同じく、設立当初は、食料・経済事情が苦しかった。しかし、「空の鳥を養い、野の草を装う」み摂理の寛大な御手が引つ込むことはなかった。

その間、宣教地からは、度重ねて、最初の要望があった。一九四七年十月二十八日、中国のルーヤンのザベリオ会司教から、自司教区のためにマリア布教修道女会会員派遣を求める旨書簡により要望があった。それにつづく再三の要望にたいして、ジャコモ神父は、一九四八年二月二十三日の日誌にこう書いている。「姉妹たちを宣教地に派遣する件について総会長と相談した。一九五一年には、何人かをバッシン司教のもとに派遣できるよう準備することで合意した」。ところが、神の計画は別であり、宣教の歩みは異なっていた。

七月二日

ザベリオ会家族史の中で七月二日は、いつも特別な意味と響きをもっている。当時の教会典礼歴では、マリアがエリザベトを訪問した記念日にあたる。おそらく、宣教の本性と活力がこの神秘の深い意味の中に示されていることが、コンフォルティ司教とジャコモ神父の創造的直観力を刺激し、宣教活動の展望にインスピレーションを与えたのだ。

ロザリオの珠が、先の神秘的できごとの後に次のできごとを繋いでいきながら、しかも一つの環につながっているように、「七月二日」が、この家族の信仰の神秘的できごとの後に希望のできごとがつづいて一貫した環になっている。一九二一年七月二日、コンフォルティ司教は、自分の宣教師たち宛に精神的遺書を認めた。

「……あなたたちと別れねばならないので、わたしの念願を表明することをゆるしてもらいたい。わたしたちの聖なる会に現在あるいは将来所属する者を他と区別する特徴は、常に、次の要因の成果であらねばならない―あらゆるところに神の国をひろめる願望をわれわれの内部で磨きながら、すべてにおいて神を見させ、神を求めさせ、神を愛させようとする生きた信仰の精神、

また、従う人に神の約束の勝利を与えるため、つねに変わることなく、すべてにおいてあらゆる犠牲をはらう柔順で寛大な精神、また、修道的家族を母のように強く深く愛し、構成員全員に兄弟愛を競って証する精神。このような念願が、あなたたちの父の遺言であると考えねばならない。わたしの念願が、主のお恵みによって実効あるものとなるよう祈りもとめながら、イエスの礼拝されるべき御心にこの願いを委ねる」。

さらに、一九二七年七月二日、コンフォルティ司教は、布教聖省宛、女子ザベリオ会創設計画案を再提起している。

十六年の間において一九四三年の七月二日、ジャコモ神父トウルチ神父は、チェレスティーナに、新しいザベリオの家族創設の協力を求めて、第一回目の提案を行った。さらに、七月二日（一九四四年）、ジャコモ神父とチェレスティーナ・ボッテゴには、片や、強制収容所へ入れられ、片や、強制捜査を受けた経験がある。さらに七月二日（一九五五年）、マリア布教修道女会は、教会法上正式に裁可を得て司教所轄の修道会 (Congregazione religiosa) として設立された。

したがって、ザベリオのマリア布教修道女会の家族が、七月二日を会の特徴的祝日に選び、修道者誓願の日にあてるのは自然である。このようなわけで、一九五〇年七月二日、カプリリヨの「然り」から、わずか六年で、チェレスティーナは、最初の三人の姉妹と

もに、ポツテゴ荘園のチャペルで、修道誓願を立てた。

誓願式は、ザベリ才会総会長ジョヴァンニ・ガツザ神父の司式で執り行われ、チェレスティーナは、深い象徴的行為として、その手において誓願を立てた。その後、マードレとして、他の三人の姉妹たちの誓願を受けた―それは、テレザ・ダニエリ、エリザベト・ベッルッチ、ラヴィニア・モレスキだった。その折り、ガツザ神父から次の言葉があった。

「この聖なる式典のなかでわれわれが目で見、耳で聴き、深く心打たれたのは、母と娘たちが、一緒に修道者として、宣教者としての誓願を立てたことである……。」

いま、尊者コンフォルティ司教の霊がわれわれの間に満ちていることを否定する人はいないであろう。司教は、文書・口頭による教えと遺産として残した生活をもって、天の国にいたる歩むべき道、また、かれが歩いた道を指し示している」。

初めのうち、ジャコモ神父は、神が新しい会の創立のために、自分を特別な道具として用いようとしていることに気づかなかっただけに、この式典に、深い感動をもって出席したことを、日誌が少々頭わしている。

一九五〇年七月二日

イエス、……今日、あなたの憐れみのこの勝利の日を、あなたの優しさと神的配慮を証言し、感謝し、宣言しないで終えることを望みません。わたしの神、今日、わたしに下さったすべてに感謝します。あなたの栄光に役立てたこと、わたしの上長たちの喜びに、そしてわたしの聖なる姉妹たち、わたしがどのように高く評価しても足りないほどの姉妹たちの喜びに役立てたことに感謝します。最初の四人の誓願と、五人の修練者と、十人の志願者のことであなただけに感謝します。

みんな、あなたに属する人間です。あなたのために、あなたがわたしに委ねられました。この件で、あなたの御心に即答する智慧の恵みを、謹んでお願いします……。

わたしの愛しいみなさんに、ひとこと。わたしは、あなたたちを娘と呼びないことにします。あなたたちの父と呼ばれるのを聴くのは、わたしに相応しくないからです。今日ここにいる皆さんに、明日そうなっているであろう皆さんに、おそらく、世の流れの中でそうなっているであろう皆さんに。神のかぎりない憐れみを讃えて、ひとこと。思い出さない―あなたたち皆は、無限の慈悲の愛に、慈悲の母に奉獻されました。わたしは、神の名においてこの宣教の使者たちを、すべての瞬間、絶えることのない歌として、また、

わたしたちと、すべての時代のすべての人々の善と聖化のためにかつて働き、恒に働いている神の慈悲の栄光と賛美の生け贄として世の中に放ちます」。

これらの言葉の震えるような荘重さの中には、父親的な感激・感動を越えた遙かに深いものがある。無償で受け、無償で与える宣教の使者の自覚がある。結局、ただ神の中にのみ起源と理由をもつ歴史と歩みの意味を、ヴェールに包んだまま啓示する神秘体験の息づかいがある。ジャコモ神父は、ザベリオのマリア布教修道女会の靈性的性格として、まさにこの神の全能と慈悲に依託することを指し示しながら生き抜き、この心の奥底の直感^{II}体験に全生涯をとおして忠実だった。一九七二年の回状で、この修道会の靈性を概括して、次のように書いている。

「このような展望に立てば、私たちに必要な能力とは、聖靈の力（1コリント2・4・5参照）、すなわち、神の全能、だということが解ります、それがなければ、だれも神の子を産む協力者ではありえないのです（ヨハネ1・13参照）。ほんとうに、神の子の出生は、宇宙の創造よりも大きな奇跡です。神がその子らを無からではなく、罪から引き出すことを考えてみれば、神の全能は、無限の慈悲に動かされて、受け取る資格がないどころか、正義のゆえに罰されねばならない者たちに、最高の贈り物をしようとして働きます

のにちがいないと解ります。

したがって、宣教者であるとは、キリストによって、キリストと共に、キリストのうちに、神の子たちを産もうとしている神の慈悲の全能の働きに、完全に奉仕する覚悟ができていることを意味します」。

一粒のからし種のように

からし種が土の中で、ゆっくりではあるが徐々に成長するように、マードレ・チェレスティーナの周りに集まったこの小さい宣教師のグループも、年につれて、次第にすこしずつ成長していった。五十才という年にもかかわらず、マードレ・チェレスティーナは、ただちに、自分の考え、感情から抜け出して、つつましく、疲れを知らない人のように皆を元気づけ、新しくはじめた生活に心底適応していった。一粒の麦が多くの実を結ぶためには沈黙の中で死なねばならないことを意識的に受け入れて、自分の平静、優しさ、試練の時にも人を歓待する才能を無傷に保った。

創立まもない頃、困難に遭遇している若い姉妹にこう書いた。

「何年前か、わたしの聴罪司祭にこの宣教会のなかで活動することを受諾する意志を決定したことを述べたとき、聴罪司祭は、ぼろ切れになる準備をするようにと言いました。全くその通りです——ほんとうの修道女とは、あらゆる機会に、どのようにでも使われる道具であること」。

さらに続けて。

「わたしが娘たちを思うことは、わたしがわたしにうち勝つために絶え間なく刺激する拍車なのです。イエスは優しく、わたしたちの浄化のためにすべてをお許しになります。あなたたちもわたしと同じ困難を経験することになると、しばしば思います。ですから、あなたたちが、明日、試練に会う時に必要になるお恵みをいただくために、いまは、わたし自身がそれに立ち向かい、乗り越えることができるように神の助けを求めて祈ります」。

避けようもない初期の困難も、新しい宣教師の家族という彼女にとっての賜物と喜びを深く味わう妨げにはならなかった。

「マリアーノの土地に蒔かれたあの小さな種が、こんなに成長するとだが思ったでしょう！ わたしも、観客のように私たちの家庭の愛の舞台を鑑賞しています」。

観客が、主演者となって、愛し、与え、赦し、理解し、立ち向かった一コマ。マードレ・チェレスティーナは、まだ、よちよち歩いている修道会と一緒に、変わらない信仰と、試

練を耐え抜く愛もって、八方手を尽くして、この家族の存在理由である宣教の情熱を育てながら歩んでいた。かくて、一九五四年、ザベリ才会の宣教師たちのすすめに従って、米国に、最初のメンバーを派遣することを受諾した。

何年か前から、ザベリ才会の神父たちは、マサチューセッツ州のピーターシャムに修練院を開いていた。そこには、何人かのアメリカ人が、スコットランド人、イタリア人の若者たちと一緒にザベリ才会に入会する準備をしていた。神父たちは、はやくから、数名の姉妹たちが、そこに居たらよいと考えていたので、正式に派遣を要請した。しかし、実のところ、狭義の宣教活動ではなかった。何はともあれ、イタリアから一歩外に出ること、そして、望まれて生み落とされた新しい会の理想と精神をひとしくする兄弟たちに、ただ、奉仕するだけのことだった。若い二人の宣教師、ロゼッタ・セツラとラヴィニア・モレスキが、マードレ・チェレスティーナの付き添いで、サン・ラザロを後にする最初の人となるはずだった。ところが、ゼノアのアメリカ領事館で、ラヴィニア・モレスキが、健康を理由に出発を止められたとき、マードレ・チェレスティーナは、ともかく、ロゼッタ・セツラと一緒に出発して、他の姉妹たちが後で合流するまで二人で現地にとどまることに決定した。

ナザレトの精神で

マードレ・チェレスティーナとロゼッタ・セツラは、ゼノアから、一九五四年八月七日、アンドレア・ドーリア号に乗船して旅立った。マードレ・チェレスティーナもジャコモ神父もこの第一歩が、小さいことながら、意味するところは、この若い宣教師たちの家族の将来にとって、重要であることを察知していた。八月九日、出発したばかりの二日後、ジャコモ神父はマードレ・チェレスティーナ宛にこう書いている。

「優しいマードレへ、

私の聖なる親愛の情を手短かに伝えるために。心の中にあまりにも多くのことがあると、かえって何も云えなくなりませう。だから、ゼノアでは、主があなた方を祝福されますようにと言うほかにどうしたらいいか解りませんでした。

やっと、あたまがはつきりしてきました。マードレは、イエスの意志のなかにある大きな業を成し遂げるために行きました。マードレが蒔きに行くその種から、沢山のすばらしい召しだしが芽生えることでしょう、そして、小

さな種が、大きなからしだねの木に育つでしょう。

たしかに、*euntes ibant et flebant miferentes semina sua* かれらは出ていき、種を蒔きながら泣いた！ どの種蒔きも犠牲です、しかし、主と聖母マリアが支えですから、立派に成し遂げられるでしょう。私たちは、マードレを常に想いだし、毎日、マードレがなさることすべてに注目しています……」。

大西洋横断は、比較的に穏やかだった。マードレ・チエレスティーナは、長い年月の末、生まれ故郷に帰る喜びと感動を隠さなかった。

愛情のこもった郷愁をもち続けていたそのアメリカが、大きな広がり、コスモポリタンの人々と、約束と、矛盾をかかえて彼女の前にあった。徐々に、船がニューヨーク港に入るにつれて、海岸線の上にはつきりと市の輪郭、摩天楼と市街の中心が浮かび上がった。船は、すでに、アパラチア山脈とニューヨーク市を横断し、大湖地帯と東海岸をつないで大西洋に流れ込む大河ハドソンの河口を遡っていた。

ニューヨーク港で、マードレ・チエレスティーナとロゼッタ・セツラはザベリオ会のロッコ神父の迎えを受けた。ロッコ神父は、ロゼッタの兄であり、すでに長年アメリカに住んでいた。数週間の後、ボストンの西方約二〇〇キロにあるマサチューセッツ州の村ピーターシャムにあるザベリオ会修練所に落ち着いた。

連邦の小さな州マサチューセッツは、合衆国の北東の極地帯、いわゆるニューイングランドの歴史と経済の中心地である。ここに、ピルグリム・ファーザーズが最初のイギリス系植民地を築いた。州は、大西洋岸から西へ向かって楓に覆われたなだらかな丘陵にいたるまで幅数百キロに亘って波状に拡がっている。秋になると、北のすきとおる青空の下で、森が黄色と赤にだんだんと染まって燃えるようだ。

森に分け入る田舎道を通ってピーターシャムに着いた。丘陵のなだらかなカーブに従って進むと、岩場で、いたずらっ子のように、村は、突然、背後に見えなくなり、草地でまた現れたりした。村の家は、ニューイングランド独特のスタイルで建てられ、屋根には勾配がついていて、小さな欄干がある出窓が、正面の厳めしさをやわらげていた。ザベリオ会の神父たちが使用していた建物は、周辺の家と同じだった。違うのは、ただ、家の前にあるイギリス風の小さい庭園の真ん中に聖フランシスコ・ザベリオの石像があることだけだった。建築は、三階建てで、白く塗られていて森と対照的だった。近くの森の中から宣教師たちが、応急のクランク・レバー・モーターで運んできた大きな岩で造った洞窟に、ルルドの聖母マリアの像が安置されていた。

マードレ・チエレスティーナとロゼッタ・セツラは、修練所から五〇メートルほど離れた小さい家に落ち着いた。家は、昔、馬車や馬を入れ倉庫として使っていた古い建物の再利用だった。石段が路面よりも高く造った階についていた、そして、内部の小さい木製の階段をあがると粗末な空の部屋がいくつかあった。この最初のつましい素朴な生活を思

いだして、ロゼッタ・セツラは、こう云っている。

「わたしは、マードレ・チェレスティーナが、常に、穏やかで、つつましく、信仰にみちっていて、神の意志とみ摂理に頼り切っているのを見ました。いつでも、すべてに對して、すべての人に奉仕の覚悟ができていました。決して迷惑な素振りを見せたことはなく、いつも、アイルランド人に典型的なユーモアをまじえながら、すべての人に助言を求め、受け入れていました。立ち居振る舞いは、素朴で、自然で、しかも、上品で、すべての人に丁重でした。いつも貧しく、なにごとにも執着せず、つねに他の人たちのことに心を配る人でした。その頃、サン・ラザロの家の増築で、姉妹たちが経済的に困っていることも、マードレはよくわかっていました。ですから、少しでも寄付がある、すぐに、サン・ラザロに送金していたのを憶えています。

だれとでも通じ合う能力の賜物を持ち、自分を他の人々のレベルにあわせることを心得ていました。どんな話題にも関心を持ち、だれも怒らせないで、だれでもが納得し、感じよく喜んで受け入れられるようなかたちで、すべての機会に神を伝えるすべを心得ていました。

愛に生きる人、優しい思いやりの心をもって行動し、み摂理に大きな信頼をよせて生きている人でした。そのころ、わたしには、まだ理解できないこ

とがたくさんありました。例えば、わたしたちに必要なもののためには、ただのドルも蓄えようとしませんでした。全部、大急ぎで、サン・ラザロに送金しました。なにか必要な時のために、少しは、とっておきましょうと、何回か申し上げると（あの微笑みで、わたしがまだ持っていないかかった信仰をわたしに注ぎ込みながら）み摂理が、わたしたちに事欠くようにはなさらないから、怖がらないようにと答えが返ってきました……。

何かが必要だと、いつでも、み摂理が届くまでもう少し待ちなさいと云われ、すると、実際に、いつでもそうになりました……。

現実の具体的生活、毎日の労働について何を云いましょう？ わたしたちは、わたしたちの神父たちの修練者の台所で炊事するために、はるばるピーターシヤムまで出かけたことになるのです。そこは、十二名から十五名の共同体でした。わたしたちが到着した翌日には、もう炊事婦がいなくなりまして。早速、マードレとわたしは、炊事洗濯をせねばなりませんでした。ふたりとも、どこから始めたらいいのかさえ、わかりませんでした。……毎日、疲れ切ってしまいました。幾たびか、マードレが疲れて、目に涙を浮かべているのに気づきました。もう一つ、苦しかったことは、わたしが、英語をなかなか憶えられなかったことです。そのため、マードレは、ときどき、皿洗いの手をとめて、わたしを勉強に出しました。

仕事を手伝わってもらうために、婦人たちのグループをつくって、週に一度、アイロンかけに来てもらいました。婦人たちは、快くきてくれましたが、アイロンかけのためではなく、おそらく、マードレをとて尊敬していたので、マードレと時を過ごすために来てくれたのでしょう。マードレは、宣教師たちをとて愛していました（マードレが死ぬ前の日に、宣教師たちについて尋ねたのは偶然ではありません）。そして、しばしば祈り、わたしにも、司祭職の準備をしている青年たちのために、祈りと疲れを捧げるように云いました」。

まさに、その時期に、ピーターシヤムからさほど遠くないところにあるホリストンのザベリオ会研修施設の哲学・神学部には、ザベリオ会司祭フランコ・ソットコロノラが学生として在籍していた。神父は、こう語る。

「ピーターシヤムに住んでいたマードレ・チェレスティーナが、ある日、私たちの家を訪問するためにホリストンに来ました。私は、当時、哲学科の学生でした。そこで、初めて、チェレスティーナ・ボツテゴに会いました。

そのころ、日記をつけていました。その日の夕方、こう書いたことをよく憶えています——『今日、聖女に会った』。この一言が、第一印象を的確に表して

います。三十五年経った今も、考えを変える必要はないと思います。そういう言葉を書かせるほどに私の心を強く打ったものは、なによりも、その顔にあふれた穏やかさと、優しさと、完全に自己を制し、同時に他者には慎ましい注意を向ける感じと、私が、マードレの人格から溢れ出していると感じた内的生活の濃密さと靈的喜びでした。その時は、短時間の訪問でしたから、私たちは、言葉を少し交わしただけです。後日、イタリヤに来てから、サン・ラザロのザベリオのマリア布修道女会の本部にしばしば通うことになり、マードレ・チェレスティーナと頻繁に会う機会ができましたが、いつも、ますます心がこもり、深められていく出会いでした。そして、チェレスティーナをより深く知ることと、私の最初の印象とは矛盾しないばかりか、ただ、ますますその印象は強められ、確かなものになりました」。

「もし、一粒の麦が死ななければ……」

一九五五年七月二日、マードレ・チェレスティーナがまだアメリカにいたころ、パルマのコツリ司教は、布教聖省の許しを得て、マリア布教修道女会を司教所轄修道会として設立した。マードレ・チェレスティーナは、遠くになりながらも、手がけている修道会が教会側の権威により再確認されたことを深く喜んだ。同年十月十八日、アメリカから帰国して、不在中の問題を抱えたサン・ラザロの本部の仕事に携わった。

それから、わずか九ヶ月を隔てたばかりで、若いこの家族を悲しませる衝撃的事件がおきて、マードレの心を深く傷つけた。一九五六年七月二十五日、若い二人の宣教師マリア・グレキとテレザ・デルガウデイオが、アメリカにアンドレア・ドリア号で旅立ったが、その途中で沈没する惨事に巻き込まれて死亡した。苦悩と困惑は大きかった。ただ信仰だけが、悲しみをやわらげ、悲劇の意味の上に光をあてることができた。マードレ・チェレスティーナとジャコモ神父は、信仰と計りがたい神の計画にすべてを委ねて、この深い悲しみの試練のなかでも一致して生き抜いた。そのころ、マードレ・チェレスティーナがマリア・グレキの姉妹ジナにあてた手紙に、彼女の気持ちがあらわれている。

「わたしは、この事件のことをいつまでも想いだして、考えに耽っているわけにはいきません。そうだと、力が抜けてしまうからです。わたしは、慰めをえる別な現実を目を向けるように努力しています―わたしたちの姉妹は、『家』に帰り着いたのだ、と。主が、長年の間、宣教活動に従事した人たちと同じように、この寛大な二人に報いてくださったのだ、と。この二人は、わたしたちの天の国の保護者です。わたしは、二人がわたしを助けている、わたしを霊的に支えている、そして、二人が、主を愛し主に仕えたように、わたしも人々を理解し、主を愛し、仕えることができるようにと助けてくれているのだと考えるようにしています」。

旅しながら宣教する教会

アンドレア・ドリア号の悲劇から二年経った。ザベリオ会の神父たちが、すでに何年も前から活動しているブラジルに新しい宣教の拠点を開くことになった。

すでに宣教地派遣の準備ができていた三人の若い姉妹たち、ジャンナ・リンジャルデイ、エリザ・カスバーニ、アンナ・キレットイが、ラテン・アメリカ方面のマリア布教修道女会最初の共同設立のために選ばれた。マードレ・チェレスティーナは、設立当初の生活をともにするために、彼女たちと一緒に出発することにした。一九五七年五月二十日夜半、ゼノア港からコンテ・ビアンカマーノ号で出帆した。サン・パウロ州のサントスに六月初め頃到着した。

それは、教会と宣教の世界とが、沸き立っていた時期である。数年後に開く公会議の春の前兆でもあった。十九世紀の宣教の再覚醒以来、かすかすの新しい修道会が開花し、宣教活動の組織再編の努力はめざましかった。事実、当時、人々は、ますます先鋭化したかたちで、植民地化政策の後を追って、危険な妥協をした過去の宣教活動の歴史の重圧に気づきはじめていた。

問題については、すでにベネディクト十五世が気づき、回勅『マクシムム・イツルド』

を發して、特に第一次大戦中に示された宣教師たちの民族主義に対して精力的に対抗したし、同じくピオ十一世は、宣教活動をローマ中心の流れにするよう、精力的に動いた。ピオ十一世が、このローマ中心主義と布教聖省の役割を強化する意図は、教会と宣教活動が政治を超越していることを明示することにあつた。ピオ十一世は、現地人聖職者の育成と非ヨーロッパ人候補者の司教叙階を増加する流れに決定的なはずみをつけた。一九二三年から一九三九年にかけての、わずか十五年余のあいだに、インド人司教一名、中国人司教六名、日本人司教一名、アフリカ人司教一名の非ヨーロッパ人司教が、教会内に誕生した。聖座に直属する地方大神学校が開設された。ローマでは、プロバガンダ・フィード大神学校が新しい推進力となった。まだ、ヨーロッパからの発信にすぎなかったが、カトリック教と現地文化、特に芸術との「適応」が話されはじめた。しかし、これらに力強い推進力を与えて、教会の福音宣教と宣教活動の実践に新しい道を開くことには、第二ヴァティカン公会議を待たねばならなかった。ブラジルに新しい支部を開くことによって、若いマリア布教修道女会は、このような宣教の世界全体と宣教活動の流れに身を投じたのだった、そして、手に持つ手段の貧しさを承知して、心静かに、み摂理に信頼をよせていた。この出発は、人数も力も限られていたが、孤立した動きではなかった、むしろ、教会のこととしてすべての会員が一緒に生き、参加したのだった。

ブラジル航路

大西洋を横断中、マードレ・チエレスティーナは、絶え間なく、サン・ラザロと交信した。具体性に富む手紙が、どこにでも善と美を見つける彼女の注意深い心と知性を顕わしているだけではなく、宣教の情熱と洗練された人間性をも顕わしている。

「コンテ・ピアンカマーノ船上から
愛する娘たちに、

……他の旅のときのようにジブラルタルで停泊するのを期待しましたが、船は、モロッコを目指しました。でも、岩肌が多い海岸線の落日に感嘆しました。独特の美しい形の岩の上に築かれたジブラルタル要塞が、遠くに威厳をもつて聳えていました……。

五月二十四日の朝、わたしたちは、太平洋上に居ます。灰色の空の下は鉛色の海です。わたしたちは、あなたたちからの電信を受け取りました、うれしい驚きでした……。

五月二十四日、船の上で申し分ない祝い方をしました。蒔かれた種が、宣

教の実りを約束しています。わたしたちの神父様と出会った最初の日々に戻ったような気がしました。純粹な信仰と熱意の雰囲気の中で、わたしは、「はい」と返事するように導かれたのです。それはやさしい内的な衝動でした。それにわたしは、反抗できませんでした。わたしは、自由だと知っていました。しかし、自由ではありませんでした。

わたしは、祈りを大切にします、なぜかと云いますと、主がわたしにお委ねになり、私の周りに集められる人々への愛と慎ましさを欠いたら、神の御業を壊すことになるからです。最近の毎日、わたしたちが求めて受けるようにと、主が、くりかえし、祈りにお招きになります。そして、イエスが、主の御名によって祈ることを御父が聞き届けて下さると保証なさいます。ですから、わたしは、わたしたちを導いてくださるパードレ・スパニョーロと、わたしの愛するあなたたちのため、また、わたしのために慎しみと愛だけを祈り求めます」。

最初に寄港したのはセネガルのダカルだった、マードレ・チエレスティーナは、快く、この機会を利用して三人の若い宣教女たちと街を見物した。

二十七日、わたしたちは、アフリカのダカルの土を踏みました。カーボ・

ヴェルデの端にある大きな港です。フランス領赤道地帯アフリカの中心地で、セネガルの最重要地です。ここには、最新建築、摩天楼、雄大な宮殿と庭園を含む豊かなヨーロッパ都会と原住民の原始的集落、独特の衣装をつけた黒人の群衆とが間近に見られます……

白と茶色の縞模様のカウンを着た年老いた黒人が、近づいてきて、タクシーで街を案内すると云い、フランス語が少しできるので、船が出る十時半まで、船外で見物することに話をまとめました。

街は、港からほぼ三キロ離れています。綺麗な現代建築の司教座聖堂と小教区教会を見ました。どちらでも、一人の神父が子どもたちに教えていました。多分、初聖体の準備でしょう。白人と黒人のシスターたちにも会いました。皆、学校で働いています。

運転手は、私たちの意のままに、どこにでも車を止めるので、わたしたちは、診療所の前で車を止めて、子どもたちにワクチンを接種するため、長い行列をつくっているアフリカ人の母親たちを見ました。一般的に云って、この女性たちは美しく、振る舞いには威厳があります、おそらく、頭の上に物を載せて運ぶ習慣があるからでしょう。強い色彩の服を着て、頭には、いろいろなかわい形形のターバンを巻いています。

小さな子どもたちの世話も行き届いています。女性たちは……みな、首飾

り、指輪、腕輪など宝石を身につけています。しばしば、レース編みとベールのマントを羽織っていて、踊りの衣装のような感じでした。

原住民の集落は、想像を絶するほどの悲惨な生活をさらけ出しています。木でつくった小屋が、何千も集まっていて、寝るための小さいマットレスが地面にあるだけです……原住民のマーケットも見ました。買い物をするほとんどの女性たちが、小さな物を入れるのにつかうために、カボチャを半分に分けて干した器もっています。帰り道で、運転手が小さなバラックを指さしながら、五く六才のこども三十人ぐらいを教育している学校だ、と云いました。

旅を通して、マードレ・チエレスティーナが心の暖かさとかだわらない人柄のよさを示した例は数限りない。客船専属の司祭に、当たり前のこととして、用事があれば何ごとでも仰せつけて下さいと申し出た。ビアンカマーノ号は、南米に幸せを求めて渡航する移民の輸送船だった。貧しい低開発地域の出身者の船客が多かった。彼らへの宗教教育は、しばしば不十分で、欠陥があった。彼女の手紙は、つづく。

「近頃、少しばかり、よいことをする機会にめぐまれました。この船専属のチャプレンが、熱心にこの浮動小教区の人々の魂の世話をしている、沢山の

若者たちが、まだ初聖体も堅信も受けていないことを発見しました。神父様は、この若者たちがブラジルとかアルゼンチンのファゼンダス（大農園）で働きはじめると、宗教教育は困難になり、靈魂の命である秘跡を受けられなくなる危険にさらされることをよく知っています。それで、わたしたちの二人の姉妹が、若者たちの教育のために選ばれました。二人は、一日二回、この生徒たちとサロンで同席します。

二一五〇名の乗客のうち、エジプトやイスラエル出身のユダヤ教徒、イスラム教徒が沢山います、しかし、多数からなるカトリック教徒は、宗教実践の上では、かれらと区別できません。小さいチャペルには、いつも沢山の空席があります。昨日もわたしたちは、一等船客用のチャペルでカトリック・アクションの女子青年とシスターたちと一緒にミサで歌いました。船長と上級船員が出席していましたが、乗客は少数でした。多分、同じ時刻に赤道通過の祝いをしていたからでしょう。深く心の痛みを感じます。この船には、これほど目に見えて一瞬一瞬をみ摂理に委ねているのに、祈り感謝する人はこれほど少ししかいないのです！」。

その気さくな態度、穏やかさ、独特の笑顔が、いち早く、好意と友情を集めた。夕方には、船のデッキで、彼女の周りに乗客が集まり、アコーデオンを弾いたり、ユーモアたっ

ぶりのしやれが飛んだりした。

「……夕食後、デッキに座っていると、沢山の人たちと知り合いになれました。客室係のボーイさんの中には、ピエトラルチーナのピオ神父の熱烈な追隨者とか、私たちを守ってくれるトツレ・デル・グレコ出身の機関士がいます。かれらは、ミネラル・ウオーターをつくるための粉末とか、ハガキとかを持ってきてくれます」。

大西洋横断に入ると、マードレ・チエレスティーナは、サン・ラザロに残した姉妹たち宛に、印象、感想、希望を正確に書き続けた。

「……空と海だけを見ながら幾日か走っています。毎日、一時間、時計を遅らせています。明日は、ブラジル最初の港レシフェに着きます。赤道通過の日、人々は、ご馳走とシャンペン、そしていろいろな形をした伝統的な紙製の帽子を被ってお祭り騒ぎをしました。そこにネプトウヌスが水の精たちと一緒に現れて、赤道を初めて通過する人たちをつかまえて、プールに沈めて『洗礼』を授けました。わたしたちは、修道女たちのデッキに逃げて難を避けました……」。

昨晩は時化しました。船酔いが戻ってきてちよつと苦しんでいます。……今日、わたしたちは、ペルナンブコ州の首都レシフェで、ブラジルに上陸します。ブラジルのヴェニスと呼ばれています。もう少しで、下船して街を見物し、その後、あなたたちに何かを報せます。ここは、わたしたちの新しい祖国ですから、わたしたちは、今まで助けて下さった神に感謝しなければなりません。もつと沢山、もつと上手に書けたらいいのと思います、でも、あなたたちが、このかいつまんだ報告に熱と命を与えるでしょうから、それでおーケーにしましょうね」。

開設の苦勞

レシフェから船は、リオ・デ・ジャネイロへ向かった。最終投錨港サントスのひとつ手前の港である。リオ港には、数ヶ月前にブラジルに着いたばかりのザベリオ会ジョヴァンニ・ガッツ神父とブラザー・マッセローニが、この小さなグループを迎えに出ていた。面会は、心がこもっていて家族的で、みんなが、喜びと安らぎを覚えた。ピアンカマーノは、ふたたび出港して、六月四日サントス港に投錨した。下船のまえの通関手続きには、数時間かかった。サントスは、サンパウロから六〇キロしか離れていないブラジル最大の港であり、ヨーロッパから来る数多くの客船が、すべてここに着岸することを義務づけられていた。また、主にコーヒーなどを運ぶ貨物船は、ここから世界に向けて出航した。

上陸したマードレ・チエレスティーナと三人の姉妹たちは、ロンドリーナの司教モンシニョール・ジェラルド・フェルナンデスとザベリオ会のメデイチ神父とブラザー・アツダの出迎えを受けた。フェルナンデス司教のおかげで、司教の管轄区内にあるサンパウロの被昇天聖母修道会のシスターたちのところに行った。

サンパウロは、本質的に国際都市である。現在も、この国の人口第一の都市であり、この国の美と貧困、栄光と矛盾が、ここにはある。一五五四年に渡ってきたイエズス会の神

父たちが、リオ・ティエテの兩岸に建設した都市である。高地を支配する堅固な城壁のように見える八〇〇メートルの高さから下がり、末端は小高い堤となって海に連なる。周辺部に沿って、非人間的な過酷な条件の下で過去に生き、現在も生きていく幾千万の人々が住むスラム街（ファヴェラス）の環が、悲しく取り囲んでいる。支配者たちの大土地所有によって、耕作可能ではあるが痩せた土地を追われた多くの農民たちが、地方から街に流れ込み、職を探し、略奪された尊厳を回復しようとして、かえって酷い悲惨と欠乏状態に落ちこんだのだ。

数ヶ月して、被昇天のシスターたちの仮住まいでは、ことばの勉強に適しないことがわかった。司教と相談の上、マードレ・チェレスティーナと三人は、聖心宣教会のシスターたちの学校に移った。マードレ・チェレスティーナは、言葉は、宣教活動と人々との接触に欠かせない基本手段だと考えていたので、語学の修得を大切にしていた。だから、自分の宣教師たちがこの重要な道具を身につけるまでは、どのような犠牲も厭わなかったし、また、自分もポルトガル語の初歩を修得するために、彼女たちと、初歩クラスで同じ椅子に坐るのを恥じなかった。その一方では、実状と各小教区の必要を知るために種々の接触を求め、また、視察旅行もした。

ブラジルは、基本的にはキリスト教国であるから、洗礼を受けている者の数は極めて多かった。しかし、司祭と修道者の欠員状態が何十年にもわたってつづいたので、宗教的無知に加えて、迷信がキリスト教的基層の上に徐々に形成されていた。ブラジルは、人種と文化の混在するつぼである。その中では、インディオとアフリカとヨーロッパの性格が同一家族の中に混在する、新しい人類が芽生えようとしていた。宣教の勤めは険しいが刺激的だった。現に、最近の歴史は、ブラジルの教会の基盤的共同体の活力と司牧方針選択の勇氣などを証明している。

マードレ・チェレスティーナは、調査しながら、すでに長年にわたって、ザベリオ会の神父が活動していたパラナ州に行った。砂埃と不便な道を経て、内陸地のロンドリーナとアピカラナの宣教地を訪れた。そして、そこに、宣教活動の場がたっぷりあり、新しい共同体に適した仕事が見つかると考えた。

しかし、到着後、予期せぬ困難な事態が発生して、小さなマリア布教修道女会の共同体がこの地帯の宣教と司牧活動に参加することは困難になった。事情がいろいろあって、結局、フェルナンデス司教の提案により、ザベリオ会の神父たちではなく、アステイのヨゼフ会の神父たちと協力して活動することになった。この事件は、マードレ・チェレスティーナにとっては、深い苦悩のもととなったのに、彼女が落ち着きと平和を保った秘密は、どのような出来事の中にも神の慈愛にみちた手を見ることになれていた深い信仰だった。語学の勉強を終えて、一九五七年十一月十二日、姉妹たちは、パラナ州アピカラナに定住した。ここが、マリア布教修道女会のブラジル最初の支部になった。

やむを得ぬ出発

船の長旅、内陸の旅、心配事、若くはない年齢などの原因が重なって、はや、マードレ・チエレスティーナは、健康の問題を抱えはじめた。八月頃には、循環器系の故障を訴えはじめた。それを数ヶ月間繰り返すので、イタリアに帰国して適当な治療を受けるよう指示された。その頃の彼女の最大の苦悩は、住まいと仕事が決まらずのまま、若い三人の姉妹をサンパウロに残して、立ち去ることだった。仕事に関しては、フェルナンデス司教に協力すること、ある程度の展望が開けていたにしても、この出発繰り返しは、新しい試練の追い打ちであり、苦しみをやわらげるのは信仰だけだった。だから、自分でも、姉妹たちにも、アヴィラの聖テレジアの詞を繰り返した。「なにことに乱されず、なにことに驚かない。なにことにせよ過ぎ去り、神のみがとどまる」。心の中で、自分も姉妹もこの言葉を確認して、その年十月二十日、サンパウロを発った。飛行機が、最初に着陸したレシフェから、別れたばかりの姉妹たちに短い文を送った。

「愛する娘たち、

ブラジルを離れる前の最後の挨拶。わたしは、太陽が海から昇るのを見ま

した。そして、わたしは、南十字星に挨拶しました。明日の晩、北極星を見るでしょう。神に感謝。すべて良好です。主は、ご自分の愛をいろいろ表現して、わたしたちを助け、ささえて下さいます。あなたたちも、きっとその賜物を感じ感謝するときにくるでしょう。

明日は、ローマから書きます。あなたたちを抱擁し、イエスとマリアに委ねます。

あなたたちのマードレ」

すべての姉妹たちにかわって、ローマ空港に、ジャコモ神父が出迎えた。時間ができると、マードレ・チエレスティーナはブラジルの姉妹たちにまた書いた。

「愛する娘たち、

昨日から、すこしだけ起き始めました、でも、まだとてもだるく、とくに頭痛がします。これは、アジア風邪の特徴だとのこと。ここに到着して、心配しないで休めるところで風邪をひいたことを主に感謝しています……。

こちらは、美しい季節です。気候の変化はほとんど感じません。愛する皆さんの家族として一緒に生活していたときの感じがします。あなたたちを近くに感じています、そして、わたしがポルトガル語を話しても、だれもなぜ

だか尋ねないのが不思議です。出発の時にくれたあなたたちの手紙を、くりかえして、何回も読みました。わたしたちは、いつも一緒です。わたしたちの愛情は、祈りの中で深く表現されます」。

状況が、無理やり引き離したにしても、彼女は、祈りと、想い出と、愛情と、頻繁な通信によって、彼女の宣教師たちひとりひとりのそばにいた。パルマに帰って間もなく、こう書いている。

「発送しかけている手紙に、なにか言葉を書かないではおられません。……あなたの手紙にあった毎日の生活時間割は、とても気に入りました。そして、ほとんど憶えました。あなたたちの烈しい働きをよくわかりながら、あなたたちについていけるように」。

一九五八年初頭、ブラジルに向けて、他の姉妹たちが出発し、さらに他の姉妹たちがつづいて出発し、クリティブ、ロンドリーナ、サンパウロに新しい共同体をつくった。マー Dre・チェレスティーナは、母親のような心遣いで、全員とひとりひとりを見守った。

「姉妹たちが出発したばかりです。あり得ないことのようにですが、出発する

度に、わたしは、別離の悲しみを強く感じます、そして、すべての人々の救いのために、わたしの娘たちをいけにえとして主に捧げます」。

世のための家族

ゆつくりとではあるが、着実にマリア布教修道女会の小さなグループは増え続けた。そして、古いポツゴ荘園は、改修改装に工夫を凝らしたが間に合わなくなった。そでを増築し、さらに、別なそでを増築した。遠くから見ると、かつて、畑とポプラ並木の緑の奥に孤高の佇まいを見せたポツゴ荘園ではなく、旧荘園の構造はのこしたままで、三階建ての長く伸びた大きな形の建物になった。澁刺とした労働と犠牲の年月だった。熱情と大いなる希望に燃えた若い姉妹たちが宣教生活に備えて学習と、祈りと、労働に生きていた。宣教地からは、しきりに仕事の提供と協力要請があった。最初の、その意味で特権的な働き場だった中国を一九四九年に追放されて以来、ザベリオ会が活動している日本からは、最初の二人の日本人の召しだしがあり、それに伴い、この日出ずる国にもマリア布教修道女会の姉妹を派遣するよう要請があった。一九五七年十月、セシリア横田とジェンマ田村の二名が、イタリアに着き、パルマの修練院で四年間の養成が始まった。一九五九年八月三十日、三名のイタリア人姉妹、ワンダ・デ・ローザ、マダレーナ・ストックコ、カテリーナ・ロイが日本へ出発した。

最後の世界大戦後、十五年を経て、なによりも原爆の経験のあと、日本は、驚異的だが

苦悩にも満ちた物質的・精神的過程を生きていた。三人の若い姉妹は、大阪に比較的近い、和歌山県の小さな要所になっている橋本に落ち着くことになった。橋本は、真言宗の文化的中心地である高野山の麓にあり、仏教的伝統が強固に根付いていることを誇る街であるから、浸透することは容易ではなかった。長年のあいだ、マリア布教修道女会のこの小さな共同体は、幼稚園を開いて幼児の世話をし、また、コロンバン会の一人の神父が司牧している小さなキリスト教共同体の世話をした。

マードレ・チエレスティーナは、この支部開設が宣教的に重要な意味をもつと考えて、自分も姉妹たちと一緒に出発しようとしたが、長い困難な旅なので思いとどまらせられた。やむなく、ゼノアまで付き添い、ジャコモ神父と一緒に、ナポリまで乗船して見送ったのだ。

日本に行けなかったことから、マードレ・チエレスティーナにとって、この地の宣教は特別に大切なものになった。絶え間ない祈りと、生き生きとした関心をもって成長の年月を見守った。

一九六〇年十二月、日本支部設立から一年と少々で、他の姉妹たちは、アフリカの旧ベルギー領コンゴ、現在のザイル、に出发する準備が整った。マードレ・チエレスティナは、彼女たちと一緒に、十二月十日、ローマのチャンピーノ空港を發つて、ウスムブラ、現在のブジウムブラを目指した。同行した姉妹は、トマジーナ・カサリ、リリアーナ・ファンテーニ、ロゼッタ・マンチーニ、カミツラ・タリアブエである。

途中、中継地カイロに一昼夜滞在し、十二月十二日、ウスムブラに着くと、当時コンゴのザベリオ会の長上、ダニロ・カタルシ神父と他の神父たちの出迎えを受け、ブルンディ国境を越えて、キヴのザイル地方のウヴィラに伴われた。しばらくして、ウヴィラから「象の平原」と呼ばれている小さい宣教基地であるキリバに移った。タンガニカ湖畔からさほど遠くない広大な草原である。そこで、医療活動と社会事業活動に携わることになった。

キリバから、マードレ・チエレスティナはサン・ラザロにアフリカ発書簡を送った。

「ついに、キリバの私たちの家に着きました。小さいけど、必需品は全部あ

ります。イエス様がいつもいらっしやる小さいお聖堂、姉妹には小さな個室、小さい食堂、台所。家の周りを囲む高いユーカリの木が、少し影を落としています。この家は、砂地が多い広い荒地の中のアシスのようです。遙か地平線のかなたに、高い山脈が見えます。

雨期です。雨期とは、いつも降り続けているというのではなく、ほとんど毎日のように二時間ぐらい、土砂降りになるといことです……。

いつもとは、とても違ったクリスマスを祝いました。わたしたちの前夜祭とか、真夜中のミサを思わせるようなものは、何もありません……。

すでに書いた通り、とても小さな教会のことです。ペトレヘムの小屋のような感じで、壁は竹の茎でできていて、床も扉もありません。地面に直に跪くのです。ミサの間、人々は、祈り、よく歌います……。クリスマスの朝、教会は、子どもと、男たちと、背中に赤ちゃんを背負った女たちとでいっぱいでした……。この最近開いたばかりの労働者聖ヨゼフの教会では、七百人が聖体拝領しました。

クリスマス午後、カタルツイ神父様がいらっしやいました。そして、わたしたちが、ここ落ち着いているのを見て、ご満足だとのことでした。クリスマスのは、ヴィオットイ、デイドネー、イツバ神父様たちが一緒だったことを書くのを忘れていました。その昼食は、ザベリオ会的で宣教的な

クリスマスでした。なぜなら、わずかな食べ物で終わったからです」。

小さな共同体は、独自の生業と各種の活動とを、徐々に、有機的に組織しつつあった。マードレ・チエレスティーナが、なによりも洗練された感性をもって、白人と黒人を差別しないで応接するので、人々との関係は、日増しに穏やかな家族のようになった。そのころキリバの宣教に携わっていたザベリオ会のジュゼッペ・ヴィオッティ神父は、次のように記憶している。

「マードレ・チエレスティーナが、私たちが働いていたコンゴのキリバに最初の姉妹たちを連れて来たときは、私も近くにいました。マードレ・チエレスティーナは、宣教所のミサに、毎日、姉妹たちと一緒に参加していました。……わたしたち神父が、姉妹たちの小さな家を訪問すると、マードレが、必ず毎回「少なくとも、冷たい水一杯」とか云って―何かもてなしを受けないかぎり離してくれなかったというエピソードを省くわけにはいきません。また想い出すのは、よく篤ではいたりしながら、家の中の仕事をしていたことです。そのようなとき、誰であれ入っていき、何かを求めると、少しもためらわないで与えていました―姉妹たちが、その後始末を心配しているのは、はっきりしていたのに」。

内乱の中で

内乱の中で

表面的な平穏状態は、束の間だった。アフリカでは、植民地主義後の苦悩の年が続いていた。多くの国が、独立を目指して辛苦の道を進んでいたのだ。コンゴでは、特に、本質的には天然資源の略奪の上に築かれた植民地支配のもとで貧困化したまま、後進性が、数十年間にわたり放置されていたから、再生への情熱は烈しかった。アフリカにおけるヨーロッパ勢力下の領域分割について、一八八四―一八八五年に開催されたベルリン国際会議は、ベルギー国王個人を名義人とする王権の下に委託統治するものとしてコンゴ独立国の建国を承認した。一九〇八年、この国は、ベルギー国の植民地となり、ベルギー・コンゴと称したが、植民地支配形態に変わりはなかった。第二次世界大戦の終わりに、首都レオポルドヴィル、現在のキンシャサでヨーロッパ文化の影響をうけた原住民たちの間に民族主義運動が起こり、最後には独立を勝ち取った。一九六〇年六月三十日、コンゴ民族運動指導者パトリス・ルムンバが率いる政府がコンゴ共和国の独立を宣言した。不幸にして、国家形成と指導階層形成の過程で、カタンガ、現シャバが離脱して内乱が発生した。その底辺に、ベルギー鉱物資源開発会社の利権が絡み、最終的には、離脱派を支援するベルギーが介入して、決定的に状況を悪化させた部族間紛争があった。一九六一年一月十七日、ル

ムンバが暗殺され、この国は混乱のるつぼと化し、国連軍の介入が一九六四年まで続いたにもかかわらず、解決しなかった。そのような日々の、そのような事件について、ヴィオッティ神父は語り続ける。

「独立にともなう動乱のときにあつたもつとも感動的な思い出です。状況が非常に悪化したので、ベルギー系のサトウキビ産業のスクラフという会社の社長が、会社の技術者として働いていたヨーロッパ系の人たちのほとんど全員を、護衛付き輸送団を組んで救出しようと決意し、それをデイドネー神父に連絡すると、神父は、こう答えました。『姉妹の救出には同意しますが、われわれ神父は残ります』。デイドネー神父が私に、ことの次第を連絡してきたとき、私は、マードレ・ポツテゴにも、当然、同じ連絡をすべきだと考えました。シスターの進退に関する決定は、マードレの権限にのみ属すると判断したからです。強調したいのは、マードレの最初の反応です。シスターたちは、ほかの婦人たちとは異なる動機があつてそこにいるのだと云い、さらに、その日の夕刻に出發しようとしている護衛付き輸送団には、シスターたちが合流しなくても心配しないようにと、自分から知らせたいので、社長のところに案内してもらいたいということでした。

翌日のミサに、シスターたちは、もう出席していませんでした。ミサが済むやいなや、彼女たちの家に駆けつけると、食卓に準備した朝食が手着けないまま残されていて、鉛筆の走り書きがありました。『コンゴで死にたいとどれほど思ったことでしょう（すでに、わたしの役目の代わりを引き受ける準備ができています姉妹が、たくさん居ます）、でも、医者（トリノ出身のドクター・プリエーゼ、病院の経営責任者）が来て、国境が閉鎖されるので、大至急ついてくるようにとせき立てられて……ご聖櫃の鍵は、探せるでしょうね……』。

一九六一年一月十五日コンゴに到着してから、わずか一ヶ月あまりで、マードレ・チェレスティーナと四人の姉妹たちは、始めたばかりの宣教活動を放棄させられた。国境を越えると、ウスムブラのアフリカ宣教姉妹会の施設に身を寄せて、少しでも早くコンゴに再入国できるよう希望しながら待つことにした。しかしながら、状況は、急速に大詰めをむかえた。国境は、決定的に閉鎖され、早期再入国は不可能になった。

どれほど悲しみに満ち、危機的な新しい事態が発生しても、マードレ・チェレスティーナはひるまなかつた。幾度か、中央アフリカの中心部にある、ルワンダ、タンザニア、タンガニカ湖、ザイルに囲まれた山が多い小さな国、奥ブルンディなどを旅行した。

二月二十五日、マードレ・チェレスティーナは、ロゼッタ・マンチーニと一緒にウスムブラを發ち、ルワンダの宣教地キブンダに向かった。二人にはアフリカ宣教会から、地理

や宣教地の状況に詳しい宣教師が一人付き添い、力強い助けになった。期待する収穫もなく、二月二十八日、長い旅行からウスムブラに帰ると、三月二日、再びブルンデイの二つの小さい村ルモンゲとブルリに向かった。

サバンナと森の境界にある山村ブルリに、アフリカ宣教会が開設したばかりの宣教基地があり、住民の司牧的・社会的必要に対処するため物的・人的支援が至急必要であるのを見出した。マードレ・チェレスティーナは、ためらうことなく、この新しい宣教地の人々の教育と成長に協力することを引き受けて、そこにブルンデイにおけるマリア布教修道女会の最初の共同体をつくった。

マードレは、四人の姉妹たちが働きの場を見つけ、宣教活動に入るのを見届けると、ようやくイタリア帰国を承知した。一九六一年四月六日、四ヶ月間の強烈な喜びと、希望と、苦しみと、心配の日々の後、ローマ・フィウミチーノ空港に帰り着いた。

コンゴ——宣教の試練

一九六二年の一月三月頃、コンゴの状況が通常に復帰したと思われた頃、数人の姉妹たちが、この旧ベルギー植民地に向けて出発し、さらに、他の姉妹たちがそれにつづいて、一九六三年、現地に着いた。キリバとウヴィイラの宣教基地は、再開された。その間に、一九六二年七月十五日、ウヴィイラは、ザベリオ会の最初の司教として指名・叙階されたダニロ・カタルツイ神父に、新設司教区として委託され、司教区事務所所在地になっていた。宣教活動は、特に、医療・司牧分野で多忙だった。若い姉妹たちは、刻々、最緊急の事態に即応しながら活動に没頭した。ふたたび外部で事件が発生して、宣教活動の素朴で多忙な生活の上に重くのしかかり、混乱に陥れるまでは、すべてがよい方向へ向かっているかのように見えた。

一九六三年の末頃、ニカ所の反乱が震源地となった。ひとつは、この国の西にあたるクウィルで、指導者はピエール・ムレレ、もう一つは、キサンガニ地帯で、指導者はスミアロット。後には、この二つの反乱は、ゲリラ戦術の面でも、名称の面でも一本化して、ムレリズムと云われるようになる。一九六四年初頭、この部族的反乱組織は、特に、ザベリオ会宣教基地があるキヴ地域を含む東部地帯に対する関心を油の染みのようにに拡げていっ

た。四月になると、ほぼキヴ全域がムレリストに制圧され、ウヴィラは、それ以後数ヶ月にわたって死と抑圧の舞台になった。宣教師たちは、現地にいる他のヨーロッパ系の人たちとともに、混乱とゲリラ戦のただ中にいた。不安の数ヶ月の後、五月十六日、ウヴィラでは、カタルツイ司教、宣教師、女性宣教師たちが抑留された。八月二十六日、その時までは傷病者の介護にあたっていた、ウヴィラの共同体の姉妹たち―フェリクタ・タッティ、カミツラ・タリアブエ、マウラ・ロカテツリーも、他の宣教師やベルギーのシスターたち数名と一緒に人質にされた。

イタリアでは、ほかの国や教会と同じように、だれもが、抑留された宣教師たちの身の安全を憂慮するだけではなく、コンゴの状況全般について、この国が、どの内乱の場合にも見られるような混乱と極端な行為に走ることを案じていた。その時期、力を蓄えていった組織は軍隊だけだった。総司令官モブツが、クーデターを起こしてカサヴブ大統領を下ろし、一九六五年、権力を掌握し、長期におよぶ抑圧的独裁政権の座についた。

ザベリオ会の修道院では、皆の命運を気遣い、希望し、祈った。マードレ・チェレスティナは、この特別に困難な時を、期待と幻滅の中で、しかし、慎ましく平静な信仰をもって強烈に生きた。そのころ、ブラジルの一人の姉妹に書いた手紙のなかでこう述べている。

「コンゴにいる私の娘たちの状況で苦しんでいることを、あなたに隠しません。ときどき、力が抜けてしまいます。でも、解放されるよう大きな希望を

もっています。確かに、彼女たちの信仰と勇氣ある試練によって主は崇められ、また、教会は、彼女たちをふさわしい娘、真の宣教師として見ているのです」。

十月七日、状況が変わった。ボランティアとベルギー落下傘部隊が介入して捕虜救出に成功した。全員、ブカヴに移送され、ルワンダを通ってヨーロッパに発った。しかし、十一月二十八日、ムレリ派に占拠された地域と境界を接するバラカとフィジに残った三名のザベリオ会神父とアフリカ人司祭一名が、憎悪と暴力の無意味な嵐のなかで殺された。設立されたばかりのウヴィラ司教区は、こうして重い試練に会い、早々と殉教者を出した。

この大変な試練と苦悩の時期をあたかも冠で飾るかのようには、この年の十一月十二日、布教聖省から、マリア布教修道女会に教皇直轄の修道会としての認可（デクレートウム・ラウデイス）が下りた。

教会の中の春

ヨハネ二十三世が、一九五八年十月二十八日、教皇に選出されると、普遍的教会は、刷新と世界に門戸を開放する驚異の季節を体験した。一九五九年一月二十五日、ヨハネ二十三世が、三つの意図、すなわち、ローマ司教区会議を招集する、教会法を改訂する、公会議を招集すると発表したとき、広く世間を驚かせた。公会議の内容の詳細について考えが具体化する前に、ヨハネ二十三世は、幅広く二つの目標を提示した―教会そして深奥で世界を変える使徒職のアッジョルナメント(今日化)、それと、キリスト者の一致への回帰。公会議の成果は、初めの予想をはるかに上回って、教会内部の再生の活力の、また、教会生活のあらゆる領域にわたる変更の導火線となった。

数年間の精力的な準備の末、一九六二年十月十一日ヨハネ二十三世は第二ヴァティカン公会議を荘厳に開会し、一九六五年十二月八日、後継者・疲れを知らぬ対話の人・反公会議の動きにたいする並びなき仲裁者パウロ六世によって閉会した。

ヨハネ二十三世が開いた窓からは、新鮮な空気の風が流れ込んで、教皇が望んだ通り、いわば古い家に積もった埃を、教会から、はたき落とした。

教会憲章「ルーメン・ジエンツイウム(諸民族の光)」や現代世界憲章「ガウデイウム・

エト・スペース(喜びと希望)」のような公会議大憲章が、エキュメニズム(キリスト教会の一致)、キリスト教以外の諸宗教、信教の自由に関する貴重な教令と共に、教会と教会の外の世界、または、キリスト教以外の世界との関係を、内奥に触れながら根本的に変えた。また、教会の内的生活を省みている二つの憲章、つまり、神の啓示に関する憲章「デイ・ヴェルブム(神のことは)」と典礼憲章「サクロ・サンクトウム・コンチリウム(聖なる公会議)」、修道生活に関する教令、司祭の養成に関する教令、信徒使徒職および召しだしに關する教令が、キリスト教共同体を深く変えた。

公会議に始まった刷新の流れはすべてに關係し、教団、修道会、宣教会には、それぞれ会則の再検討を迫り、また新しい創造的なたちで、原初のカリスマから着想を得るよう求めた。

若きマリア布教修道女会が自分たちの第一回總會を開催したのは、このような新しい教会の精神的風土の中であり、公会議の興奮と、進行中の改革に対する情熱と、新しい神学的展望と、聖書を広く再発見して、再び自分のものにしようとする動きの最中だった。

マードレ・チエレスティーナは熱心に公会議の推移を追い、その精神と指針を把握しながら生きた。カロンティ大修道院長のもとで成熟した彼女の深い典礼的感性が、進行中の大改革に喜び踊り、教会の新しい動きの中で彼女の生まれつきのエキュメニズム(教会一致)の思想が確認でき、一九六六年のカンタベリー大主教と、一九六七年のアテナゴラ総主教との会見というパウロ六世の預言者的言動に慰められた。

彼女は、ザベリオ会神学校の神父たちが、サン・ラザロの本部で姉妹たちの教育のために行った講義にしばしば出席して、神学の新しい展望と公会議のいわゆる「刷新」の長い行程に、変わることなく若者のような興味をもってつき従った。この巨大な動きが教会と世界にもたらす実を、ひたすら楽しみにして待っていた。だが、彼女にとって、この「刷新」の歩みは、もう一つ別の人間的・靈的頂点に達すべきものだった。それは、その時の眺望の中で、真の偉大さを表わしたできごとは、マリア布教修道女会総会長職の辞任である。

る。

一九六六年二月一日付け回章で、マードレ・チエレスティーナは、總會招集を通知した。その文中で、とりわけ、次のように述べている。

「どの姉妹も、それぞれの役割を引き受けて、この大仕事に参加せねばなりません。自分の内的生活にいつそう拍車をかけながら、特に靈的役割を果たすべきです。

そのために、毎日の生活が提供している大小の機会に応じて、あなたたちの信仰と、希望と、愛を実践することによって、特別に、再活性化するように勧めます。

わたしたちが行うことは、わたしたちのすべての行為を神聖なものに変える信仰の靈で動かされるとき、神の目の前に偉大なものになるのです。それは、純粹であるために、試練のためされた信仰です。信じるものすべての父、創世記のアブラハムの信仰を黙想し、神がアブラハムを召し出す前にアブラハムに与えた試練を思い出してください。

……希望はわたしたちに、神への大きな信頼をあたえ、近くにいる兄弟姉妹たちへのさらなる信頼を与えるものです。わたしたちの思い、行い、感情は、私たちが関わりを持つすべての人に、私たちがキリストの弟子であるこ

とを認めさせるほどの深い慈愛に貫かれ、暖められたものであらねばなりません。

……信仰、希望、愛の生活が、よりよい総会準備なのだと思ひなさい。それによつて、わたしたちの会が、現時点で必要としている恩恵を神から戴くことになるでしょう。

マリア様が、信じ、希望し、愛することを教えてくださるようお願いしましょう。洗礼によつて受けた恩恵が成長し、また、主がわたしたちに委任された宣教活動のために、聖母のように、主の御手の内のすなおな道具になれますように。

総会は九月二十一日に始まり、十一月八日まで続いた。創立当初から展開した活動を再点検し、新しい情熱的使徒職活動への刺激の見地から、公会議の新しい方針に照らして、この会の宣教活動の実践と生活の種々の側面が検討された。

新しい母の資格

総会議中、マードレ・チエレスティーナは、総会長職辞任の意思を、書簡を添えて表明した。この一九六六年九月二十四日付け書簡には、母性的心情の全面的な発露としての繊細さと、長期間に亘り「無益なしもべ」として生き、奉仕したという福音的認識が表れている。

「わたしのいとも愛する娘たち、

この第一回会議をもつて、一緒に生きて二十年の働きを閉じます。あなたたち一人一人に対して、この会のため、そして、わたしのために、自分を捧げ尽くしてくださいましたことについて、心をこめて感謝します。神様があなたたちに報いてくださるでしょうし、また、あなたたち自身も、この歳月のあいだに、あなたたちが種蒔いたものを刈り取るというゆえのように、この第一回総会で決議することから、なにがしかの喜びを見いだすよう希望します。わたくしも、祈りと奉仕活動をもつて、この会に貢献するために、ただのマードレとして、老シメオンのように、わたくしの「ヌンク・デイミッティ

彼女を動かしたこの決定の真意と精神は、神の意志への服従と信仰に燃え尽きた存在に光をあてた眺望の中でのみ把握できる。それについて解説や解釈を試みることは、祈りと神との親密さの充滿を航跡として残しながら、長い年月の間に熟していった選択のこれほどの透明さを曇らせる危険を、確かに、冒すことになるだろう。長年、マリア布教修道女会とザベリ才会神学校の霊的指導司祭の立場にあるアマート・ダニーノ神父の貴重な証言だけが、おそらく、この決定の奥には、マードレ・チェレスティーナの信仰に根ざした毎日の生活があることを、わたしたちに垣間見させてくれる。

もかかわらず、わたしが、つねに、あなたたち一人一人に対して大きな愛を生き生きと心に抱き続け、また人々の救いのために、あなたたちの魂をイエスに捧げようという極めて強い望みを持っていることを、みなさんはよくご存じです。さあ、大きな信仰と、生き生きした希望と、燃える愛情をもって、総会が示す神の御旨が、どのように表現されようとも、受け入れられる準備をしましょう。マリア様が、私たちの間にいてくださいますように、また、その愛と母性的な取りなしの力で神に取り次ぎ、使徒たちを助けられたように、わたしたちをも助けて下さるよう、精一杯祈りましょう。

マードレ・チェレスティーナ・ボツテゴ」。

ス（主よ、今こそあなたは、去らせてくださいます）」（ルカ2・29）を歌いたいと思います。

あなたたちがよく理解しているとおり、わたしたちの会は発展しているのであり、新しい活動に立ちむかうには、ますます、新鮮なエネルギーと若い才能を必要とすることでしょう。わたしたちの会は、前進し、しかも、歩調を緩めることはできません。ですから、より深く観察し、わたしのすべての娘たちの活動を見守りながら霊的に助けるために、私は身を引きたいと思いません。

ご承知のとおり、この会の創設に当たって、わたしは、私たちのスパニョール神父様の招きに大変戸惑いました。これほど負担が重い事業にたいして、必要な才能を持ち合わせていないことを自覚していたからです。わたしの「はい」は、わたしに替わる人々が出てくるまでの間、この事業を始めようとする神父様を助けようと思つてのことでした。ものごとは、わたしが当初予測したのとはかなり異なる方向へ向かいました。でも、席を譲る考えは、いつもはつきりとしていました。今は、主がこの責任を解こうとしていらつしやるように思います。そして、わたくしは快くわたくしの娘たちに譲ります。

謹んで、まず、神に、そしてわたしのいと愛する娘たち全員を代表するあなたたちに、赦しを乞いたいと思います。わたしのあらゆる弱点と欠点に

「私は一九四〇年ごろ、われわれの神学校に英語を教えに来たとき、マードレ・チェレスティーナを知りました。その時から、一九四六年に、あなたたちの修道会の家族ができた時までのことは、憶えていません。一九五〇年頃から、定期的にあなたたちの所へ通い始めて、マードレとも話しました。毎週一度、定期的に、かなり忠実に通いました。その時以来、次第に、毎年、マードレの動静には注目してきました。」

……生命を伝えることだから、はつきりしているのは、ときどき、苦しみがあり、しかも、苦しみは鋭いときも、たまには、劇的な苦しみするときもあります。それが法則です。死ぬことなくしては、良いもの、深いもの、純正なものを、生み出すことも創造することもできません。それは当たり前のことです。仮に、あなたたちが、ここに存在しているとすれば、必然的に、大きな苦しみの実りとして存在しているのです。

このようにして、マードレ・チェレスティーナは、生命の、最も美しく、最も高く、最も意味が深く、最も重要な到達点に登りつきます。それは、前もって死を受け入れた時、つまり、辞任したときです。一九六六年でした。マードレ・チェレスティーナは、死の十四年前に、死ぬ意志を表明しました。ここに、マードレの真の偉大さがあります。それは、象徴的で、なお著しく預言的価値をもつ行為です、自らの死の始まりが即母性の始まりだからです。

これに類似する行いをするに成功するとき、つまり、死の中に埋没して、隠れるために、子が産まれるのをそのまましておくように、他の人々が行動するのをそのままにしておくときがきたと悟ることに成功するとき、その瞬間こそ、その人が、十字架の光り輝く神秘の中に導かれて入ったことの証拠です。それは、決定的瞬間です。

もし、マードレが、あなたたちにとって、私たちにとって偉大であるとするれば、その偉大さは、まさにこの大きな出来事の中でこそ、華やかに、よく輝いているのです。母であることに前もって死んだときほどマードレが、本当の母であったときは、かつてありません。その瞬間から、母としてのマードレの生命が、毎週のように私たちがくり返し黙想した通り、あの大きいなる言葉を教えるために始まったのです——「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハネ12・24)。

「主よ、今こそあなたは、去らせてくださいます」

ルカの福音書は、希有の熟達した筆致をもって、神殿で幼子イエスを腕に抱き、いと高き主を祝福しながら救い主の運命を預言する、あの神を畏れる義人、シメオンを語る。

シメオンの目は、救いを見たので、あの「ヌンク・デイミッテイス」主よ、今こそあなたは、去らせてくださいます」を喜びに溢れて歌う。もはや、彼の心は、彼の宝があるところ（神の御国）にある、そして、この老いた義人は、そこに急いで往こうとする。彼の歩みは、まるで鹿のように軽く、彼の目は、この世を向いて視力を失い、異邦人を照らす光を向いて開いている。

生命が、信仰の上昇線をたどり、時が来て、マードレ・チェレスティーナは、自分の「ヌンク・デイミッテイス」を、透明な声で、霊的身支度を整え、喜びに溢れ、ごく自然に、気品をもって、今こそ歌声をあげる時だと悟ったのだ。大きく眺め渡すと、彼女の人生は、終始衰えることなく、運命の曲折に屈することがなかった。強さと優しさ、広い心と慎み深い生活、尊厳と謙虚、権威と奉仕が彼女の中で融合して、類いまれな生活の調和をたもっている。

熟達した芸術家のように、彼女の振る舞いは、いずれもごく自然だった。その自然さは、長いあいだの絶え間ない錬磨と、決して、最終目標からそれまいとする内的緊張の果実なのだ。

強い性格と豊かな個性にめぐまれたチェレスティーナは、生来の能力を、柔和と謙遜によつて、指導者、長に作り替えた。開かれた、そして、勝れた知性を持ちながらも、決して、自分の名声や名誉ある地位を追い求めようとはしなかった。彼女は、富と、繁栄と、快適な生活を約束する社会環境に生まれ育ちながら、すべてを貧しい人々に与えて、心の柔和、謙遜な師イエスに従うことを心得ていた。

「マードレー母」としては、母の特典を特権とせず、かえって、沈黙の中で、意識的に自らを葬り去って、奉仕の特典とした。高貴な婦人としては、名も無き人とも、偉大な人とも、同じくおおらかに、奉仕の精神をもって、共にいることを心得ていた。何人の影をも怖れず、つねに、自分の周辺で発見され、刺激を与える善に、しみじみ満足した。権力と、権威を笠に著て僭越的に特権を行使する問題については、決して凡庸に陥らなかつた。雅量があり、つねにおおらかに見、とりわけ赦すことを心得ていた。彼女の着想の模範である聖母マリアのように、マードレ・チェレスティーナも、まずは、信仰の人であった、その結果、慎み深い女性であり、まことの女性であった。聖母マリアについて云えば、マードレ・チェレスティーナは、すべての造られたもの、特に最も弱く最も貧しい人に対するマリアの母性的な心遣いを愛した。聖母のように、彼女は、神の「時」を信頼して待ちながら、心に愛の秘密を納めることを心得ていた。しかし、マリアがカナに向かったように、

「主よ、今こそあなたは、去らせてくださいます。」

愛に駆られて、救いの宣言を先回りして、まるで、せき立てるかのように、この時は、先に走ったのだ。

聖母マリヤのように、何よりもまず、婦人であり、母であることを心得ていた。婦人、その原語は「女主人」もしくは「奥方」、そして、母、最も真実な意味で、命を与える人。豊かな人間性と洗練された女性の特性を、決して、放棄しなかったし、精神優先主義もしくは慣例優先主義の姿勢に屈することはなかった。つねに、自分の内的自由の水を、聖書の透明な泉から汲み取り、つねに、生けるパンの創造的力が自分を形造るままに委せた。

だから、彼女の「ヌンク・デイミッティス」は、終曲でありながら、最後ではなく、彼女の全生涯を貫く唯一の主旋律のヴァリエーションにすぎない。それは、神の御旨のままの寛大な、無条件な「フィアット」なれかし」である。

『過ぎ越しの種々相』の光の中で

一九六〇年初頭頃にはじめた本部の改築、増築工事は、すでに完了した。ポツテゴ荘園の側に、元の建物はそのままにして、五階建ての新建築ができた。近くに、基礎工事で掘った土を二、三メートルばかり盛り上げて、華やかに「丘」と名付け、その上にファティマの聖母マリヤと三人の牧童の像を飾った。それは、そこにあるだけで、今でも美しい景色になっている。ことに、午後の陽が当たる建物の南面からは、田園とアペニン山脈の眺めが心を和める。マードレ・チェレスティーナの自室は、ちょうど、四階南面だった。過去の出来事と想い出が一杯詰まったこの田園の生命と季節の移り変わりを、部屋の窓からみつけて観想するのが好きだった。

一九八〇年代に新しく造成されたシドリ地区を横切っている幹線シドリ道は、そのころは、マリア布教修道女会の建物とポツテゴ家の畑とを分かち自然道路で、マローレ方面へ通じ、これと直角に交わる名もない狭い農道が、畑地に伸びていた。農道に沿って、ブドウの古木の列が遠くまで続いて視界から消えていた。この世界の季節の移り変わりを、マードレ・チェレスティーナは、よく知り愛した。五月の晴れ渡った日、麦が、まだ、青々と風に波打っているのが、真っ赤なけしの色と重なって、まるで、疲れ知らずの舞踊のよう

だった。夏、日照りの日は、酷暑のなかで、「パパ・パッテイスタ」が植えた大きなクルミの木が、莊園を護って優しい蔭をつくり、しばし、休息の場となった。

鍬で耕したばかりで、肥料を施した土の塊りからは、刺激性の強いほかほかの蒸気がたちちのぼり、そして、陽光は、黄や赤に染まって揺らぐぶどうの葉の上で戯れた。初秋の美しい日々、希有な愛情と尊敬をもっていつも傍にいる最初の姉妹ラヴィニアと連れだって畑の周りを歩いている姿が、しばしば見受けられた。二人は、ロザリオを唱えながら歩き、マードレ・チェレスティーナが、しばしば「美しさ」を発見するたびに、立ち止まっては自然の様々な姿を観想した。どの季節にも、彼女の目には、それぞれに異なる美しさがあり、しかも真実だった。冬も、濃い霧と、木々や畑の生気を奪う湿気が多くて刺すような寒さも、マードレ・チェレスティーナは、感謝の笑顔で歓迎した。彼女は、人生の季節をも、同じように歓迎して生きることを心得ていた。実際、総会長職の辞任は、同じく重要で決定的な新しい季節のはじまりだった。それにともない、最初に熟した実の色を味わうことが許されたし、冬の剥奪を免れることもなかった。

新しい総会長と評議会に宣教会の指導を任せると、チェレスティーナは、独自の役割を改めて自覚した。それは、母であること。ほぼ完全に、祈りと文通に没頭するため、宣教会の業務から慎重かつ段階的に手を退いた。祈ること、遠くにいる娘たちに書くこと、娘たちがイタリアに帰国したときには歓び迎え入れること、あるいは、出発するときには連れ添うこと、どのような状態のときでも、喜びのときも悲しみのときも、みんなと共にい

ることが毎日の仕事になった。その歳月、愛に限界を定めることを欲せず、愛でつながる「家族」の潤滑油となり続け、愛の証拠として、彼女の筆と心からほとばしり出た書簡は、数百通にのぼる。だが、まさにその頃、肉体的・精神的試練にあつていた。どの成長過程にも見られるように、若きマリア布教修道女会にも、困難と苦悩、無理解と緊張はあつた。マードレ・チェレスティーナは、散発性ヘルニアの手術後、肉体的に弱っていたが、この試練と不確実性を、いつもの強い精神力で乗り越えて、変わることなく穏やかさと平和をたもった。

そのころの書簡にも、また、ジャコモ神父の書簡にも、逆光で撮影した写真のように、二人が生きていた時代の状況と、すべての人の命のもととなる「過ぎ越しの神秘の死」に、ますます全面的に傾倒していった精神的状況が滲み出ている。キリスト教的メッセージの核心に根ざすこの神秘の生き生きとした体験が、両者の親交と霊的交流の場を新たに深め、この家族の豊穡を確かなものにした。一九六九年、キリストの最後の晩餐を記念する聖木曜日、過ぎ越しを記念する典礼が全面的に盛り上がる中、マードレ・チェレスティーナはジャコモ神父に書いた。

一九六九年聖木曜日

「いとも敬愛する神父様、今日イエスがなされることは、計り知れないお恵みです。」

わたしたちの神への愛における一致が、この会の喜びと、力と、救いになるでしょう。他には、なにも望みません。わたしたちと、わたしの姉妹たちとの間のこの一致が、つねに、ますます超自然的で、生き生きとしたもの、深いものになりますよう、イエスに祈り求めます。

イエスが、わたしたちを祝福し、神への愛において聖化してくださいますように」。

両者が共に生きていた心の奥の実態を暗示する、含蓄に富むことばである。これに対して、ジャコモ神父は復活祭の日にごう書いている。

一九六九年復活祭

「こよなく敬愛するマードレに、

今ほど、あなたがイエスと一つになり、神への愛において完全であるのを感じたことはないと確認し、もって、最も美しく喜びにあふれる私の心からの挨拶を贈ります。キリストの神秘体が、私たちの霊的絆を、つねに、ますます、強めています。愛をこめて」。

ジャコモ・M・スパニョーロ神父

ほんのしばらくの後、一九六九年五月二十四日、カプリリヨの「はい」の日の二十五周年記念日、ジャコモ神父は、もう一つの書簡でこう云う。

とこしえに！

「いとも敬愛するマードレ、

主の憐れみをとこしえに歌いましょう！「フィアット（なれかし）」のお陰で、マードレはマリアに似た人になりました。十字架のカルヴァリオへつづく完全な献身、また、栄光にいたる過ぎ越の神秘の「フィアット」です。私たちの力が及ばないにもかかわらず、永遠の昔から、主が私たちを知り、望まれました。主が、私たちを、主と等しい永遠の命の状態の中で結び合わせてくださいます。主に、すべての誉れと栄光がありますように！

マードレ、私の望みは、神の愛がいつもあなたとともにあること。それ以上の変わらぬ愛はないからです愛」。

あなたのジャコモ・M・スパニョーロ神父

『過ぎ越しの種々相』の光の中で

内的体験と現実の歩みを頭わすこの過ぎ越の神秘へのこだわりは、もはや生活そのものになった。その年、はじめて、ジャコモ神父の回状の主要テーマとして、過ぎ越の神秘が明瞭に記述されたのは偶然ではない。

「過ぎ越しの神秘を生きることが、神崇拜と諸徳実践のすべての面を含む霊的生活全体のまとめです……」

宣教者として、わたしたちは、「イエスの証人」、とくに復活の証人であらねばなりません。要するに、公会議が述べているように、歴史的キリストの過ぎ越しの神秘を宣べ伝え、神秘的キリストの過ぎ越しの神秘を実践しなければなりません。そのことは、効果的に説教できるためには、わたしたちが、過ぎ越しの神秘を生きていることを前提しています。なぜなら、もしも、わたしたちの生活の実態が、話していることに合わなければ、わたしたちのことはの証明はむなしからず」。

この「過ぎ越しの神秘」中心主義思想は、マードレ・チェレスティーナとジャコモ神父の生活の中でますます明白になり、この二人の書簡と教育の中でますます明瞭になっていく。病み、もはや死が迫ったとき、ジャコモ神父は、こう書く。

「私たちにとっては、すべてが過ぎ越しです。時間を過ごして永遠に向かうこと、

神の生命の中で生まれ成長すること、

罪の後に再生すること

徳性を完成すること

恩恵を増す秘跡のひとつひとつ

神と聖霊の賜物のひとつひとつ

情念からの解放のひとつひとつ

聖なるミサのひとつひとつ

悪にたいする勝利のひとつひとつ、

典礼に深く参加することのひとつひとつ……

宣教者、過ぎ越しの種々相を告げ知らせる特権を与えられたわたしたちは、

この神秘の教説と生活の専門家であらねばなりません……」。

この過ぎ越しの種々相の韻律が、つねにマードレ・チェレスティーナの存在に拍子を刻んでいた。とくに生涯の最後の歳月、まさに生命の成り行きそのものが、心の奥にある愛しいものになりたいすべての愛着を、情け容赦なく断ち切るとき、そうだった。神である庭師から剪定される度に、そのひとつひとつにたいして、マードレ・チェレスティーナは、慎み深く、全面的に「はい」と答えることを心得ていた。姉のマザー・マリア・ジョヴァンナが、インドで四十二年間にわたり宣教活動したのち、一九六八年四月七日、イタリアに帰国し、一九七〇年一月三十日逝去したときも、兄のヴィットリオが一九七二年八月二

日、急死したときも、このように生きた。冒険、探検、特に宣教によって精一杯自己表現した一つの家族の最後の相続人、マードレ・チェレスティーナは、家族に与えられた神の計画の、それぞれにことなる豊穡にたいして感謝しながら、「最後」までの生存を「み摂理」として受け止めて生きた。

「母の胸にいる幼子のように」

一九七六年春、ブラジル、北米、メキシコと宣教地巡察の長い旅から帰ると、ジャコモ神父は、健康がすぐれないことを訴えはじめ、それから二年足らずで死亡した。長期にわたる検査の結果、はじめて病状が判明したのは、一九七七年四月のことである。同年十月十三日、ミラノのカピタニオ病院で、初回の切開手術を受け、右肺に悪性腫瘍が確認されたが、残念ながら手術は不可能とされた。病の浮き沈みと、死期がちかいつとの意識が、ジャコモ神父に「過ぎ越の神秘」の未踏査の領野を開示した。その時期の神父の書簡には、永遠性、過ぎ越、喜びに関することばが豊富に使われている。たとえば、こう書いている。「このような目的地に近づくとき、ものごとは一層はつきりしてきます。この残された命を、われわれが永遠の存在となるあの国の、愛の勝利の序曲として、生きねばならないと、ひとしお強く感じます。しかも、これらすべてを、大きな喜びの中で、なぜなら、大きな出合いの前祝いなのですから」。ジャコモ神父は、この「出合いの祝い」にむけて、常日頃、あれほどに愛し、内的生活のヒントにもなり、また徹底的に生き抜いた詩編百三十一の歌のとおり、穏やかに、主に信頼しきってその日の準備をした。「わたしは魂を、幼子のように、母の胸にいる幼子のようにします」。

健康状態が当てにならないまま、ベルナデッタに聖母御出現の百二十周年を記念して、一九七八年二月十一、十二の両日、ルルドへ旅した。その帰途、こう書いている。「はつきりとわかった。最大の善は、残される者にあるのではなく、豊かな実りをもって目標に到達する者にある。聖パウロの表現の内容が明瞭になってきた。パウロは、外的人間の衰退は内的人間の肯定と強化であると見ている。前者が弱体化するほど、後者が勝利する。キリストと共にいるために自由への限らない願望をもつパウロ的展望は、日没のしるしのひとつひとつを、新しい日の出の予兆という喜びの動機に変えてしまう」。

マードレ・チェレスティーナは、ジャコモ神父の病状がゆっくりと進行するのを心から案じながら見守った。ジャコモ神父の命の最後の時を、肉体的苦痛をも神秘的に共に担いながら、沈黙し、病氣と完全な献身との中で生きた。事実、一九七七年の末頃、悪性乳腫瘍と診断されて、一九七八年二月十八日、手術を受けた。ジャコモ神父の病状が重いことを意識して、マードレ・チェレスティーナは、峻厳な素振りで自分の病状を隠し、ほとんど沈黙して過ごした。だが、ゆっくりと、しかし避けようもなく、二人は剥奪と死の過程を完了しつつあった。二人が地上で共に生きたすべてのできごとは、即ち、光へ向かう「過ぎ越の神秘」を完全に実現する準備だった。あたかも、この神秘の完成であるかのように、ジャコモ神父は、教会の典礼歴で聖週間に入った一九七八年三月二十二日死亡した。朝の七時二十分だった。本部の共同体では、御聖体の神秘の典礼を行っている最中、奉獻の歌が始まった瞬間だった。翌日、聖木曜日、長い間、ザベリオ宣教会の総長だったジョヴァ

ンニ・ガッツ司法が御聖体祭儀を司式して、ことばを述べた。「今日、私たちは、この主の晩餐の典礼で、主イエスが、ことばに言い表せない行いをもって、世の中において、絶えることなく続けようと思図した救いの働きを記念しています。私たちのいとも愛するジャコモ神父の遺体の前で、私たちの生涯を通して消すことができないこの感銘的な、典礼と符合するできごちに心をとめて、私たちもすべてを新しくする記念の祭儀を繰り返しましょう」。

葬儀は、聖金曜日、愛された娘たち、マリア布教修道女会の宣教師たちと、多くのザベリオ会司祭、家族、友人たちが参列する中、ザベリオ会の聖堂で挙行され、当時のザベリオ会総長ガブリエレ・フェツラーリ神父が、参列者に向かって挨拶した。「まさに、主の受難と死を記念するこの厳肅な聖金曜日の典礼が、わたしたちに、地に蒔いた種は死なないことを思い起こさせます。朽ち果てますが、終わりません。生命が続くように、生命を与えるために朽ち果てるのです。……わたしたちが、この兄弟の亡骸を地に埋めるとき希望は、生きた希望です。それは、今日、キリスト者の世界で、われわれの歴史の原点として記念するところの、罪なくして、すべての人のために死んだキリストの十字架に懸けられた希望です。キリストに関わるこの歴史の塊りの傍らに、われわれの小さな歴史、ジャコモ神父の歴史、彼に結びつくものすべてを安置しましょう—キリストと共に死ぬ者が、キリストと共に復活できるために」。

この年、ジャコモ神父の過ぎ越の時は充ちて、天国で完成した。その何週間か前、ジャ

コモ神父は、一九七八年復活祭の日付で、最後の回状を認めている。

「愛する皆さん、

光と、キリストの復活の喜び、そしてわたしたちの喜びに満ちた復活祭が、再びめぐってきました。……わたしは、砂漠のこの世の中で、あの『永遠』の序曲であるこの世の命の端っこで生きているのを感じています。『永遠』の中では、ものごとは、もっと真実で、もっと絶対的で、もっと神聖な色彩に満ちた新しい光を帯びます。世の中に生きてはいませんが、心は、すでに私たちに先立って平安のまどろみの中で私を待っている人々のところにいます。

……このような見方を悲しみと思わないでください、むしろ、私はそのことで感動し、内面の喜びに満たされています。この世の私たちの全生涯は、習慣的に、あるいは潜在的に、次のように方向付けられているべきです―『わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めているのです』（ヘブライ13・14）。『キリストと共に復活したのなら、天上のことを求めなさい……』。

ここにこそ、最近の私の精神の目に映る過ぎ越の展望があります。生存は、自然の面から見ると、現象的な死をもって終わりますが、信仰の面から見ると、時間を超えて、その主軸である現実に沿うことなのです。

聖パウロにとってイエスの復活は、私たちの中で、私たちの霊的復活を実現するにちがいないのです。霊的に復活した私たちは、すでにこの世において、過ぎ越の光で絶え間なく照らされながら、信仰と愛の喜びの中で、天の絶対的な未来の現実を霊的に生きるのです」。

マードレ・チェレスティーナは、この重大な事件の中で、沈黙と信仰をもって生き、また、そのような状況のもとでも、高貴さと分別を失うことはなかった。彼女は、内奥の苦しみを、もういちど心に秘め、歳月と試練には、ほとんど疲れを見せず平静だった。もはや、同じその過ぎ越の神秘の中に包まれて、過ぎ越の神秘の完成に向かって手をさしのべて、肉体をつなぎとめるものから解き放たれる準備に入っていた。その数年前のこと、一九七五年六月二十一日、ジャコモ神父は、誓願二十五周年を記念して、ブラジルから、彼女にこう書き送っている。

「敬愛するマードレ、

あなたの二十五周年記念日にあたり、心から喜びの挨拶をおくりします。私は、愛情と大きな感謝の心をもって、あなたの近くにいます。天の御父の家で、一緒に味わうであろう喜びに、思いを馳せています。主は、地上で、ご自分の事業のために、私たちを霊的に結ばれました。主は、つねに、ご自分

の栄光を分け与えるために、御国でも私たちを常に一致させてくださるでしょう。永遠を思うことは、なんとすばらしいことでしょう。なんと慰めに満ち、勇気づけられることでしょう。天の国を思うとき、地上も、ひとしお美しくなります。

すべてについて主に感謝、そして、あなたにも。私のことを神の声として信じたからです。信仰は、ほんとうに大きなことを行います。主の名において挨拶の抱擁を送り、また、マードレのために心から祈念します。七月二日には、私がそこに居ると思ってください。みんなで、そこにいます。

ジャコモ神父

いまや、神父は、死の喜びに満ちていた。チェレスティーナにとっては、まだ先のことだったが、遠くはなかった。このような展望に忠実であり、また、すでに永遠の上に投射されたマードレ・チェレスティーナは、三月二十六日、ジャコモ神父の死からわずかに四日目、過ぎ越の典礼の最後を飾る復活祭の日、愛するすべての娘たちに書く力を得た。

「わたしのいとも愛する娘たちへ、

わたしたちにとって、わたしたちのジャコモ神父様との別れは深い痛みです。しかし、わたしは心の奥底で、それを神の贈り物だと信じます。今、神

父様は、神の御旨をよりよく明らかに示してくださいましょう。そして、わたしたちは、御旨を理解し、また、神父様が望み、しばしばわたしたちに話してくださいましたように、すべてが、より高い次元の存在に変わるでしょう。もはや、死すべき人についてではなく、神の賜物、神がこの会に与えようとお望みになった賜物を反映している神父様の霊についてわたしたちは話しています。

神父様を思うとき、神父様との交流は、これから、ますます単純になります。ますます深められて実を結ぶに違いないと感じます。神父様は、全生涯、地上の一人間として、力のかぎり、ご自分のすべてをわたしたちに与えてくださいました。いまは、神の近くで、もっと大きい富を手にして、わたくしたちが愛することができるようになりました。わたしたちひとりひとりの向上と聖化に関与することができるようになります。皆さん全員が、天でわたしたちを待っている神父様の近くにいるのを感じます。わたしの心からの愛情をこめて、あなたたちを抱擁します」。

あなたたちへの心からの愛情をこめて

マードレ・チェレスティーナ

これが、マードレ・チェレスティーナの本当に最後の回状になったのは、偶然ではない

ように思える。ジャコモ神父の死をもって、彼女は、創立者としての存在の点でも、意識的に、別の現実の世界に入っていった。彼女がしたのは、早々と帆を下ろすことではなく、古代の儀式に喩えると、「供え物の儀礼として祭壇に神酒を注ぐ」ことだった。まだ生き残ったのは、すべてを挙げて、清い、御心に叶う献げ物になるためだった。

「はい、主よ、私はここにいますー」

ジャコモ神父の死は、マリア布教修道女会の全家族に空洞を残したが、継承すべき豊かで重要な精神的遺産も残した。一九七八年九月、神父の死後わずかに六ヶ月で、マリア布教修道女会の第三回総会が開催された。議事日程は、主に新会則の検討と起草にあてられた。

事実、公会議の刷新以降、すべての奉獻生活団体が、教会の指針と創立者のカリスマに忠実に沿いながら関係会則を改訂するよう求められていた。この重大でデリケートな時期にジャコモ神父―創立者が急逝したことは、肌沁みて痛く、重大な損失に思えたが、逆説的には、その欠落が、かえって彼が遺した本当のカリスマの再発見をうながし、責任感を盛り上げた。

マードレ・チェレスティーナは、このような会議の進行が容易ではないことを意識して、この家族とともに歩み、その年齢と健康に問題のある人にしては驚嘆すべき熱心な態度で、総会の種々の会合に参加し、また、各地方の宣教活動の進展のために心をくだいた。

しかし、二月の手術の後遺症が、やがて、憂慮すべき症状をあらわした。懸念されていた腫瘍転移が現れ始めた。マードレ・チェレスティーナは、ますます疲労が増幅すること

を訴え、身体の衰弱は進行した。しばしば、一日中病床で過ごすようになったが、四階の自室には、真昼の太陽の明るさがあり、微笑みは絶えなかった。必ず両手を抜げて洗練された美しい態度で、訪問者を歓迎するのが特徴的だった。

一九八〇年六月初旬、主治医たちの勧めにしたがい抗胚芽療法を受けて、なにがしかの効果はみられたが、総体的には悪影響をおよぼした。八月初旬、パルマのステュアート病院に入院せねばならなくなったが、ほどなく退院した。治療の効果を期待できないことが明らかになり、マードレ・チェレスティーナが「家」に帰りがつたからである。八月のそのころは、パルマ市は、格別に、息切れするほど蒸し暑く、砂漠の沈黙のような静かさだった。シドリ道の向こう側には、夏の真つ盛り、日に焼かれてびくとも動かぬ煙が物憂く拡がっていた。

マードレ・チェレスティーナは、北側のやや涼しく、静かな部屋に移された。窓からは、蟬の暑苦しい鳴きごとと、クルミの老木の枝で跳ねる雀の囀りが聞こえた。多くの姉妹たちはパルマから遠く離れて、夏期の活動に携わっていたが、マードレ・チェレスティーナが重体だと知って、帰りを早めた。

本部は、普段は、あれほど活発で生命に溢れていたのに、静まり返って、その時を待っていた。ゆっくり最期を迎えるマードレの邪魔にならないようにと気づかって、皆が、当たり前のようにつま先で静かに歩き、廊下ではささやくように小声で話した。

極度の衰弱にもかかわらず、マードレ・チェレスティーナは、すべての娘たちを、やさ

しく、感謝して迎えた。そのような日々を繰り返したのは――「祈りましょう……祈って……わたしのためにしてくれたことすべてに感謝」だった。つねに他の人々を心にとめていた。ときとして、うたた寝して目が覚めると、近くにいる人に「わたしは、眠りました……で、あなたは？休みに行きなさい」と、云うのだった。終わりの時が、すでに近づいたことを意識して、付き添っていた姉妹が、苦しみが多いかどうか尋ねたとき、こう答えた――「主がご存じです……」、そして、ちよっと休んで――「わたしに起ころうとしていることを、知らないと思えますか？……許しをお願いします、すべてについて。やっと終わりになります」。

衰弱が烈しかったので、しばしば、ことばを完結できなかったが、特に感動をおぼえたとき、枕元にいた数名の姉妹に云った――「愛する娘たち、(キリストの神秘体の)一つの部分になりましょう(ヘコリント12・27)……難しいこと、難しいこと。どうあるにしても、わたしたちは皆、前進したいのです……主がわたしたちにお望みになっていることを探し求めましょう……あなたたちを祝福します……あなたたち全員を祝福します……ありがとう、すべてにありがとう」。

八月十八日午後、格別に疲れた日、家にいる幾人かの年配の客人に会いたいといい、特別に深い愛を込めて「彼女のザベリ才会の宣教師たち」について尋ねた。ガッザ司教がザベリ才会会員を代表して、また臨終の祝福を与えるために病床を訪ねた。翌十九日、呼吸困難が増した。しばしば、「はい、はい」、あるいは「はい、主よ、私はここにいます！」

を繰り返した。

午後、十六時三十分、ガッツ司教の提案により、チェレスティーナの病室でミサが行われ、これに全員が参加し、ミサの途中で病人の塗油の秘跡がさづけられた。御聖体拝領のとき、生命をふりしぼるようにして、マードレ・チェレスティーナは、いつもの挨拶と歓迎の身振りで両腕を拡げ、目を輝かせながらハッキリした声で「アーメン」と力強く精神集中して答えて、居合わせたすべての人の心を打った。夜、やや快方に向いたかに見えるが、深夜、また悪化して、十二時数分過ぎに息を引き取った。八月二十日だった。享年八十四才八ヶ月だった。

遺骸は、ただちに整えられ、礼拝堂に移され、共同体の全員が集まって祈った。夜が明けると、その礼拝堂でガッツ司教がごミサを捧げ、遺体の周囲には、家族の強力な繋がりの雰囲気を感じられた。

説教の間、悲しみよりも、もつと強く、マードレ・チェレスティーナのような人物を与えられたことに対する神への感謝の気持ちがある場にあふれた。司教は、こう話し続けた。こどもの時からずっとチェレスティーナを知る恩恵を神から戴いたが、彼女の中に、曇りも傷も決して見たことはない、彼女は、常に福音に沿って生き、変わることはなかった、と。

パルマとの別れ

マードレ・チェレスティーナの訃報がパルマに拡がると、すぐに長い行列ができた。夏の盛りで、人々は避暑地において、街は閑散としているのに、棺の周りの列はとぎれることがなかった。葬儀は、司教座聖堂で八月二十二日に行われることになった。そのように、パルマ市とパルマ司教区が、マードレ・チェレスティーナに、最後の愛情と感謝の意を表わすことを望んだ。司教座聖堂での公葬に先立ち、本部の礼拝堂で、略式ながら感動に溢れる別れの儀式が執り行われ、ガッツ司教が次のように述べた。

「あなたがたたちがマードレと呼んでいるこの宣教会の家族の母親が、全生涯を生きたこの家を去ります。マードレは、十五才のとき、アメリカ合衆国からこの家に来て、七十年間この家で生活しました。この家で円熟し、また、到着点も窮地からの脱出口も全く予知できない自分の人生を円熟させました……。

この家は、またこの近辺に住んでいる人々のちよつとした中心でもありませんでした。ポツテゴ女史を知らない人がいるでしょうが？ 彼女が、自分の人生を、自分の奉獻生活を少しずつ成熟させたのは、ここなのです。でも、わた

したちにとっては、彼女の姿はいつも同じでした。私が、マードレ・チェレスティーナを実際に知ってから、五十年経ちますが、私が云いたいのは、私にとって今日のマードレ・チェレスティーナは昨日のポツテゴ嬢だということです。この家で、自分の奉獻生活を円熟させただけでなく、自分の心の宝を、愛情を溢れるばかりに注ぎました。裕福な身分にありながら、マードレ・チェレスティーナはいつもすべての人への奉仕の精神で生きたのです……。そして、家が発展してポツテゴ嬢はマードレ・ポツテゴになり、マードレ・マードレという名称が、ことのほか、彼女にまさにピッタリで、適切だと、特に私は云いたい。マリア布教修道女会を始めて、彼女の母性は、本当に大きく、地球のように大きくなりました。ここで、マードレは、人生を終えました。正確には、自分で生きたとおりの人生を終えました。

この数日、あなたたちの近くで生活して、私は平静と信仰と愛という精神的土壌を捉えることができました。これこそ、マードレ・チェレスティーナがあなたたちに遺した最も美しい遺産だと思います。なぜなら、彼女は、この遺産で信仰を生き抜き、この遺産で宣教会を創設し、この遺産のために自分の命を捧げたからです」。

この儀式を終えて、葬列は、市警察オートバイに先導され、また両脇を護衛されて会葬

の多くの人々が群がる司教座聖堂に向かった。そこには、祈りながら待つ多くの司祭、修道女の姿があった。チェレスティーナの娘たちが棺を抱えて聖堂の中央を進む間、沢山の素朴な人たちが、列を乱して棺に近づき、最後の別れを惜しみながら棺に手を触れ、口づけした。素朴で慎ましい信頼を表現する動作だったが、また、時を超えて往く人に捧げる愛情と感謝の表現だった。

パルマの司教アミルカレ・パシーニ司教が司式し、ガツザ司教、ティソット司教、また、フィデンツァのザンキン司教、福音宣教聖省次官補佐スカルゾット師、ザベリオ宣教会総長ガブリエレ・フェツラーリ師、および遠路はるばる駆けつけたザベリオ会司祭を含む百名ぐらいの司祭がミサに共同参加した。このとき、自分を捧げものとした慎ましい生命の意義、すでに世界に拡げられた母性の意義が顕わになった。

パシーニ司教は、福音書から「幸いなる人」の箇所を朗読したあと、きわめて手際よくマードレ・チェレスティーナの姿を描写した。

「マードレ・チェレスティーナに会うときは、いつも、このような印象をうけました―満足している人、信頼と平静と、兄弟たちの中にいるイエスを愛するようになんかを招く心の光を放っている人でした。いつでも！ わたしは、チェレスティーナは、福音の幸せを完璧に実現したと申し上げたい……。いつでも、種々の機会に、チェレスティーナと会ったときは、かならず、感

嘆し、また教えられました……あれほど大きい魂が、また背丈も、その人柄も、その身振りも大きかったのですが、すべての人の前で小さく、慎ましくなっていました……。

イエスの言葉の中で、女史がとても愛していたのは次のことばです。『わたしは、心が柔和で謙遜な者だから、わたしに学びなさい』（マタイ11・29）、そして、神の僕コンフォルティ司教のことばを自分のものにしていました――『もし、善を行おうと思えば、柔和であれ。もし、もつと善を行おうと思えば、もつと柔和になれ。もし、無制限に善を行おうと思えば、無制限に柔和であれ』。そして、マードレ・チェレスティーナは、つねにそうでした」。

最後の儀式を終えて、「私は信じる。復活するだろう」の歌の中、マードレ・チェレスティーナの棺は、祭壇に最後の別れをすると、再び娘たちの腕に抱えられて、満員の聖堂の広い中央をはずしと霊柩車が待つ玄関にむかった。たちまちできた長い葬列がヴィツレッタ墓地に行き着く前に、ゆっくりとパルマの街と道路を巡りながら進んだ。パルマ全市の表情豊かな沈黙の挨拶だった。亡骸はいま、姉マザー・マリア・ジョヴァンナと兄ヴィットリオと、最初に亡くなった宣教会の姉妹たちの側に安らかに眠っている。そこは、ジャコモ神父の遺体を護っている墓からもさほど離れていない。二人は、一緒に、すでに世界の各大陸に散らばった彼らの家族を祝福し、導き続けている。事実、母性や父性の冠を戴

くためにイタリア、日本、ブラジル、メキシコ、ザイールから来た新しい姉妹たちが、彼らの存在の根と存在理由を、あの御国の交響曲のなかに見いだしている――「すべての舌が、主の栄光を歌うだろう」。

あざやかな追憶

はじめてマードレ・チエレスティーナに会う人は、彼女の笑顔と、彼女の姿から滲み出ている穏やかさに心をうたれた。背が高く、頑強で、また見た目にも貫禄があり、たちまち、くつろいだ気分させる母性的な甘い優しさをもちあわせていた。父親譲りのイタリヤ的風格と、母親譲りのケルト的風格が、適当に美しく組み合わせられていた。面立ちは、卵型で線が整い、微笑むと、時にはおどけたり時には内省的になったりして明るかった。大きな青い目は、澄み切っていて、穏やかであり、まるで、内奥の存在が彼女を突然他の世界に惹きつけるかのように、内面的な思慮深い表情をつくることを心得ていた。

風貌は、彼女の愛しかたが、剛と柔をあわせもっていたように、粹で、素朴で、気品があった。年を重ねて、足取りが弱まってからでも、彼女には、深い穏やかな威厳が残っていて、尊敬の念をいだかせた。しかし、彼女に近づく人たちに感嘆と愛情とが入り交じった気持ちを起こさせたのは、ただ風貌だけではなかった。自分の中に、秘密をもっていたのだ。それが、彼女の本当の住まいであり、また彼女が日常的に生きている世界だった。その世をわれわれに開示するのは、一九六五年五月十一日付けで、彼女が「いとも愛する娘たち」に出した回状である。書中、彼女は、無意識に自分の姿を描いている。

「わたくしのいとも愛する娘たちに

五月は、マリア様に普段よりもっと熱心に、またもういちど靈的に一致するるときです。……聖母マリアが生きた内的世界を想ってください、それを、わたしたちの靈魂にしばしば現れる悪の靈の世界と比べてごらん下さい。わたしたちの選択決定の心の準備を常にとのえておくためには、両方の世界について明確な考えをもっていなければなりません。

マリア様の世界は、全部が光と単純さです。その世界では、平和に苦しみが加わっていますが、信仰と、愛と、希望に生きているのです。その世界に生きる人は、わたくしたちの祝福された聖母のように、強く、穏やかで、忍耐深く、逆境にあっても柔和です。聖母のように、沈黙の中で苦しみ、心の奥底から許すことを心得ていて、自分を探し求めませんから、どこにでも、平和と喜びをもたらします。人々を待ち受けることを心得ていて、理解すること、ゆるすこと、なぐさめること、母親のように勇氣づけることを心得ています。わたくしたち、マリアの宣教師は、このような世界で生きる道を選んだのです……。

一生涯つづくこの戦いのあいだ、聖母が、わたくしたちの近くにいて助け下さるでしょう。あなたたちの魂の明るさ、光、単純さは、その戦いの勝

利から生じるでしょう。この役割を果たすために、わたくしも母親のように、あなたたちの側近くにいます」。

それは、全生涯つづいた役割だった。チエレスティーナは、ナザレトのマリアにまったく同化し、「フィアット（なれかし）」から、カルワリオの死の沈黙にいたるまで、聖母とともに神秘と信仰の道をふたたびたどりながら歩いた。女性、処女、母である聖母マリアの中に、チエレスティーナは、キリストにたどりつく道を見いだし、まさに女性、母性として、世にキリストを与える方法を見い出した。

したがって、「マリアの宣教師」という名称は、チエレスティーナの人格と霊性的容姿を適切に表現している。カブラリオの山中で発した最初の「フィアット」から、死の直前に発した「アーメン」まで、彼女は聖母と完全に同一化した。彼女の生涯をロザリオに喩えることは、それはあるまい。ロザリオの祈りの中で記念される喜びと、悲しみと、栄光の救世事業の神秘が、もういちど、世界の歴史にはつきりとしたリズムをつけたのだ。

マードレ・チエレスティーナの聖母にたいする信心は、彼女の書簡のほとんど全部に顕れる常数である。ジャコモ神父が指し示した女性宣教師の理想を、彼女はどれほど寛大、忠実に自らの血肉としたことか。ジャコモ神父は、一九六九年にこう書いている——「私たちの修道的宣教師精神をまとめて表現すると、それは、キリストの過ぎ越の神秘をマリアのように生きることです。霊的に、マリアのように、天上の生命を地上で生きることです。

……聖母は、イエスに完璧に同化して、聖パウロの言葉を自分のなかで完全に実現しました——『キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものをもとめなさい。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい』(コロサイ^{3:1,2})……つまり、この文脈では、私たちのためにも、マリアとおなじ霊的生活態度と人生目標をもって生きること、すなわちキリストの過ぎ越の神秘に私たちが参加することが論じられているのです……」。

チエレスティーナ・ボツテゴは、この理想を、自分のものにし、完全に生き抜き、他の人々にも、信じられ、実現可能なものにした。マリアに感謝しながら、女性の中の女性チエレスティーナは、自分の女性らしさを歌にし、自分の母性に教会と世界を包んで贈り物にした。

最期の時、チエレスティーナの耳には、確かにあの幸せの歌がもう一度鳴り響いたにちがいない——「信じた方は、なんと幸いででしょう」(ルカ1・45)。

一八九五年二月三日、パルマにおいて、グイド・M・コンフォルティ参事会員がエミリアーノ外国宣教師養成所創立。

二月二〇日、米合衆国オハイオ州グレンデルで、ジャン・バッティスタとメアリー・ヒリーリーの次女チエレスティーナ・ポツテゴ生まれる。

一八九六年一月一九日、グレンデル教会で、チエレスティーナは、ニコラウス・ケリー神父から洗礼を受ける。

三月、メアリー・ヒリーは、小さいマリアとチエレスティーナを連れて夫が働くビュッテ(モンタナ州)に帰る。

一八九七年三月一七日、ジャン・バッティスタの弟、ヴィットリオ・ポツテゴ探検隊長が、アフリカ東部の地理探検中に、ドガ・ローバで殺される。

一八九八年一月三日、エミリアーノ外国宣教師養成所は、聖フランシスコ・ザベリオ外国宣教会(通称ザベリオ宣教会)と名称を変更して、教会公認宗教団体に昇格。

一八九九年三月四日、コンフォルティ司教の最初の宣教師カイオ・ラステツリ神父とマニーニ助祭が中国へ出発。

一九〇〇年四月二四日、パルマ司教マガニーニ師が、マルテ広場のザベリオ会新本部の定礎祝別式挙

行。

一九〇二年五月二二日、教皇は参事会員コンフォルティ師をラヴェンナ大司教に指名。

六月一日、コンフォルティ師は、ローマの聖ペトロ大聖堂で司教叙階。

一九〇三年一月六日、コンフォルティ司教は、公式にラヴェンナ司教区事務を引き継ぐ。

一月二〇日、教皇レオ十三世逝去。

八月九日、ジュゼッペ・サルトが教皇に選出されてピオ十世と称する。

この年、ジャン・バッティスタ・ポツテゴは、妻とチエレスティーナをビュッテ(米国モンタナ州)に残したまま、まだ小さいマリアとヴィットリオを連れてイタリアに帰国。

一九〇六年三月四日、布教聖省は、ザベリオ外国宣教会を教皇直轄修道会として認可。

六月三日、チエレスティーナ・ポツテゴは、ビュッテ(米国モンタナ州)の聖。パトリック教会で初聖体と堅信を受ける。

一九〇七年九月二四日、ピオ十世は、コンフォルティ司教をパルマの継承権付き補佐司教に指名。二月一二日、パルマのフランチェスコ・マガニーニ司教が急死。

一九〇八年三月二五日、コンフォルティ司教は公式にパルマ司教区事務を引き継ぐ。

五月一日く六月二六日、パルマに、第一回農民ストライキがおこり、五七日間つづく。一九二〇年六月二四日、チエレスティーナ・ポツテゴは、モンタナ州が認める年次成績最優秀賞を受けて中学校を卒業。

初秋、チエレスティーナは母親と共にイタリアに渡り、パルマのサン・ラザロに住む父親、兄弟、祖母といっしょになる。

一九二二年一月三十一日、ロツツオ(ヴィチエンツァ)で父マテオ、母カテリーナ・ステファニーニ

の長男ジャコモ・スパニョーロ生まれる。

四月二日、パルマの司教座聖堂で、コンフォルティ司教は、西河南省(中国)の教皇使節代理に指名されたザベリオ会員ルイジ・カルツァ神父を司教に叙階。

一〇月八日、コンフォルティ司教は、教区内第一回聖体大会開催を指示。

一九二四年八月二〇日、ピオ十世逝去。

九月六日、ジャコモ・デツラ・キエザが選ばれてベネディクト十五世教皇になる。

一九一五年五月二四日、イタリアはオーストリア・ハンガリーに對戦布告する。

一九一六年七月四日、チェレスティーナはパルマのサン・ヴィターレ大学の師範科卒業免許。

一〇月三十一日、コンフォルティ司教とマンナ神父(PIMEミラノ外国宣教会)の発案により、宣教師連合会が公式に誕生し、コンフォルティ司教が一九一八〜一九二七年、同会長となる。

一九一七年一月二三日、チェレスティーナはピサ大学で英語教員免許取得。

一九一八年一月四日、イタリアは対オーストリア・ハンガリー戦に勝利して終戦。

一月一日、第一次世界大戦は關係諸国全域で終戦を迎える。

一九一九年五月二五日、ベネディクト会修道士エマヌエレ・カロンティ神父が、パルマのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ修道院の大修道院長に着任。

一九二〇年七月一日、カロンティ大修道院長はトツレキアラ(パルマ県)の修道院で男女のオブラーティ(在俗奉獻生活者)運動を再興する。

一九二二年一月二二日、教皇ベネディクト十五世逝去。

二月六日、アキツレ・ラツティが教皇に選出され、ピオ十一世と称する。

十月二十八日、「ローマ行進」。ベニト・ムッソリーニがイタリア政府の総統となる。

一九二三年九月二四日、ジャコモ・スパニョーロはザベリオ会神学校に入る。

一九二四年、パルマで、第二回聖体大会開催。

六月二日、チェレスティーナの姉マリア・ボツテゴはマリアの聖フランシスコ宣教師道女会に入会する。一〇月、チェレスティーナはパルマのロマニョーシ高等学校で教壇に立ち始める。

一九二七年一月九日、チェレスティーナの姉マリアは宣教師としてインドへ出発。

一九二八年七月〜一〇月、チェレスティーナはフランス語完成のためグルノーブル大学に行く。

九月一九日〜一二月二八日、コンフォルティ司教は自分の宣教師たち訪問のため中国へ行く。

一九二九年二月一〇日、チェレスティーナの母、メアリー・ヒーリー逝去。

二月一日、イタリア国とヴァティカン市国の間でラテラノ条約締結。

一〇月、米国で経済恐慌はじまる。やがて欧州にも拡大。

一九三一年四月二〇〜二四日、コンフォルティ司教は、教区内に典礼教育週間を設けることを指示。

十一月五日、パルマ司教、ザベリオ宣教会創立者グイド・マリア・コンフォルティ司教逝去。

一九三二年、チェレスティーナはパルマ赤十字社の看護婦養成講習に通う。

一九三三年、チエレスティーナはロマニョーラ高等学校を辞任して、パルマのマチエドニオ・メツ

ローニ技術専門学校に転任。

一九三四年、チエレスティーナはドイツ語習得のためインスブルック大学に行く。

一月一日、ジャコモ・スパニョーロはザベリオ会本部で司祭に叙階。

一九三五年、チエレスティーナはパルマのザベリオ会神学校で英語を教えはじめる。

夏期、ストラスブルグ大学に語学完成のために行く。

一月五日、チエレスティーナの父、ジャン・バツテイスター・ポツテゴ逝去。

一九三六年七月三〇日、チエレスティーナは宣教師の姉、マザー・マリア・ジョヴァンナをインドに訪ねる。

一九三八年六月三〇日、チエレスティーナはフィレンツェのブリティッシュ・インスティテュート

で新しく英語教員資格取得。

一九三九年二月一〇日、ピオ十一世逝去。

三月二日、教皇にエウジェニオ・パチェツリが選出され、ピオ十二世を称する。

九月一日、ナチ・ドイツはポーランド侵攻し、第二次世界大戦の口火を切る。

一九四〇年六月一〇日、イタリアは対フランス・イギリス戦に突入する。

一九四一年三月一八日、コンフォルテイ司教の列福調査が司教区内ではじめられる。

一九四二年春、スパニョーロ神父は女子ザベリオ会創設を考えはじめる。

一九四三年七月二日、スパニョーロ神父の要請により、ロマーノ・トゥルチ神父がチエレスティーナに女子ザベリオ会創設の礎になつてもらいたいと願い出たが、チエレスティーナは受け

入れなかつた。

七月二五日〜九月八日、ムツソリーニの失脚と連合軍との停戦協定。

八月一三日、ジャコモ・スパニョーロ神父はパルマの大神学校院長に任命される。

一九四四年五月、ジャコモ・スパニョーロ神父は、ますます烈しくなる都市爆撃を逃れるため、神学校の学生たちと一緒にパルマ・アペニン山の山村カプリリオに疎開する。

春、ポツテゴ荘園はドイツ軍指揮所として接収されたため、チエレスティーナはカプリリオに疎開して、一部屋間借りして住む。

五月二四日、カプリリオで、チエレスティーナは女子ザベリオ会創立の協力を求めるスパニョーロ神父の申し出を受け入れる。

七月二日、ジャコモ・スパニョーロ神父とザベリオ会神学生たちはドイツ軍捕虜となりビッビアーノ（レッジヨ・エミールリア）の強制収容所に入れられる。

七月三日、全員釈放される。

一九四五年四月二五日、第二次世界大戦終了。

七月一九日、サン・ラザロにテレザ・ダニエリが来る。彼女は、ザベリオのマリア布教修道女会の第一号姉妹になる。

九月一三日、チエレスティーナ・ポツテゴは、宣教会の最初の姉妹たちとともに、パルマ郊外のマリアーノに移る。

一九四六年六月二〜三日、国民投票を経て、イタリア共和国が誕生。

九月五日、スパニョーロ神父はザベリオ宣教会総顧問に選出される。

- 九月三〇日、チエレスティーナ・ポツテゴと最終的にポツテゴ荘園に移転して、そこをザベリオのマリア布教修道女会本部とする。
- 一九五〇年七月二日、マードレ・チエレスティーナはザベリオ宣教会総長ジョヴァンニ・ガツザ神父の手に初誓願を立て、次に彼女の手に最初の三人の姉妹―テレザ・ダニエリ、エリザベッタ・ベッルツチ、ラヴィニア・モレスキーが誓願を立てる。
- 一九五四年八月七日、マードレ・チエレスティーナはロゼッタ・セツラを連れてアメリカ合衆国へ船出し、ピーターシャム(マサチューセッツ州)のザベリオ会修練所の近くにマリア布教修道女会最初の拠点を築く。
- 一九五五年七月二日、パルマのエヴァジオ・コツリ司教は若きマリア布教修道女会を司教直轄の修道会に昇格。
- 一九五六年七月二日、マードレ・ポツテゴは、同じ宣教会の最初の三人の姉妹とともに、サン・ラザロの小教区教会で無期誓願を立てる。
- 七月二五日、若い二人の姉妹宣教師―マリア・グレキ、テレザ・デル・ガウデイオが、アンドレア・ドリア号の遭難により痛ましい最後を遂げる。
- 一九五七年五月二〇日、マードレ・チエレスティーナは、姉妹ジャンナ・リンジャルデイ、エリザ・カスパリーニ、アンナ・キレットティを連れてブラジルへ出発し、パラナ州にマリア布教修道女会の新しい支部を開く。
- 一〇月、日本から二人の新しい姉妹、チエチリア・横田、ジェンマ・田村が到着する。
- 一九五八年一〇月九日、カステルガンドルフオでピオ十二世逝去。

- 一〇月二八日、アンジェロ・ロンカツリが教皇座につき、ヨハネ二十三世と称する。
- 一九五九年八月三〇日、三人の姉妹ワンダ・デ・ローザ、マッダレーナ・ストッコ、カテリーナ・ロイが日本へ出発する。
- 一九六〇年二月二〇日、マードレ・チエレスティーナはコンゴへ新しい宣教活動をはじめめるために出発し、姉妹トマジーナ・カサリー、リリアーナ・ファンティーニ、ロゼッタ・マンチーニ、カミッラ・タリアブエが同伴する。
- 一九六一年一月一五日、コンゴに発生した動乱により、マードレ・チエレスティーナと四人の姉妹たちはブルンデイに移動を余儀なくされる。
- 一月一七日、パトリス・ルムンバが殺害される。コンゴは混沌に陥る。
- マードレ・チエレスティーナはベルギー人のアフリカ宣教会の神父たちの提言を受け入れてブルル(ブルンデイ)の宣教活動支援を決め、同地にマリア布教修道女会最初の共同体を設立する(一九六一年四月一八日)。
- 四月六日、マードレ・チエレスティーナはブルンデイを立ち、パルマに帰る。
- 一九六二年七月一五日、コンゴのウヴィイラに新しく司教区が設立され、ザベリオ会のダニロ・カルツィ司教がその任に着く。
- 一〇月二一日、教皇ヨハネ二十三世は莊嚴に第二ヴァアティカン公会議を開会する。
- 一九六三年六月三日、教皇ヨハネ二十三世逝去。
- 六月二一日、教皇の座にミラノの大司教ジョヴァンニ・バッティスタ・モンティーニ枢機卿が登り、パウロ六世と称する。

一九六四年年の初め頃、コンゴで内乱が烈しくなる。動乱は、ザベリオ会の神父や姉妹たちが活動しているキヴに波及する。

五月一六日、ウヴィラのカタルトイ司教ほか教区の男女宣教師が抑留される。

八月二六日、マリア布教修道女会姉妹フェリチタ・タツテイ、カミツラ・タリアブエ、マウラ・ロカテツリは、他の宣教師、ベルギー人のシスターたちとともに捕虜になる。

一〇月七日、ベルギー落下傘部隊の介入により、ウヴィラの宣教師とマリア布教修道女会の姉妹たちは解放される。

十一月二日、布教聖省はマリア布教修道女会を教皇庁直轄の修道会として認可。

一九六六年二月一日、マードレ・チエレスティーナはマリア布教修道女会第一回総会開催を指示。

九月二一日〜一月八日、パルマでマリア布教修道女会第一回総会開催。

九月二四日、マードレ・チエレスティーナは総長職辞表を提出、娘たちに会の運営を委ねる。

一九六八年四月七日、インドからマードレ・チエレスティーナの姉マザー・マリア・ジョヴァンナ・

ポツテゴが四十二年間の宣教活動を経て帰国。

一九七〇年一月三〇日、マザー・マリア・ジョヴァンナ・ポツテゴ逝去。

一九七二年八月二日、マードレ・チエレスティーナの弟ヴィットリオ・ポツテゴ逝去。

九月二〇日、マリア布教修道女会第二回総会開催、一九七三年二月一〇日閉会。

一九七七年一〇月一三日、ジャコモ・スパニョーロ神父はミラノのカピタニオ病院で右肺手術を受ける。

一九七八年二月一八日、マードレ・チエレスティーナはパルマの病院で乳腫瘍手術。

三月二二日、ジャコモ・スパニョーロ神父はパルマのマリア布教修道女会本部修道院で逝去。

三月二六日、マードレ・チエレスティーナはマリア布教修道女会の姉妹全員宛に最後の回状を書く。

九月七日、パルマで、マリア布教修道女会第三回総会開催。

一九八〇年八月二〇日、マードレ・チエレスティーナ・ポツテゴはパルマのマリア布教修道女会本部修道院で逝去。

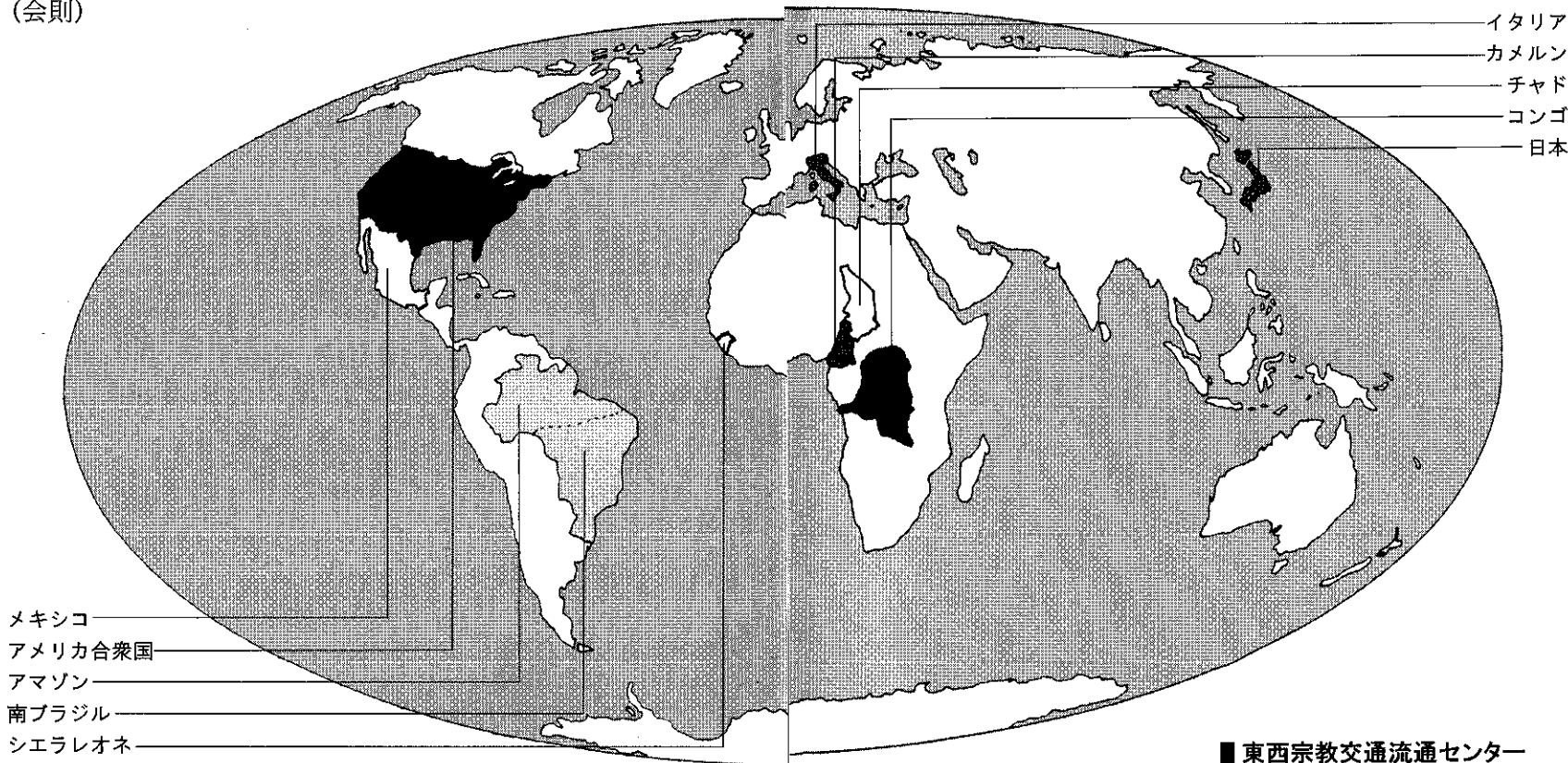
世界中のマリア布教修道女会

教会の使命にあずかっている本会は、
まだキリストを信じていない人々や団体に遣わされ、
福音の最初告示、新しいキリスト教者の共同体の形成、
また、福音宣教を十分果たせないでいる教会の育成、
宣教精神の促進の奉仕に専念する。

(会則)

父がわたしをお遣わしになったように、
わたしもあなたがたを遣わす。

(ヨハネ20,21)



本部：和泉修道院

☎594-0061 和泉市弥生町2-7-2
Tel 0725-43-4335/Fax 43-2082

泉南修道院

☎590-0521 泉南市樽井9-8-13
Tel&Fax 0724-82-5059

宮崎修道院

☎880-0913 宮崎市恒久6-11-12
Tel&Fax 0985-50-5958

東西宗教交通流通センター 生命山カトリック別院

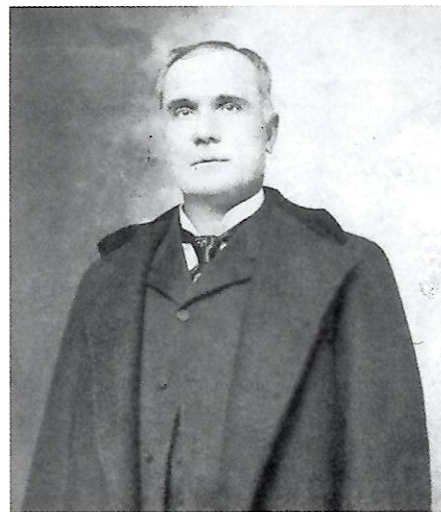
☎865-0133
熊本県玉名郡菊水町靖浦1391-7
Tel 0968-85-3100/Fax 85-3186



探検家ヴィットリオ・ボッテゴ、ジャン・バッティスタの弟／アフリカへ出発の前



チエレスティーナの母親
メアリー・ヒーリー



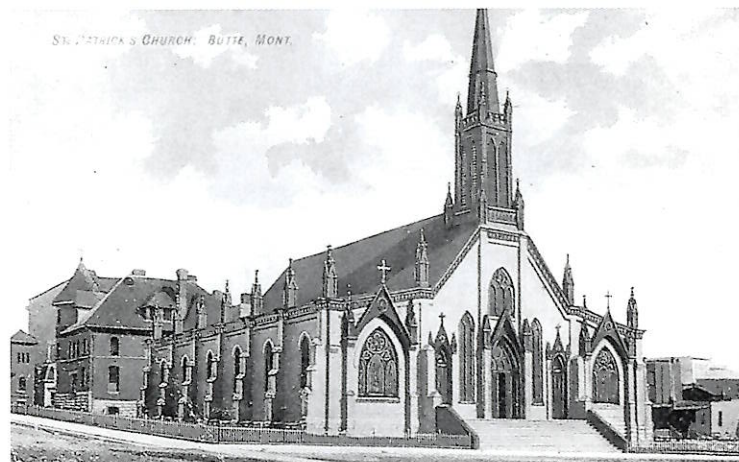
チエレスティーナの父親
ジャン・バッティスタ・ボッテゴ



ビュッテ(モンタナ州)七歳のときのチェレスティーナ



米国オハイオ州のグレンデール／チェレスティーナ出生当時の印刷物から転載



米国モンタナ州ビュッテの聖パトリック教会／チェレスティーナは、この教会で初聖体と堅信を受けた



1907年バルマ／イタリアに到着直後のチェレスティーナの兄弟マリアとヴィットリオ・ポッテゴ



1906年6月3日／チェレスティーナ・ポッテゴがピュッテ(モンタナ州)の聖パトリック教会で初聖体を受けたとき



パルマ/ヴィットリオ・エンマヌエレ街——今世紀初頭の風景



パルマのサン・ラザロにあるポッテゴ荘園部分/チェレスティーナは、はじめは、ここで家族と生活し、後には、ここに彼女の宣教師たちを受け入れた



1910年ビュッテ(モンタナ州)/チェレスティーナは、モンタナ州優等生の表彰を受けた



十七歳のチェレスティーナ・ポツェゴ——莊園に連なるブドウ畑で



パルマの司教・福者グイド・マリア・コンフォルティ——ザベリオ宣教会創立者
1995年3月17日、ヨハネ・パウロ二世教皇より福者に列せられた



パルマで赤十字社看護婦としてボランティア活動したころのチェレスティーナ



ピサ大学の学生時代のチェレスティーナ



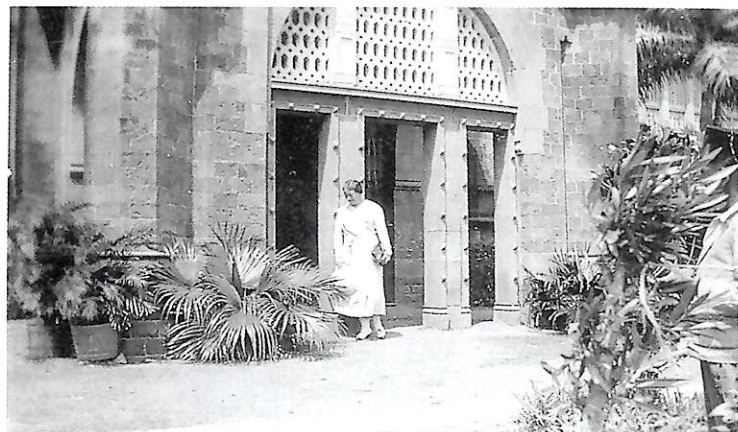
バルマのマチエドニオ・メッローニ技術専門学校のクラスの学生たちと一緒にチェレスティーナ



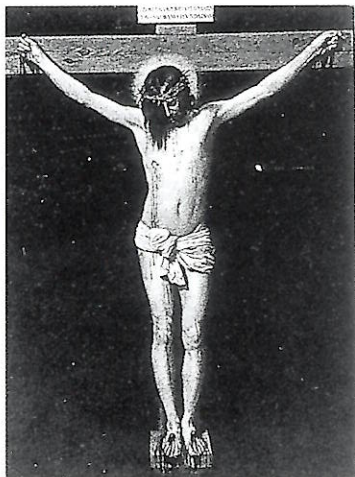
1954年／弟ヴィットリオと一緒にチェレスティーナ



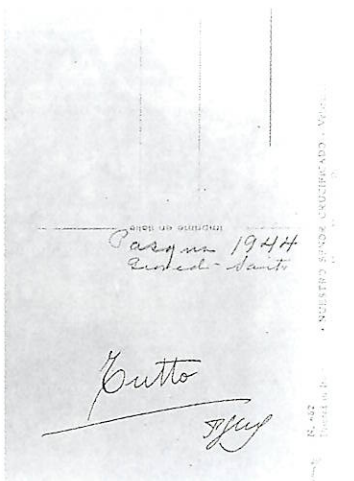
1934年夏／インスブルック大学の講座に出席した学生たちと一緒にチェレスティーナ



1935～36年／インドーボンベイで、ウェールズ侯博物館前のチェレスティーナ



1944年の復活祭のときスパニョーロ神父が、チレステイーナ・ボッテゴに送った
ヴェラスケスの十字架の絵はがき——TUTTO! すべてを!



カブリリオ(バルマ州)「はい」と答えたときの道



1950年/ジャコモ・スパニョーロ神父——ザベリオ会宣教師、マリアの宣教会創始者



若い会員が増えつづけて、大きくなっていくマリアの宣教会の若い家族



最初の三人の宣教会員と一緒にマザー・チェステイナ
左から ラヴィニア・モレスキ、テレザ・ダニエリ、エリザベッタ・ベッルッチ



アンドレア・ドーリ号沈没で落命したマリア・グレキとテレザ・デルガウディオ



1954年8月7日/
米国に船で出発するマザー・ボッテゴとロゼッタ・セッラを見送るスバニョーロ神父



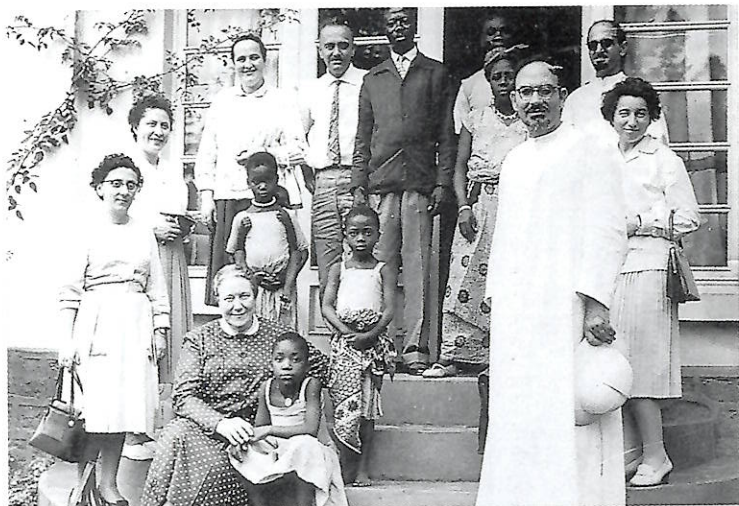
最初の総顧問に選ばれた姉妹たちと一緒にマザー・チェレスティーナ・ボッテゴ/左から ジャンナ・リンジャルディ、リリアナ・ロッシ、マリア・ピア・アリエンティ、ヨーレ・ロッリの各姉妹



1957年／ブラジルへ出発するマザー・チェレスティーナ、ジャンナ・リンジャルディ、エリザ・カスパーニ、アンナ・キレットィの各姉妹を見送るスバニョーロ神父と親戚



共同体の膨張にともない施工された最初の増築



1960年／ブガヴー—アフリカ人の家族と面会



1959年8月30日／日本へ出発する——左から カテリナ・ロイ、ワンダ・デローザ、マダレーナ・ストッコを見送る船上のマザー・チェレスティーナ



1964年／聖座からの教皇庁直轄修道会認可をマザー・チェレスティーナとジャコモ神父に伝達するザベリオ宣教会総長ジョヴァンニ・カステッリ(写真中央)神父



1960年12月10日／左から ロゼッタ・マンチーニ、トマジーナ・カサリ、リリアーナ・ファンティーニ(写真では影になっている)と一緒にコンゴへ出発するマザー・チェレスティーナ



マザー・チェレスティーナと生涯離れることなかったマルチェリーナ



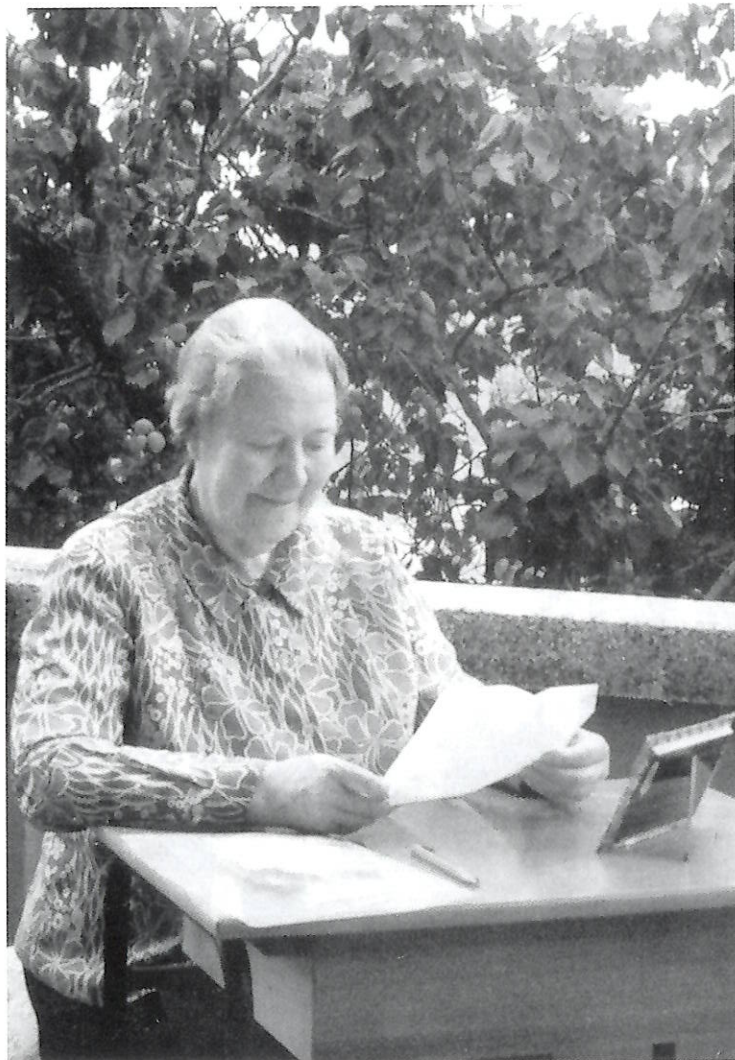
マザー・チェレスティーナが「はい」と答えたカプリヨの「御摂理の家」に帰った姉妹たちのグループ



1959年／マリア布教修道女会母院を訪れた布教聖省長官ピエトロ・アガジャニアン枢機卿



1968年／インドで42年間宣教活動に従事したあと、バルマに帰った姉マードレ・ジョヴァンナ・ボッテゴ——弟ヴィットリオと宣教会の娘たちと一緒に歓迎するマザー・チェレスティーナ



年老いて後は、彼女の娘であるすべての会員たちを、
具体的に、通信によって助けるマザー・チェレスティーナ



死のわずか前の頃にとったマザー・チェレスティーナとジャコモ神父の写真



マリア布教修道女会(ザベリオーマリア宣教会)のバルマ本部



1980年／最期の頃の写真——静かにこの世のもやい綱が解かれる日を待つ！



1978年2月12日／死の数ヶ月前、ルルド巡礼から戻ったジャコモ神父



いつもかわらぬ母性愛で宣教地からくる姉妹会員を歓迎する
左から 米国から帰ったステファニーナ・ロイと日本から来たマリア・岩瀬

[著書紹介]

マリア・デ・ジョルジ

神学者、マリア布教修道女会宣教師。
女史は、パルマで教育を受けたとき以来、マザー・チェレスティーナ・ボッテゴと知り合いになった。日本で15年前から、宣教活動に従事、とくに生命山カトリック霊性交流センターで諸宗教対話に専念し、それについては、著書「生命山—キリスト教と仏教のあいだの対話についての断章」(イタリア語、出版社EMI、ボローニャ—イタリア、1989)に述べられている。また最近、諸宗教対話に資するため「信仰を介して恩恵により救われた人たち—親鸞の信仰とキリスト教における恩恵の救い」(イタリア語、EMI、ボローニャ、1999)を著した。マリア・デ・ジョルジは、この著作でマザー・ボッテゴの人柄の全貌をはじめて明らかにし、また、その当時の教会の動向と歴史的背景を簡潔に描写することに成功している。